

164
744

明治二十六年十月出版

刑事訴訟法
法注解

附監獄則

東京 學友館發兌

036677-000-6

特14-188

刑事訴訟法・刑法注解

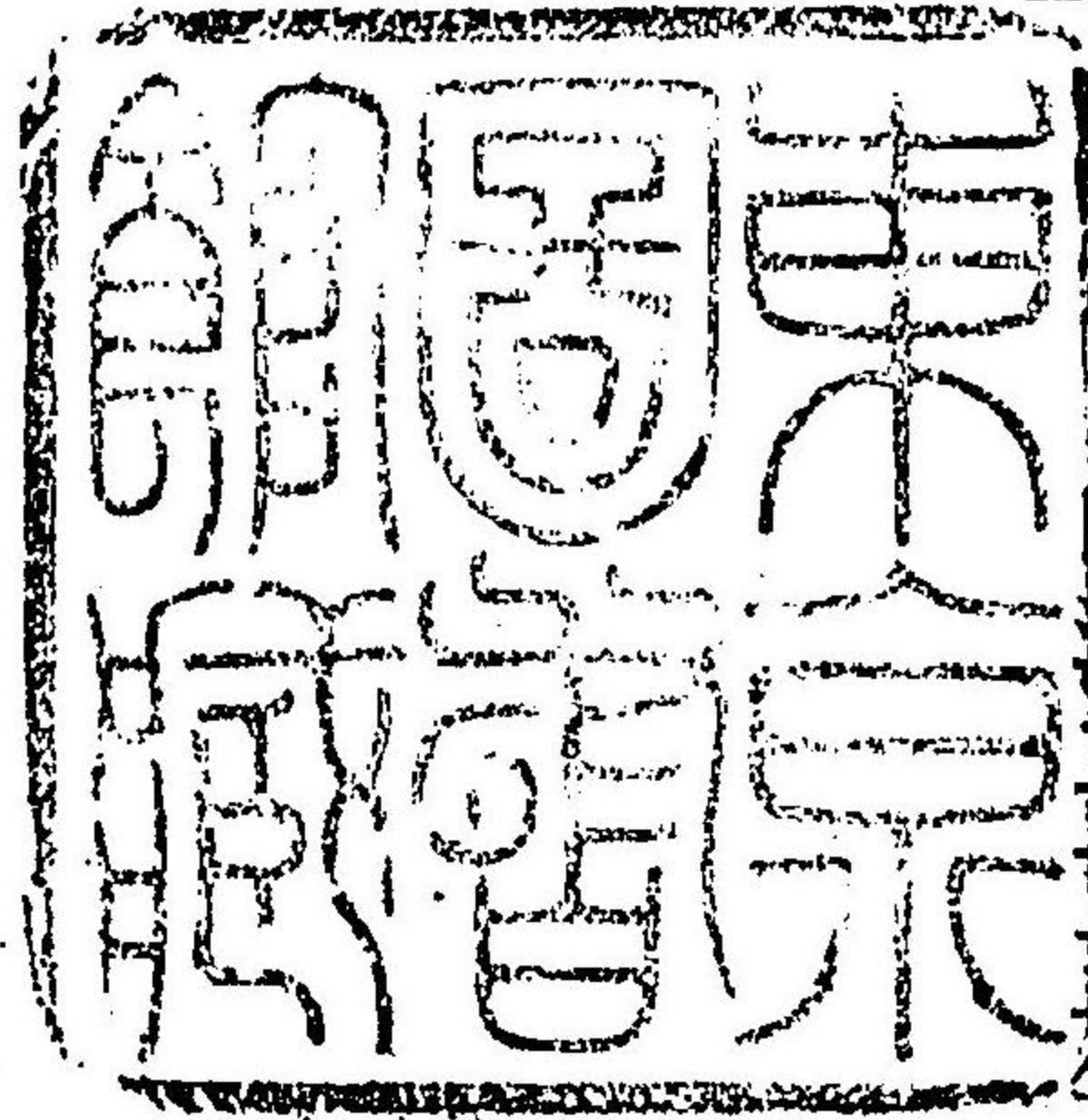
岡村 万五郎/著

M27

BBS-0097



特 14
188



明治三十三年十月六日

御名 御璽

朕刑事訴訟法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

農	文	海	外	遞	陸	大	司	內	內
商	部	軍	務	信	軍	藏	法	務	閣
務	大	大	大	大	大	大	大	大	總
大	臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	理
臣		子	子	伯	伯	伯	伯	伯	大
		爵	爵	爵	爵	爵	爵	爵	臣
陸	芳	樺	青	後	大	松	山	西	山
奧	川	山	木	藤	山	方	田	鄉	縣
宗	顯	資	周	象		正	顯	從	有
光	正	紀	藏	二	巖	義	義	道	朋
			郎	郎					



刑事訴訟法註釋目錄

- ◎ 第一編 總則
- ◎ 第二編 裁判所
 - 第一章 裁判所ノ管轄
 - 第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避
- ◎ 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審
 - 第一章 捜査
 - 第一節 告訴及ヒ告發
 - 第二節 現行犯罪
 - 第二章 起訴
 - 第三章 豫審
 - 第一節 令狀
 - 第二節 密室監禁
 - 第三節 證據
 - 第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質
 - 第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押
 - 第六節 證人訊問

- 第七節 鑑定
- 第八節 現行犯ノ豫審
- 第九節 保釋
- 第十節 豫審終結
- ◎ 第四編 公判
 - 第一章 通則
 - 第二章 區裁判所公判
 - 第三章 地方裁判所公判
- ◎ 第五編 上訴
 - 第一章 通則
 - 第二章 控訴
 - 第三章 上告
 - 第四章 抗告
 - 第六編 再審
 - 第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續
 - 第八編 裁判所執行、復權及ヒ特赦
 - 第一章 裁判執行

目錄終

刑事訴訟法註釋

(註) 刑事訴訟法トハ刑法ヲ運用スル方法ヲ規定シタルモノニシテ刑法ト主從ノ關係アリ
 テ相離ルヘカラサルモノナリ故ニ刑法ハイカニ善良ナレハトテ刑事訴訟法ニシテ其宜キ
 事得ルトキハ或ハ罪ノ有無ヲ誤認シ或ハ未決拘留反テ刑期ヨリ長キ等ノ事ヲ生シ被告
 人ニ少ナカテハ損害ヲ與フル事トナルヘシ故ニ一方ニハ好悪ヲシテ法網外ニ逸セシメ
 刑ヲ適用スル手續ヲ分チテ(一)捜査(二)起訴(三)豫審(四)公判(五)執行ノ五段トス以
 下順次ニ説明スルヲ旨
 第一編 總則
 第一章 公訴ノ犯罪ヲ證明
 第一條 公訴ノ目的ハ法文ニ示スカ如ク犯罪ヲ證明セシメ刑ヲ適用セシムルニ在リ而シテ公
 訴ノ實行ハ檢察ノ役目ナルモ公訴權ヲ有スルモノハ社會ナリ故ニ檢察ハ社會ノ代人トナ
 リテ公訴ヲ實行スルニ止マル社會ハ自身ニ公訴權ヲ有スルモ之ヲ行フノ能力ナキヲ以テ
 凡テ檢察ニ委任シテ之ヲ行ハシメタルナリ而シテ法律ニ定メタル區別ニ從フトハ犯罪ノ
 輕重又ハ犯人ノ身分等ニ關スル管轄ノ區別ヲ云フモノニシテ即區裁判所事件ニ付テハ全

檢事局檢事地方裁判所ニテハ全檢事局檢事長並ニ檢事控訴院ニ於テハ同檢事局檢事長併ニ檢事大審院ニ於テハ同檢事局檢事總長並ニ檢事カ公訴ヲ行フカ如キヲ云フ

○第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

(註) 犯罪ノ種類ニ由リテハ唯公益ヲ害スルノミニシテ私益ヲ害セサルモノアリ設令貨幣ヲ偽造シテ未ダ成ラサル罪ノ如シ然レトモ多クノ犯罪ハ公益ヲ害スルハ勿論延テ一人ノ利益ヲ害スル事アリ此場合ニハ公訴權ノ發生ト共ニ私訴權ヲモ發生セサルヘカラス而シテ其目的ハ損害ノ賠償若クハ贓物ノ返還ニ在ルナリ私訴權ハ何人ニ屬スルヤト云ハハ犯罪ノ爲メニ害セラレタル者即被害者ニ屬ス即社會カ公訴權ヲ有スルト同シク一個人ハ私訴權ヲ有スヘキナリ此損害賠償ノ訴權ハ一ニ民法ノ規定ニ從フモノトス
今ヤ公訴ト私訴ノ差異ヲ略言スヘシ

- (一) 公訴ノ目的ハ犯罪ノ證明刑ノ適用ニ在リ私訴ノ目的ハ損害ノ賠償ニアリ
- (二) 公訴權ハ社會之ヲ有シ檢事ハ社會ノ代人トナリテ之ヲ實行ス私訴權ハ犯罪ニ由テ害ヲ受ケタルモノカ之ヲ有シ且自ラ之ヲ實行ス
- (三) 公訴ハ必ラス常ニ刑事ノ管轄裁判所ニ提起セサルヘカラス私訴ハ公訴ト共ニ刑事ノ管轄裁判所ニ提起スルヲ得レトモ又別ニ民事訴訟法ニ從ヒテ民事ノ管轄裁判所ニモ提起スル事ヲ得然レトモ實際ノ便宜ヨリ云ハ刑事ノ管轄裁判所ニ公訴ニ附帶シテ提起スルヲ

簡便ナリトス

○第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又告訴私訴ノ拋棄ニ因テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第三者ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ公訴附帶ノ私訴ニ參加スルコトヲ得
(註) 前ニモ述ヘタルカ如ク茲ニ犯罪アリタリトセン社會ハ直チニ公訴權ヲ有シ檢事之カ實行ノ任ニ當ルヘク而シテ其犯罪ニ由リテ害ヲ受ケタル者即被害者カ告訴セサル間ハ檢事自由ニ公訴ヲ起スヲ得サルノ道理ナク又害ヲ受ケタル者カ一旦告訴シタルモ後ニ至リテ告訴ヲ取下ケタレハトテ公訴カ消滅スルトイフ道理ナシ是レ公訴ハ不獨特立ノモノニシテ被害者ノ告訴ノ有無又ハ拋棄スルト否トハ敢テ問フトコロニアラサル原則ヲ示シタルモノナリモシ之ニ反シ被害者ノ告訴ナキトキハ檢事ハ公訴ヲナスヲ得ス又被害者カ一旦爲シタル告訴ヲ拋棄シタルトキハ告訴モ亦從テ消滅スルモノトスレハ社會ノ公訴權ハ薄弱ノモノト云フヘクイカデカ社會ノ安寧秩序ヲ維持スルコトヲ得ンヤ
然レトモ是ニハ法文但書ノ如ク例外ノ場合ナシトセス刑法猥褻姦淫ノ罪有夫姦ノ罪誹毀ノ罪等ノ如キハ必ラス被害者ノ告訴ヲ待チテ然ル後檢事ニ於テ公訴ヲ提起スヘク而シテ一旦公訴ノ提起アリタルモ被害者カ其告訴ヲ拋棄シタルトキハ公訴モ亦從テ消滅スルトナルナリ其理由ハ或ハ被害者ノ暗中ノ耻辱ヲ明處ニ傳播シ却テ被害者ヲ害スルノ恐れアリ或ハ被害者ニアラサレハ罪ノ成否ヲ知ラサルモノアレハナリ

○第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌ公訴ニ付キ第二審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得

(註) 私訴ハ前ニ述ヘクルカ如ク損害ノ賠償ヲ目的トスルモノナレハ其性質ヨリイハハ民事ノ訴ニ外ナラス故ニ一ニ民事訴訟法ニ從ウチ當然ナリトスサレトモ其損害タル犯罪ニ原由スルカ故ニ法律ハ實際ノ便宜ヲ圖リ公訴ノ管轄裁判所ニ於テ附帶ノ請求ヲナスコトヲ許シタリ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌト明言シタルハ何ソヤ抑民事ノ訴ヲナスニハ訴訟物ノ價額ニ從ウテ裁判所ノ管轄ヲ異ニスルコトアリ假令區裁判所ハ百圓以下ノ訴訟ニ限ルカ如キ是ナリ然ルニ公訴ノ管轄裁判所カ區裁判所ナリトセンニ其私訴ノ請求高ハ假令百圓以上ナリト雖同シク區裁判所ヘ公訴附帶ノ請求ヲナスコト得ルトイフニ在リ而シテ第二審ノ判決アルマテニ限ルハ第三審即上告裁判所ハ事實ノ如何ヲ問ハスシテ法律ノ適用如何ヲ正スニ止マルカ故ニ第三審ノ場合ニハ之ニ附帶シテ私訴ヲ許スヘカテサルナリモシ私訴ヲ許ストセハ勢事實ノ點ニ及ホストナリ裁判所ノ權限ヲ破ル結果トナルヲ以テ也

○第五條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ム

ル妨礙ト爲ルコトナカル可シ

(註) 本條ハ民事ト刑事トノ責任ハ各箇獨立ノモノタルヲ示シタルナリ例之今竊盜ノ犯罪アリトシテ公訴アリタリトセハ事實ヲ審問シタルニ被告ハ竊取スルノ意ナク即自己ノ物ナリト誤認シテ他人ノ物ヲ領得シタル事分明トナリタリ此場合ニハ被告人ハ無罪ノ言渡ヲ受クヘシサレトモ其物件ハ必ラス民事上不當利得ノ規則ニ從フテ之ヲ所有者ニ返還セサルヘカラス

免訴ノ言渡ハ公訴消滅ノ原由ニ由リ(次條)言渡スヘキ場合ニシテ無罪ノ言渡ハ刑法ニ正條ナク又ハ不論罪又ハ證據充分ナラサルトキニ被告人ノ純白罪ナキコトヲ言渡スルモノナリ云フ故ニ無罪ノ言渡ト免訴ノ言渡トヲ混同スヘカラス共ニ刑罰ヲ科セサル點ハ同一ナリト雖免訴ノ場合ニハ犯罪ハ十分成立シタルモ特別ノ理由ニ基キ刑罰ヲ科セサル場合ナルモ無罪ハ元來犯罪ノ成立シタル廉ナク刑罰ノ制裁ヲ變フヘカテサルハ勿論ナル場合ニ言渡スヘキモノナリトス

○第六條 公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

- 第一 被告人ノ死去
- 第二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄
- 第三 確定判決
- 第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

第五 大赦

第六 時効

(註) 犯罪事實一タヒ生シタルトキハ社會ニ於ケル公訴權ノ發生スルモ永久無限ニ繼續スルモノニアラス或事實ニ由リテ消滅スルトナル其消滅ノ原因六種アリ

第一 被告人ノ死去 但該ニ云ク死人ニ口ナシト死者ハ自ラ辨護スルヲ得ス故ニ或ハ冤罪ヲ負フコトナシトイフヘカラス縱令犯罪ハ十分成立シタルモ刑罰ヲ死屍ニ及ホスノ必要ナシ刑罰ハ社會ノ安寧ヲ保護スルノ必要ヨリ來リタルモノナレハ被告人一旦死亡シタルトキハ刑罰ヲ課スルノ必要モ茲ニ消滅シタルモノナレハナリ

第二告訴ヲ待テ受理スヘキ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄 第三條但書ノ場合ニシテ被害者カ告訴ヲナシタルニ由リ公訴起リタルモ被害者カ一旦其告訴ヲ拋棄シタルトキハ官ヨリ強テ之ニ干渉シテ其事ヲ糾スヘキニアラス却テ被害者ヲ害スルトナリテ已マムノミ

第三 確定判決 適法ノ裁判所カ言渡シタル判決カ確定シタルトキハ其判決ハ絶對的ニ眞正ナリト推定セラレ同一ノ事件ヲ再ヒ審理スルコトヲ許サス判決ハ裁判官ノ言渡スモノニシテ裁判官ハ神明ニアラス故ニ其言渡シタル事モ誤謬ナシトハ保證スヘカラスサレハトテ其判決ノ確定シタルニ係ラス同一ノ事件ヲ審理スルコトヲ許サハ訴訟終結ノ期ナクシテ人ニ疑懼ノ念ヲ生シ安堵ノ思ヒヲナスコトナカルヘク却テ社會ノ安寧ヲ害スルトナルヘシ故ニ一タヒ公訴アリテ判決ヲ下シ其判決確定シタルトキハ茲ニ公訴ハ消滅セシムルコト

トナスナリ學者之チ一事不再理又ハ既判力トモ稱ス

第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ由リ其刑ノ廢止 犯罪ノ時ニハ刑アルヲ以テ公訴權モ發生シタリシモ其後ノ法律カ其刑ヲ廢止シタルトキハ社會ハ其所爲チ犯罪トセス即之ニ刑罰ヲ課スルノ必要ナク社會ノ安寧ヲ害スルコト足ラサルモノト認メタルニ外ナラス故ニ社會ノ有スル公訴權モ之ト同時ニ消滅スヘキハ當然ナリ

第五 大赦 大赦トハ一國主權ノ實行ニ由リ或種類ノ犯罪ニ對シテ其公訴及執行ノ權ヲ拋棄スルヲ云フ大赦ハ恰カモ罪ヲ消滅セシムルト同一ノ効力ヲ有シ學者或ハ之ヲ忘罪ト稱ス

特赦ハ天皇行政ノ大權ヲ以テ有罪ノ確定裁判ヲ受ケタルモノニ對シ刑罰執行ヲ免除スルモノナルカ故ニ公訴ニハ何ノ關係ヲモ生セス蓋シ特赦アリタルト否トチ問ハス公訴ハ確定裁判アリタルニ由リ已ニ消滅スレハナリ

第六 時効 時効ハ第八條ニ其説明ヲ讓ル

以上六種ノ原因中其一チ生シタルトキハ檢事ハ免訴ノ言渡ヲ請求スヘク判事ハ職權ヲ以テモ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキナリ其無罪ノ言渡ヲナスヲ許サ、ルハ此言渡ハ被告人ノ所爲ガ果シテ有罪ナルヤ否ヤ即本案ヲ審問スルニ及ハスシテ唯此本案外ノ原因カ發生アリタルニ由リ被告人ハ其審問ヨリ脫離スルヲ以テナリ

○第七條 私訴ヲ爲ス機ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 拋棄又ハ和解

第二 確定判決

第三 時効

(註) 本條ハ私訴消滅ノ原由ヲ定メタルモノニシテ之ヲ公訴消滅ノ原由ニ比スルニ前條第一第四第五ハ私訴ニツキテハ消滅ノ原由タラズ蓋私訴ハ財産上ノ請求ナルカ故ニ被告人死去シタルトキハ其財産相續人ニ對シテ請求スルヲ得ヘク第四第五ハ以テ被害者ノ損害ヲ償フノ効力ナキヲ以テナリ

私訴ノ權ヲ有スルモノハ被害者ナルカ故ニ被害者ハ自由ニ之ヲ拋棄シテ消滅セシムルヲ得ヘク又被告人ト和解シタルトキハ已ニ損害ヲ賠償セシムルヲ得唯多少ノ讓台ヲナスノミ故ニ私訴ノ權モ亦消滅セサルヘカラス之ニ反シテ檢事ハ一旦起シタル公訴ヲ拋棄シ又ハ和解ヲナスヲ得何ントナレハ檢事ハ公訴權ヲ有セス社會ノ代人トナリテ之ヲ實行スルモノナレハ拋棄又ハ和解ハ代理人ノ權限外ナレハナリ然ラハ公訴權ヲ有スル社會ハ之ヲ拋棄スルヲアルカト云ハ、前條第四第五第六號ハ他ノ一方ヨリ觀察スレハ公訴ノ拋棄ニ外ナラサルナリ

第二號第三號ハ前條ヲ參照スヘシ是刑事民事共通ノモノナリ

○第八條 公訴ノ時効ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因リ成就ス

第一 違警罪ハ六月

第二 輕罪ハ三年

第三 重罪ハ十年

(註) 公訴ノ時効ヲ以テ公訴ヲ消滅セシムルハ證據ノ湮滅ト社會ノ遺忘トニ基ツク蓋時日ノ經過ハ物ヲ湮滅セシメ又ハ物ヲ遺忘セシムル効力アルモノナレハ若干時間公訴ヲ起サ、ルトキハ犯罪ノ證據湮滅シテ罪ノ有無ヲ誤認スルノ虞アリ且公衆之ヲ遺忘スルヲ以テ刑罰ヲ科スルノ必要ヲ失フ「必要ナクレハ訴權ナシ」ノ原則ニ由リテ公訴ヲ消滅セシムルニ在リサレトモ社會カ無罪事件ヲ忘却スルハ幾何時間ノ經過ヲ要スルヤト云ハ、立法者適宜ノ規定ニ由ラサルヲ得ス而シテ犯罪ノ忘却ハ犯罪事件ノ重大ナルト些少ナルトニ由リテ其遲速ノ差異ヲ生スルハ別ニ恠ムニ足ラス故ニ重罪輕罪違警罪ニ從フテ各一定ノ期間ヲ區別シタル所以ナリ

○第九條 私訴ノ時効ハ被害者無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セスシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖モ公訴ノ時効ト其期間ヲ同クス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法ニ定メタル時効ノ例ニ從フ

(註) 公訴時効ハ公訴ヲ消滅セシメ私訴時効ハ私訴ヲ消滅セシムルハ已ニ見タルトコロナリサレトモ其期間ハ兩者全一ナリトス即私訴ノ時効モ前條ノ規定ヲ適用スヘキモノトセリ蓋シ時効ノ根基タル犯罪證據ノ湮滅ハ公訴私訴ヲ問ハス全一ナルノ理由ニ基ツクナリ被害者無能力ナルトキ……ノ語ハ突兀タルカ如シト雖民法證據篇百廿五條以下ヲ參照

セハ其必要ナルヲ知ルヘシ蓋シ民法ニテハ無能力者ハ時効停止ノ利益ヲ得ルコトアリト雖
(無能力者ハ自ラ權利ヲ行使スルコト能ハサルヲ以テ特別ノ保護ヲ與ヘタルナリ)私訴ノ場
合ニハ其期間ノ進行ヲ停止スルコトナシ犯罪證據ノ湮滅ハ被害者ノ無能力者タルト否トナ
問ハサルヲ以テナリ

又ハ公訴ニ附帶セス云々ハ第四條註釋參觀スヘシ
然レトモ已ニ公訴ニ付刑ノ言渡アリタルトキハ證據湮滅ノ虞ナキヲ以テ無能力者ハ時効
停止ノ利益ヲ受クル等凡テ本則ニ復シ民法ノ規定ヲ適用スルモ差支ナキコトナル民法時
効篇ヲ參照スヘシ

○第十條 公訴、私訴ノ時効ハ犯罪ノ日ヨリ其期間ヲ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨ
リ起算ス

(註) 公訴私訴ノ時効ハ何レヲ起算點トスヘキヤト云ハ、犯罪ノ日ヨリ始ムヘキハ勿論ノ
事ナリ繼續犯トハ直ニ所爲ヲ結了セシテ尙多少ノ時間其所爲ノ繼續スルモノヲ云フ例
之監禁罪ノ如シ此等ノ罪ハ其最終ノ日ヨリ起算スヘキモノトス繼續犯ニツキテハ刑法第
百五十一條第六十條第八十八條第二百二十九條等ヲ參照スヘシ

○第十一條 時効ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期間ノ經過ヲ中斷ス其未タ發
覺セサル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ
時効ノ經過ヲ中斷シタルトキハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期間ヲ

起算ス

(註) 前條ニ從ヒテ犯罪ノ日又ハ最終犯罪ノ日ヨリ時効ノ期間ヲ起算スルモ時効期間進行
中社會カ犯罪ヲ遺忘セサル事實アリタルハ期間ノ經過ノミヲ以テ其罪ヲ免スルノ理由
ナレ而シテ社會カ犯罪ヲ遺忘セサル事實ハ確乎タル力ヲ具フルモノヲラサルヘカラス其
事實トハ何ンヤ起訴豫審公判ノ手續アリタルニ是ナリ而シテ檢事カ爲ス搜查處分ノ如キ
ハ此至大ノ効力ヲ失フニ足ラス告訴發告ノ如キモ亦然リ搜查起訴豫審公判ノ何物タルヤ
ハ該當ノ處ニ至リテ説明スヘシ唯此ニテハ折角今迄經過シタル期間ハ此等事柄ノ爲メニ
破滅セラレテ痕跡ヲ留メサル姿トナルナリ第二項ハ別ニ説明ヲ俟セシメテ明カラナルヘ
シ

時効ノ中斷ハ犯罪事件全体ニ効力ヲ及ボスカ故ニ茲ニ或犯罪ニ正犯從犯數人アリテ其一
人ニ對シ起訴豫審公判ノ手續アリタルトキハ其發覺セサル他ノ者ト雖時効中斷ノ不利益
ヲ受クルモノトス
期間停止トハ今迄經過シタル期間アルトキハ其効力ヲ貯存シ以後其殘期ヲ以テ進行シ前
後加算スルモノナレトモ中斷トハ今迄經過シタル期間ハ全ク其効力ヲ喪失シ以後更ニ全
期間ヲ以テ進行スルヲ云フ

○第十二條 起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スルトキハ時効ノ經
過ヲ中斷スル效ナカル可シ但裁判所ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スルトキハ此限

(註) 起訴豫審又ハ公判ノ手續ニ與フルニ時効中斷ノ効力ヲ以テスルハ其手續ノ法律上有効ナルトキニ限ル檢察カ重罪事件ニツキ豫審ヲ求メスニテ直ニ公判ニ付シタルカ如キ又ハ公判々事ハ裁判構成法ニ背キテ裁判ヲナシタルカ如キハ其手續ハ無効ニシテ隨テ時効ヲ中斷スルノ効力ヲ付與スルニ足ラス蓋訴訟手續ヲ行フテ其規定ニ從ハス是レ犯罪事件ヲ等閑ニ附シ犯罪事件ヲ遺忘スルト同一ナルヲ以テナリ裁判所ノ管轄違ナルニ由リテ其手續ノ無効ニ屬スルハ例外トシテ此効力ヲ與フルトセリ裁判所ノ管轄如何ハ該當ノ處ニ於テ説明スヘシ

○第十三條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人、告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ
民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

(註) 凡テ己レノ所爲ヲ以テ他ニ損害ヲ加ヘタルトキハ必ラス賠償ノ責ニ任ス是レ民法ノ原則ニシテ本條ハ被告人カ反訴ヲ其裁判所ニ提起スルコトヲ得ル場合ヲ示シタルモノニシ

テ其何人ニ對シテ起スコトヲ得ルヤ曰ク告訴人告發人民事原告人はナリ

第一被告人無罪又ハ免訴言渡ヲ受ケタルトキ 被告人カ未決拘留保釋沒収等ノ損害ヲ受ケタル場合ニハ此等ノ人ニ向ツテ賠償ヲ請求スルコトヲ得但其訴訟ノ原由カ此等ノ人ニ出テタルヲ要ス故ニ其訴訟ノ原由他ニ出テタルトキ假令世上ノ風評等ニ由リ檢事ノ搜查起訴アリタルトキハ假令民事原告人カ其公訴ニ附帶シテ私訴シタルハトテ其責ナキナリ

第二 被告人有罪ノ言渡ヲ受ケタルトキ 此等ノ人カ過實ノ申立ヲナシ爲メニ損害ヲ受ケタルヲ要ス假令過實ノ申立ヲ爲シタルハトテ別ニ損害ヲ與ヘレハ其責ナシ

此等ノ人カ其責ニ任スルコトハ惡意モシクハ重過失アルヲ要ス惡意アルトキハ刑法誣告ノ罪ニ問ハルヘキハ本條ノ云ハントスル所ハ唯被告人カ損害賠償ノ反訴ヲナス場合ニ在リ重過失ハ唯民事上ノ責ヲ生スルノミ

第四項ハ通常民事ノ訴ヘハ訴訟物ノ價額ニ由リ裁判所管轄ヲ異ニスル等民事訴訟法ニ從ヒ甚タ煩雜ナレバ此反訴ハ何時ニテモ被告人カ繫屬スル刑事裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ許シ以テ簡便ノ方法ノ與ヘタリ故ニ此方法ヲ取ラス獨立シテ民事裁判所ニ請求スルヲ得ルハ勿論亦本案ノ判決既ニアリタルトキハ必ラス特立シテ別ニ民事裁判所ニ請求セサルヲ得サルコト、ナルヘシ

第三項ハ別ニ説明ヲ待タスニテ明カナリ民事原告人ハ私訴ノ判決ニツキ別ニ上訴スルコトヲ得ルカ故ニ第三項ニ於テ規定スルノ要アレトモ告訴告發人ニハ此ノ問題ヲ生スルコトナ

○第十四條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡查、憲兵卒ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

(註) 本條ハ損害ヲ與ヘタル人カ官吏ナリシ場合ニ於テ要償ノ訴ヲ起スコトヲ得ルト否トヲ示ス

判事檢事裁判所書記執達吏司法警察官又ハ巡查憲兵卒カ職權上行ヒタル場合ニハ被告人縱令無罪ノ言渡ヲ受ケタルキト雖賠償ノ責ニ任セス況ンヤ免訴有罪ノ言渡ヲ受ケタルトキチヤ蓋シ此等ノ人チシテ通常人ト同シク賠償ノ責ニ任セシムルトキハ盡ク疑懼ノ念チ生シテ其職務上ノ行爲ヲ斷行スルコト能ハサラシメ社會ノ安寧ヲ保持スルニ必要アル處分チナスコト能ハサラシムルチ以テナリ然レトモ被告人ニ損害ヲ加フルノ故意ニ出テ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタルトキハ其責ニ任セシムヘキヤ當然ナリ(刑法二七八條二八三條二八六條二八七條等參照)

○第十五條 此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラズ但時効ノ期間ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

(註) 期間計算方法ハ刑事訴訟法中必要ノ規定ナリトス

(一) 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルトキ(六九條等)等其起算點ハ即時ナリ故ニ其時ヨリ幾時間ナルチ定ムルコトナル

(二) 期間ヲ計算スルニ日ヲ以テスルトキ(二百五十二條等) 法律ハ煩雜ヲ避ケンカ爲メ初日ハ算入セスシテ次日ヨリ始マル假令本日ヨリ三日間トイフトキハ今夜零時ヨリ進行スルモノトス

期間ヲ計算スルニ日ヲ以テスルト時ヲ以テスルト時問ハス最終ノ日休暇ニ當ルトキハ之ヲ算入セス其間期間停止シ其次日ニマテ殘除チ及ホストナルナリサレトモ時効ニハ停止ナク進行シテ已マサルヘシ其理由ハ時効ニ證據ノ湮滅ト犯罪遺忘ニ基ツクカ故ニ期間ノ停止ヲ設クルコトナカルヘシ。第二項ハ別ニ説明ヲ要セサルヘシ

○第十六條 此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

(註) 法律上ノ期間假令本日ヨリ五日間トイフハ裁判所所在地内ノ者ニ對シテ與フル期間ニシテ遠隔ノ地ニ在ルモノチモ同一ノ期間ニ服從セシムルハ苛酷ナルカ故ニ本條ヲ以テ猶豫ヲ與ヘ海路陸路各々八里ヲ以テ一日程トシ八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フ故ニ法律上ノ期間五日ナルモ八里外ニシテ端數三里未滿ノ者ハ一日ノ猶豫ヲ得ルカ故ニ實際六日ノ期

間トナルナリ此三里以上ハ路程八里以上ニシテ其端數三里以上ナルトキハ尙ホ一日ノ猶豫ヲ得ルトイフニ在ルナリ

○第十七條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期間ヲ經過シタルトキハ特別ノ場合ヲ除ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ

(註) 訴訟ヲ爲スニ付キ云々訴訟ヲ爲スノ權ヲ失フトキハ時効ノ如キ又ハ控訴期間上告期間故障期間ヲ云フ其期間ヲ無爲ニ經過シタルトキハ其故意ト懈怠トニ出ツルチ間ハ最
早訴訟ヲ爲スヲ得サルモノナリ是レ法律ノ嚴正ヲ保ツニ必要ナリトス是チ期間ノ効力
トイフ所謂特別ノ場合トハ第七十三條第二百七條第二百二十四條等ヲ云フ

○第十八條 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其地ニ假住所ヲ定メ裁判所ニ届出ツ可シ否ラサルトキハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

○第十九條 書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラサルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス
(註) 民事訴訟法送達ノ章ヲ參照スヘシ今茲ニ説明セス

○第二十條 官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署、公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其書類ノ効ナカル可シ
官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ官吏、公吏ノ面前ニ於テ作りタル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載

ス可シ

(註) 署名トハ書類ヲ作りタルモノカ自己ノ氏名ヲ書スルヲ云ヒ捺印ハ其正確ヲ證スルカ爲メ自己ノ印章ヲ捺捺スルヲ云フ契印ハ書類二葉以上ニ涉ルトキ各葉ニ跨カリテ割印ヲ捺捺シ以テ紙數ノ増減變換ヲ防クヲ云フ

○第二十一條 官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入、削除及ヒ外欄ノ記入アルトキハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其變更増減ノ効ナカル可シ

(註) 書類ノ原本トハ裁判言渡書ニ付テ云ハ、裁判官ノ自ラ執筆シテ作りタルモノ正本ハ書記カ原本ヲ謄寫シ執行ノ効力ヲ與フモノ謄本ハ更ニ正本ヲ謄寫シタルモノニテ證據ノ用ニ供スルモノナリ
改竄ハ最初ノ文字ヲ變更改作スルヲ云フ

○第二十二條 此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其效アリトス

○第二十三條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

○第二十四條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ規定ニ從フ

◎第二編 裁判所

○第一章 裁判所ノ管轄

(註) 裁判所ノ管轄如何ハ最モ緊要ノ事ニシテ管轄違ノ裁判所カ言渡シタル裁判ニハ判決ノ効力ヲ與ヘス即裁判ナキト同一ナルカ故ニ之カ規定ハ細密ニ講究セサルヘカラスサテ其管轄ニハ二様アリ曰ク犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄曰ク土地ノ區劃ニ關スル裁判所ノ管轄是ナリ以下逐次ニ説明スヘシ

○第二十五條 犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

管轄ヲ異ニスル數箇ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタルトキハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

(註) 犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成法ニ規定シタリ今本條ニツキ要ナル部分ヲ舉ゲンニ

區裁判所カ刑事ニ於テ管轄權ヲ有スル犯罪ノ種類ハ(一)違警罪(二)本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪(三)刑法第二編第一章ヲ除キ其他ノ輕罪ニシテ本刑二百圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二年以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該リ其情第二ニ掲ケタル刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルヲ要セスト認メ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事局ヨリ區裁判所ニ移付シタル物

地方裁判所カ刑事ニ於テ有スル裁判權ハ區裁判所ノ權限併ヒニ大審院ノ特別權限ニ屬セ

サルモノ

其他詳密ノ事ハ同法ニ就テ之ヲ見ルヘシ

カク嚴密ニ管轄ヲ區別シタルモ數罪俱發ノ場合ニハ此レカ例外タリトス第二項ハ之ヲ規定シタリ假令二月以上ノ禁錮ニ該ル犯罪(地方裁判所ノ管轄)ト本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加スル二月以下ノ禁錮ニ該ル犯罪(區裁判ノ管轄)ヲ犯シタル被告人ニ對シ同時ニ此二ケノ犯罪ニツキ訴アリタルトキハ地方裁判所ハ乙罪ヲモ管轄シ同時ニ審理スヘキモノトス是レ實際ノ便宜ニ出テタルモノニシテ「大ハ小ヲ容ル、」トノ原則ニ據リ上級裁判所ニ當然審理ノ權限ヲ與フルナリ附帶犯ノトキニモ此規定ヲ適用スヘキヲアリ以下該當ノ處ニテ附帶犯ノ何者タルヤヲ説明セム

○第二十六條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

(註) 本條以下ハ土地ノ區劃ニ關スル裁判所ノ管轄ヲ規定サテ一ノ犯罪アリテ其犯罪ノ種類即違警罪若シクハ重罪タルヲ知リ區裁判所若クハ地方裁判所ニ屬スルヲ知ルモ是レニテハ尙未タ分ナラス區裁判所地方裁判所ハ全國ヲ通シテ其數許多ナルカ故ニ何レノ地ノ區裁判所若シクハ地方裁判所カ該犯罪ヲ管轄スヘキヤヲ知ラサルヘカラス本條ハ之ニ答ヘテ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ區裁判所若クハ地方裁判所カ之ヲ管轄ストイヘリ即該裁判所ニ於テ豫審又ハ公判ヲ行フヲ得他ノ裁判所ハ之ヲ行フノ權ナキモノトス

○第二十七條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

(註) 一ノ犯罪アリテ被告人カ犯罪地ニ住居セサルトキハ前條ニ由リテモ二箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スルモノトナル況ンヤ犯罪ノ地カ數ケノ裁判所管轄地ニ跨カルカ如キ(兇徒嘯聚罪等)トナシトセス此等トキニハ二个以上ノ裁判所中最初ニ豫審又ハ公判ニ着手シタル者ヲ管轄裁判所ト定ムルトセリ是レ事理ノ當然ナルモノトイフヘシ

○第二十八條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス大審院ニ於テ之ヲ管轄ス

(註) 犯罪ニ正犯從犯數名以上ニ至ルモ其事件ハ元來一个ナレハ一裁判所ニ於テ併セテ之ヲ管轄ス而シテ從犯ハ必ラス正犯ヲ管轄スル裁判所ニ從フ是主ハ從ヲ制スルノ原則ナリ故正犯所在地ノ裁判所カ最初豫審又ハ公判ニ着手シタルトキ縱令從犯ノ所在地ニ非サルモ之ヲ併セテ管轄スルモノトス○第一項ハ別ニ説明セステ明カナリ
裁判所構成法云々ハ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ該ルモノヲ云フ此共犯ハ皇族ニ非ス從犯ニ非サルトキト雖モ大審院ノ管轄トス是レ皇族ノ身分ヲ尊崇スルニ由ル

○第二十九條 外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷ス可キモノニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタルトキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

關席判決ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最後ノ住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
(註) 外國ニ在テ犯シタル罪ハ盡ク本邦ノ法律ニ依テ處斷スヘキモノニアラス此區別ハ刑法草案第四條以下ニ規定シアリ就テ見ルヘシ

○第三十條 海航内ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ着船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

○第三十一條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

○第三十二條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ニ於テハ檢事總長ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申請ヲ爲スコトヲ得

○第三十三條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付管轄權ヲ有スル裁判所其ノ趣意書ヲ差出ス可シ
裁判所ハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

○第三十四條 犯罪ノ性質、被告人ノ身分、員數、地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判ニ

對紛擾又ハ危險ヲ生スル恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

○第三十五條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

大審院ニ於テハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク其申請ヲ決定スヘシ

○第三十六條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサル恐アルトキハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

○第三十七條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ管轄裁判所ノ檢事其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス

○第三十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スコハ其趣意書二通ヲ原裁判所ニ差出ス可シ
裁判所書記ハ速ニ一通ヲ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ

○第三十九條 前條ノ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

○第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避

○第四十條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セララル可シ

第一 判事被害者ナルトキ

第二 判事又ハ其配偶者ト被告人、被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事其事件ニ付キ證人、鑑定人ト爲リタルトキ又ハ被告人若クハ被害者ノ法律上代理人ナルトキ

第四 判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ干與シタルトキ

(註) 本條ハ判事若クハ書記(四五)ヲ除斥スヘキ場合ヲ示ス夫レ裁判ハ公平無私ナルヲ要スルハ言フ迄モナシ然ルニ本條四ケノ場合ニハ其職務ヲ行フノ人ノ公明正大ヲ支障スル情狀アルヲ以テ法律カ當然之ヲ除斥シテ其職務ヲ行フヲ得サラム即裁判官一時ノ無能力トイフモ可ナルヘシ假令判事カ其情狀ニ束縛セラレス公明ノ裁判ヲ下スコトヲ得ルモ世人ノ嫌疑ヲ受クルコトナシトモ是裁判断ノ威嚴ヲ保ツニ必要ナル規定トイフヘシ○第一云々 別ニ説明ヲ待タス○第二云々 之ヲ詳説スレハ(一)判事カ被告又ハ被害者ト親屬ナルトキ(二)判事カ此等ノ者ノ婦ト親屬ナルトキ而シテ判事ノ婦カ此二ケノ場合ニ該當スルトキモ亦然リ ○第三云々 裁判ハ證人鑑定人ノ陳述ニ由リテ心證ヲ取リタル上ニ

テ言渡スヘキモノナレハ此場合ニハ自ラ陳述シテ自ラ裁判スルコトナリテ其不可ナルハ辯ヲ俟タス「又ハ」以下云々ハ第二號ニ入ルヘキモノナリ法律上ノ代理人ハ無能力ヲ保護スル責任アルモノナレハ勢ヒ情實ニ引カサレテ公明正大ノ裁判ヲ下スコト能ハサルヘキナリ○第四云々 同一ノ事件ニ就テハ全一ノ判事再ヒ之ヲ審理スルヲ得ス故ニ豫審ノ決定ニ干與セタル判事ハ公判ニ與カルヲ得ス又第一審ノ裁判ニ不服ヲ申立控訴ヲ起シタル場合ニ前審ニ干カリタル判事カ其控訴裁判所ニ轉任シタルモ其判事ハ此第二審ニ干カルコトヲ得ザラシム

此四ケノ場合ニハ法律上當然判事ハ職務ヲ行フノ能力ヲ失ス

○第四十一條 判事法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、場合及ヒ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ情况アル場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

○第四十二條 忌避ノ申請及ヒ其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ノ規定ニ從フ

(註) 忌避トハ檢事其他ノ訴訟關係人ヨリ判事ヲシテ職務ヲ行フコトヲ得サラシムル旨ヲ請求スルヲ云フ故ニ(一)前條除斥ノ場合ハ勿論(二)偏頗ナル裁判ヲナスコトヲ疑フニ足ルヘキ場合ヲモ包含ス此第二ハ其場合甚ク汎シ故ニ學者(一)ノ場合ニ於テ忌避スルヲ法律上ノ忌避トイヒ(二)ヲ事實上ノ忌避ト稱セリ其區別ハ(一)ニハ果シテ偏頗ノ裁判ヲナスノ嫌疑アルコトヲ疏明セシメテ其忌避有効ナルモ(二)ニハ必ラス之ヲ疏明セサルヘカラス

○第四十三條 忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テハ仍ホ其處分ヲ繼續スヘシ但急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中止スルコトヲ得

(註) 公判ト豫審トニ此區別アルハ豫審ノ處分(豫審判事ノ處分ニシテ辯論ヲ開クモノニアラス)ハ證據蒐集ノ爲メ迅速ヲ要スルヲ以テナリ

○第四十四條 判事自ラ第四十條ニ定メタル原由アルコトヲ認め又ハ回避スヘキモノト思料シタルトキハ忌避申請ノ管轄裁判所ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

其裁判所ニ於テハ回避ノ申立ヲ裁判ス可シ

○第四十五條 本章ノ規程ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判所ハ書記所屬裁判所之ヲ爲ス可シ

(註) 回避トハ檢事其他訴訟關係人ノ請求(忌避)ヲ待タスシテ判事カ自カラ職務ヨリ免除ラレタシト申立ツルヲ云フ其場合ハ法律上除斥ノ場合ハ勿論回避スヘキト思料シタルトキモ申立ツルコトヲ得ヘキナリ忌避ノ申請ヲ裁判スル裁判所等ハ民事訴訟法第三十四條以下ヲ見ルヘシ

◎第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審

○第一章 捜査

捜査トハ犯罪ノ證據及ヒ犯人ヲ搜索シ公訴ノ提起實行ノ材料トスルヲ目的トスルモノニテ司法警察官ノ職權ニ屬ス故ニ豫審ト混同スヘカラス豫審トハ檢事カ起訴シタル被告事

件ノ證據ヲ蒐集シ公判ニ付スルニ足ルヤ否ヤヲ決定スルヲ目的トシ豫審判事ノ職權ニ屬ス

○第四十六條 檢事ハ後ニ記載シタル告訴、告發、現行犯其他ノ理由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證據及ヒ犯人ヲ搜查ス可シ

○第四十七條 警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜查スルニ付キ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス
左ニ記載シタル官吏、公吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜查ス可シ

- 第一 警視警部長、警部、警部補
- 第二 憲兵將校、下士
- 第三 島司
- 第四 郡長
- 第五 林務官
- 第六 市町村長

○第四十八條 海船内ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ
(註) 檢事カ獨立シテ犯罪搜查ノ權ヲ有スルハ其職務上當然ナルモ警視總監及ヒ地方長官ト雖其各管轄地内ニ限り司法警察官トシテ犯罪ヲ搜查スルノ權限ヲ與ヘタリ蓋全國若ク

ハ一地方ノ安寧秩序ニ關スル犯罪アルニ方リテハ行政官タル此等ノ人ニモ此權限ヲ與フルハ已ムヲ得サルモノトイフヘシ而シテ東京府知事ハ司法警察官タルコトナシ是ヲ東京ハ他ノ地方ニ異リ行政事務ト警察事務ト全ク分離シ知事ハ單ニ行政事務ヲ執リ警察ノ事務ハ警視總監之ヲ執ルカ故ナリ

○第一節 告訴及ヒ告發

○第四十九條 何人ニ限ラズ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ
(註) (一)告訴ヲ爲スヲ得サル者 犯罪ニ因リテ損害ヲ受ケタルモノナレハ男女内外國人ヲ問ハス相當官吏ニ申告スルヲ得但其人ノ自由ニシテ爲サ、ルモ何等ノ責ナシ (二)告訴ヲ受クル者 犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢事若クハ司法警察官ニシテ豫審判事ハ之ヲ受クルコトヲ得ス何トナレハ告訴告發アリタルニ由リ搜查處分ヲナスヘキモノハ檢事又ハ司法警察官ニ限レハナリ

○第五十條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツル可シ
○第五十一條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ
 (註) 署名捺印シタル書面ヲ要スルハ若シ告訴人ニシテ惡意又ハ重過失ニ由リテ告訴ヲ爲シタルトキハ被告人ニ對シ損害賠償ノ責アルカ故ニ告訴ノ何人ニ出テタルコト、イカナル事實ヲ申告シタルヤチ明カニスルニ在リ第二項ハ告訴人カ急迫ノ場合ニテ書面ヲ作ルノ暇ナク又ハ告訴人文字ヲ知ラサルモノナルトキノ救濟方法ヲ規定スルモノニシテ一ノ變則トイフヘシ

○第五十二條 官吏、公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

(註) 官吏公吏ハ一定ノ場合ニテハ職務上告發スヘキナルヲ示シタルナリ告發トハ被害者ニ非ル人カ相當ノ官吏ニ犯罪ヲ申告スルヲイフ而シテ其職務ヲ行フニ因リノ語ニ注意スヘキト是ナリ例之會計検査院ノ官吏カ計算ヲナスコ方リ會計上犯罪アルヲ認知シタルハ本條ノ正面ニ中レリト雖土木官吏カ途上ニ殺傷アルヲ認知シタルトキハ本條外ノモノトス之ヲ告發スルハ次條常人ノ資格ヲ以テスヘキナリ故ニ其職務ヲ行フ際シト同一視スヘカラス此場合ノ告發ハ前條ニ比スレハ嚴格ニシテ(一)必ラス其職務ヲ行フ地

ノ檢事ニ申告スヘク司法警察官ニ申告スヘカラス(二)告發ハ必ラス書面ヲ要シ口頭供述ヲ以テスルヲ得ス(三)證據又ハ事實參考トナルヘキ物ヲ添ヘテ告發スヘク申立ツルノミニテ十分ナラス(四)迅速ニ告發手續ヲ行フヲ要ス(五)前條告訴ヲ爲スト否トハ被害者ノ自由ナレトモ本條ノ官公吏ハ必ス告發セサルヘカラス

○第五十三條 何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

(註) 常人告發ノ事ヲ規定ス第四十九條告訴ノ規定ト差異ナシ唯告發ハ告發人所在地ノ相當官吏ニモ申告スルヲ許シタリ本條所在地ハ告發人ノ所在地ノミナラス被告所在地ヲモ併セ稱スルモノト考フ

○第五十四條 告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第五十二條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律上代理人之ヲ爲スモ其効アリトス

○第五十五條 告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十三條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアルヘシ

○第二節 現行犯罪

(註) 現行犯罪ハ犯罪ヲ認知(四六)スルノ最確カナル原由ニシテ搜查處分モ亦非現行犯

(告訴先發ニ由ルモノ其他世上ノ風聞新紙ノ報道等)ニ比シテ最迅速ナルヲ要ス然ラサレハ證據湮滅シテ公訴ヲ實行スノ權ヲ失スルニ至ルサレトモ現行犯罪現行犯ノ區別ハ刑法上ニ關係人(過半ノ違警罪ヲ除ク)唯刑事訴訟法上即搜查豫審處分ニ大關係ヲ生スルモノトス次下逐次ニ講究スル所ヲ見テ知ルヘシ

○第五十六條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

○第五十七條 重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

第一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラレトキ

第二 兇器、贓物其他ノ物件ヲ携常シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト

思料ス可キトキ

第三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢証スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ

戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

(註) 現行犯罪トハ汎ク(甲)眞現行犯(乙)準現行トヲ惣稱ス(甲)ハ第五十六條(乙)ハ第五

十七條ニ分掲セリ今眞現行犯ヨリ説明センニ

(甲)眞現行犯 現ニ行フ際ニ發覺シタル罪ノ現行犯タルヤ勿論ナリサレトモカク狹隘ニ釋解スルトキハ實際ニ害アルヲ以テ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル犯罪ヲモ眞現行犯トセリ即罪ト爲ルヘキ所爲ヲ止メタル際又ハ之ヲ止メタルヨリ些少ノ時間ヲ經過スルヒ

其罪跡現存シテ犯狀ヲ認ムルニ容易ナル時間ヲ云フ及之人ヲ殺シ終リテ已ニ遁逃スルモ尙ホ被害者其地ニ在リテ被害ノ現場判然タルカ如キモ眞現行犯トス

(乙)準現行犯ハ五十七條三ノ場合ニ限ル而シテ唯重罪輕罪ニ限ル違警罪ニハ眞現行犯アルモ準現行犯ナシ此區別ノ實用ハ刑法二百六十一條以下ニ就テ見ルヘシ

第一云々 (一)逃走者アルコト(二)一人又ハ數人カ其跡ヲ追フコト(三)追フ者カ犯人ナリト呼フコト夫惡事ヲ爲サ、ル正當ノ人ナルトキハ逃走スルノ要ナシ故ニ此一條件ニテ犯罪者ナリト稍疑フヘキモ或ハ火急ノ用事ニテ疾走スルヤモ知レズ然ルニ第二條件アルトキハ愈疑フヘキナリ然レトモ第三條件アリテ愈々犯人ニ相違ナカルヘシト推測スルヲ得ヘク亦之ヲ辨解セスシテ逃走スルカ如キハ現行犯處分ヲ許シ合狀ナクトモ之ヲ逮捕スルヲ許サ、ルヘカラス

第二云々 第一號ニ照ラシテ之ヲ知ルヘシ

第三云々 (一)家宅内ノ犯罪ナルコト(二)官吏ニ檢證處分又ハ犯人ト思料スヘキモノ、逮捕處分ノ請求アリタル事(三)請求者カ其家ノ戸主ナルコトノ三條件ヲ要ス

○第五十八條 司法警察官及ヒ巡查、憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ルヘキ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルハ合狀ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ
罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事、違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ其氏名、住所

分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得

(註) 通例非現行犯ノ場合ニハ何レノ官吏ト雖モ令狀ナクシテ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得サレトモ現行犯ノ場合ニ限リ急速ノ處分ヲ要シ且罪證湮滅ノ恐レアルヲ以テ令狀ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕スルヲ許シタリ而シテ法律ハ(一)重罪及禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ輕罪ト(二)罰金ノ刑ニ該ルヘキ輕罪及ヒ違警罪トニ從ヒ區別シタリ(三)ノ場合ハ之ヲ逮捕スルヲ許サズ唯告發ノ手續ヲ爲スコトヲ許スノミ最モ或ル場合ニハ被告人ヲ引致スルコトヲ許セリ○ 巡查憲兵卒ハ司法警察官ニアラス所謂公力士ニシテ司法警察官ノ指揮ニ從フテ捜査處分ノ補助ヲナスノミ混同スヘカラス

○第五十九條 巡查ト憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

(註) 本條第一項ハ巡查憲兵卒カ逮捕シタルトキノ處分ヲ規定ス司法警察官カ被告人ヲ逮捕シタルトキニモ第二項ヲ適用スヘキハ當然ナリ

第六十條 何人ニ限ラズ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

○第六十一條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ被告人又ハ巡查憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

(註) 現行犯ノ場合ニハ非常ノ特別處分ヲ許セリ常人ト雖モ尙其犯人ヲ逮捕スルコトヲ許セリ但其人ノ自由ニシテ義務ニ非ス前一條ノ場合ニテハ職務上必ラス逮捕セサルヘカラスト雖常人ニハ此義務ヲ負ハシムル道理ナシ故ニ逮捕セズシテ單ニ告發告訴ヲナスヲ得ヘク亦兩者共爲サ、ルモ勝手ナリ但重罪又ハ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪ニ非サレハ逮捕スルヲ得サルハ前數條ノ規定ト同一ナリ

第六十一條ハ或ハ被告人カ反訴ヲ起ス場合ニ方リ逮捕シタル人ノ責任ヲ確カメンカ爲メニ此規定ヲ設ケタルナリ或ハ惡意若クハ重過失ニテ純白無罪ノ人ヲ逮捕シタルコトアルヘシ故ニ其ノ住所氏名職業等告訴又ハ告發ノ手續等必要ナル處分ヲ規定ス

○第二章 起訴

(註) 起訴ハ檢事ノ爲スヘキ職務ニシテ公訴ノ原告人タル資格ヲ以テ其管轄裁判所ニ被告事件ノ審理判決アランコトヲ請求スルヲ云フ

○第六十二條 地方裁判所檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタルトキハ左ノ手續ヲ爲ス可シ
第一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ
第二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ其裁判所ニ

訴ヲ爲ス可シ

第三 裁判所構成法第十六條第二號第三號ニ記載シタル輕罪又ハ違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢事ニ送致スヘシ

(註) 前條ニテ搜查處分ノ何者タルヲ示シタルヲ搜查處分了リタル時ハ直チニ起訴ノ手續ヲ爲スモノトス而シテ犯罪ノ重罪輕罪違警罪トニ從テ其手續ヲ異ニセリ而シテ本條ハ地方裁判所檢事ニ就テ規定ス

第一云々重罪事件ハ其刑罰事体容易ナラサルヲ以テ必ラス一ト先ツ豫審ヲ經サルヘカテ豫審ハ豫審判事ノ職權ニ尾ス若シ重罪ニシテ豫審ヲ確ス直チニ公判ニ付シ判決アリタルトキハ其判決ハ違法ニシテ無務トナルヘシ

第二云々 此輕罪ハ次號ニ所謂輕罪以外ノモノヲ云フ豫審ヲ求メ又ハ求メスヲ直チニ其裁判所ニ訴テ起スノ二種アリ但輕重難易ノ區別ニ由ル

第三云々 此等ノ輕罪又ハ違警事件ハ區裁判所ノ管轄ニ屬スルカ故ニ地方裁判所檢事カ之ヲ區裁判所ニ送致スヘキハ勿論ナリ蓋嚴格ニ論スルトキハ此場合ハ起訴ノ手續ニアラス告發ノ手續トイフヘキ也此重罪輕罪違警罪ニツキテハ第二十五條註釋裁判所犯罪ノ種類ニ關スル管轄ヲ參照セハ別ニ説明ヲ要セスシテ分明ナラン

○第六十三條 區裁判所檢事犯罪ノ搜查ヲ終リタル上裁判所構成法第十六條第一號第二號ニ記載シタル事ト思料シタルトキハ其裁判所ニ訴テ爲ス可シ

(註) 本條ハ區裁判所檢事カ起訴ノ手續ヲ規定ス裁判所構成法第十六條第一號ハ違警罪ニシテ全第二號ハ五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪ナリ區裁判所事件ニハ豫審ヲ用フルヲナシ違警罪ハ固ヨリ豫審ヲ要セス又輕罪ト雖此等ノモノハ事件簡易ナルヲ以テ亦豫審ヲ行フヲナシ地方裁判所ニ屬スル輕罪ト雖必ラス豫審ヲ經ルニアラス況ンヤ區裁判所ニ屬スル輕罪ニ豫審ナキハ恠ムニ足ラサルナリ

○第六十四條 檢事ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサル者ト思料シタルトキハ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

○第六十五條 前數條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ルトキハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

○第六十六條 檢事豫審ヲ求ムルトキハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人及ヒ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

(註) 檢事ハ地方裁判所區裁判所トヲ問ハス犯罪ノ搜查終リタルトキハ必ラス起訴セヨトイフニアラス被告事件罪ト爲ラス(刑法其他ニ之ヲ罰スヘキ正條ナク又刑法ニ所謂不論罪ニシテ判決ニテ無罪ノ言渡アルヘキモノヲ云フ)又ハ公訴受理スヘカラサル者(第六條

公訴消滅ノ原由アルトキ云フ判決ニテハ免訴ノ言渡アルヘキモノヲ云フ。此無罪ト免訴ノ區別ハ前ニ詳説シタルヲアレハ参照スヘキナリ(第二項)第一項ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキノ處置ヲ規定ス此管轄ノ語ハ犯罪ノ種類ニ關スル管轄ト土地ノ區劃ニ關スル管轄トヲ物稱ス裁判ニハ管轄ヲ正スノ嚴格ナルハ以下ノ條々ニ就テ之ヲ發見スヘキナリ管轄違ノ裁判所カ下セル判決ハ無効トナルヘク亦檢事カ管轄違ノ裁判所ニ起訴スルモ其裁判所ハ職權ヲ以テ却下スヘキナリ

○第三章 豫審

(註) 豫審ハ起訴ノ後公判ノ前ニ爲ス訴訟手續ニシテ其目的トスル所ハ犯罪ノ證據ヲ蒐集シ其事件ノ公判ニ付スヘキ否ヤヲ決定スルモノニシテ犯罪ノ下調トイフモ可ナリ而テ豫審判事ノ職權ニ屬ス豫審ハ總テ秘密ニシテ迅速敏捷ノ處分ヲ要ス故ニ豫審判事一人ノ權内ニヨリテ他ノ掣肘ヲ受クルコトナシ又豫審スヘキ事件ハ重罪又ハ煩雜ナル輕罪ニ限リ平易ナル輕罪及違警罪ニハ之ヲ要セス

蓋シ豫審制度ヲ設クル所以ハ錯雜煩雜ノ事件ハ公判前十分其事實ヲ明瞭ニシテ罪ノ輕重ヲ明カニシ然ル後公判ニ附スヘク若シ如何ナル事件ト雖直チニ公判ニ付スヘキモノトスレハ或ハ事實ノ點不明瞭ニシテ罪ノ有無ヲ誤認シ刑ノ權衡ヲ失スルコトアルヘケレハナリ

○第六十七條 現行ノ重罪、輕罪ヲ除ク外豫審判事ハ檢事ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ル

コトヲ得ス此規定ニ背キタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

(註) 凡テ告ケサレハ理セズハ訴訟ノ原則ナリ故ニ豫審判事ハ檢事カ公訴ヲ起シ豫審ヲ請求スルニ非レハ豫審ニ取掛ルヲ得ス蓋シ豫審ハ起訴後ノ手續ニシテ之ヲ請求スルト否トハ檢事ノ職權内ニ在リ檢事ノ請求ナクシテ豫審判事自ラ起テ其處分ヲナスハ越權ナリ越權ノ所爲ハ法律上無効ニシテ其所爲ナキモノト看做ス但シ後日檢事ヨリ請求アリタルトキハ請求以後ノ處分ハ有効タルコト勿論ニシテ請求前ノ處分迄有効トナルニハアラス但現行犯、重罪輕罪ニハ特別ノ處分ヲ許シ檢事ノ請求ヲ待タスシテ豫審判事直チニ豫審ニ着手スルヲ得ヘシ以下該當ノ處ニ至リテ説明スルコトアルヘシ

豫審判事ノ豫審處分ニ着手スルニツキ檢事ノ請求ヲ要スルノミナラス豫審終結ノ時ニモ必ラス檢事ノ意見ヲ求メサルヘカラス而シテ此ニケノ場合ヲ除キ豫審中ハ豫審判事一己ノ技術ヲ揮ヒ決シテ他人ニ縛束セラル、コトナシ是レ豫審ハ迅速敏捷ヲ要スルカ故ナリ

○第六十八條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記録ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

又必用アリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

(註) 檢事ハ公訴ヲ提起スルノミナラス公訴ヲ實行スルノ任アルカ故ニ豫審中何時ニテモ訴訟記録ヲ檢閱スルヲ得ルノ權アリ但シ一應豫審判事ニ請求セサルヘカラス豫審判事此請求ヲ受ケタルトキハ必ラス檢閱セシメサルヘカラス檢事ハ檢閱ノ上意見アルトキハ意

見書ヲ添附スルヲ得ヘク但二十四時間内ニ還付スヘシ然ラサレハ豫審處分ヲ延滞スルノ害ヲ生スレハナリ又必用ナル處分ハ之ヲ請求スルヲ得ヘクサレト豫審判事之ヲ必要ト思惟セサルトキハ其請求ニ應セサルヲ得ヘク此等處分ヲ爲スト否トハ豫審判事ノ權内ニ在ルヲ以テナリ

○第一節 令狀

(註) 令狀ハ被告人(時アリテハ證人鑑定人又ハ通事)ヲ召喚シ或ハ拘引シ或ハ拘留スルカ爲メニ相當ノ職權アル司法官ノ發スル命令書ニシテ通常豫審判事ノ發スルモノナリ又場合ニ由リ裁判所ヨリ發スルコトアリ又現行犯ノ場合ニハ檢事之ヲ發スルヲ得ヘシ而シテ令狀ヲ分チテ三種トス曰召喚狀曰拘引狀曰拘留狀是ナリ
令狀ハ凡テ重罪若クハ煩雜ナル輕罪ノ刑ニ該ルヘキ犯罪ノ場合ニアラサレハ之ヲ發スルコトヲ得ス平易ナル輕罪若クハ違警罪ニ付テハ檢事ハ豫審ヲ求ムルコトナクシテ直チニ起訴シ裁判所ヨリ呼出狀ヲ發シ令狀ハ之ヲ用フルコトナシ故ニ豫審處分ヲ行フヘキ犯罪ニ非レハ令狀ヲ發スルコトナシ

○第六十九條 豫審判事ハ檢事ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ
召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出頭ノ日ヲ過クルコト

ヲ得ス

(註) 豫審ハ證據ノ蒐集事實ノ發見ヲ目的トスルカ故ニ第一ニ被告人ノ訊問ヲナスヘク是カ爲メニ召喚狀ヲ發スヘキナリ召喚狀ハ被告人ニ對シ某年月日ニ出頭スヘキコト命令スルニ過キスシテ他ノ令狀ノ如ク強制シテ執行スルノ効力ナシ是レ被告人ノ自由ニ重シク敢テ之ヲ罪人視セサルノ主義ニ出ツルモノトス且召喚狀ノ送達ト被告人出頭ト間ニ必ラス二十四時間ノ猶豫ヲ與フルハ家事ヲ調理スルノ便ヲ與フルニ在リ而シテ召喚狀ノ効力ハ出頭ノ日一日ニ限ル即午前零時ヨリ午後十二時マテ云フ

○第七十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサルトキハ訊問ス可キ條件

ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ囑託スルヲ得

(註) 召喚狀ヲ受クヘキ被告人カ其裁判所ノ管轄地内ニ住スル・住セサルトキ問ハス之ヲ管轄スヘキ豫審判事カ之ヲ召喚シテ訊問スルハ當然ナレトモ斯クノ如クスレハ或ハ被告人ノ便利ヲ害スルノ恐レアルヲ以テ被告所在ノ地ハ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ依頼スルコトヲ許シタリ但訊問スヘキ條件即箇條ヲ明カニ示シテ依頼セサルヘカラス然ラサレハ囑託ヲ受ケタル判事ハ如何ナル事件ニ就キ尋問スヘキヤヲ知ルヲ得サルヘシ被告ハ其管轄地内ニ住セルトキトアレハ其裁判所ハ正當ノ土地管轄ヲ有スルコトヲ忘ルヘカラス假令犯罪ノ地ノ裁判所(正當管轄)ノ豫審判事カ被告人ニ對シテ召喚狀ヲ發シタルトキ被告人他裁判所ノ管轄地内ニ住居セル場合ノ如シ

○第七十一條 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキハ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

(註) 令狀ノ第二種タル勾引狀ヲ規定ス拘引狀ハ後ニ示スカ如ク強制ノ効力ヲ有スルヲ以テ猥リニ之ヲ發スルヲ許サス先ツ召喚狀ヲ發シタルニ被告人其出頭スヘキ日時ニ出頭セサルトキニ於テ已ムヲ得ス拘引狀ヲ發シテ引致スルコトナルナリ是ヲ拘引狀ヲ發スル場合ノ正則トス

○第七十二條 豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第一 被告人定リタル住所アラサルトキ

第二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スル恐アリトキ

第三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケンスル恐アルトキ

(註) 被告人ニ對シテハ一應召喚狀ヲ發シタル上ニ非レハ拘引狀ヲ發スル場合ヲ生セサレトモ本條ハ之ガ例外ヲ設ケタリ例外ハ制限解釋法ヲ用フルカ故ニ此三个ノ場合ヲ除キテ如何ナルトキト雖前條正則ニ從ハサルヘカラス

被告人ハ罪人トイフヘカラス故ニ召喚狀ヲ發スレハ直チニ柔順出頭スヘキモノト推定スルヲ以テ前條ノ規定ヲ設ケタルモ之ニ反スルトキハ此推定モ破ルヘク從テ直チニ拘引狀ヲ發セサルヘカラス

第一云々 此場合ニハ召喚狀ヲ發スルニ由ナシ且必ラス正則ニ從ハサルヘカラストスル

トキハ反テ時機ヲ失シ被告人ヲシテ逃亡セシムルノ恐レアルヘシ

第二云々 讀ンテ明文ノ如シ

第三云々 未遂罪トハ未タ目的ヲ遂ケルニ至ラサル總テノ犯罪ヲ稱ス脅迫罪ハ刑法第三百二十六條以下ニ就キテ見ルヘシ此等ノ場合ニハ社會ノ安寧又ハ被害者ノ財產生命等ヲ保護スルカ爲メニハ直チニ之ヲ拘引スルヲ許サルヘカラス

○第七十三條 拘引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

拘引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スルトキハ拘留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

(註) 本條ハ拘引狀ノ効力ヲ規定ス拘引狀執行ノ命ヲ豫審判事ヨリ受ケタルモノ(巡查憲兵卒ヲ云フ七六第三項)ハ豫審判事ノ前ニ其被告人ヲ引致スヘシ拘引狀ノ効力ハ四十八時間ノミ効力ヲ有スルモノナリ故ニ其時間經過ノ後ハ必ラス之ヲ釋放セサルヘカラス但シ四十八時間内ニ拘留狀ヲ發シタルトキハ格別ナリ本條ハ第六十九條二項ト對照シテ召喚狀ト拘留狀ノ差異ヲ知ルヘシ

○第七十四條 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀又ハ拘引狀ヲ受タル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得

(註) 前數條ハ召喚狀ヲ受ケタルト拘引狀ヲ受ケタルトヲ問ハス裁判所内ニ於テ尋問ヲ

受クヘキ本則トス本條ハ之カ例外トシテ被告人疾病其他正當ノ事由例之父母ノ病症厄篤ニシテ看護ノ任ヲ盡サ、ルヲ得サル場合ニハ被告人所在ニ就テ豫審判事之ヲ尋問スルヲ許シタリ本條唯之ヲ尋問スルヲ得トイフヲ以テ或ハ被告人疾病ノ全癒ヲ待テ裁判所内ニ於テ尋問スルコトヲ得ルハ當然ナリ必ラスモ被告人ノ所在ニ就キ尋問スヘシト命令スルニ非ス

○第七十五條 拘留狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非レハ之ヲ發スルヲ得ス但被告人逃亡シタル場合ニ於テハ其訊問ヲ爲サズシテ之ヲ發スルヲ得

(註) 本條ハ令狀ノ第三種タル拘留狀ヲ規定ス召喚狀拘引狀ハ其何タルヲ問ハズ唯裁判所内ニ於テ被告人ヲ尋問スルノ方法ニ過キサレトモ拘留狀ハ被告人ノ身体ヲ縛束シ之ヲ未決監ニ投スルモノナレハ事体太々重ク從テ容易ニ之ヲ發スルヲ得ス左ノ二條件ヲ要ス
第一訊問ヲ受ケタル被告人ナルヲ要ス 召喚狀ニ由リテ訊問ヲ受ケタル拘引狀ニ由テ尋問ヲ受ケタルトハ問ハズ必ラス一應尋問ヲ受ケタル被告人ナルヲ要ス故ニ換言スレハ召喚狀若クハ拘引狀ヲ發シタル上ニ非スハ拘留狀ヲ發スルコトヲ得ストイフモ不可ナカルヘシ最モ其被告人逃亡シタル場合ニハ訊問ヲ要セス直ニ拘留狀ヲ發スコトヲ許シタリ之ヲ第一條件ノ例外トス
第二禁錮以上ノ刑ニ該ルニキ被告人タルヲ要ス 重罪ノ刑ニ該ルヘキ被告人ハ勿論輕罪

ニハ禁錮以上ノ刑ニ該ル者ニ限ルモ罰金ノ刑ニ該ルヘキ輕罪若クハ違警罪ノ被告人ニ對シテモ拘留狀ヲ發スルヲ、センカ未決拘留却テ本刑ヨリ重キ不都合ヲ生シ被告人ニ害ヲ與フルヲ夥シク又公平ノ道ニアラサルヲ以テナリ此條件ニハ決シテ例外アルヲナキト知ルヘシ

然ラハ未決拘留ハ何ノ必要アリヤ曰ク事實ノ發見ヲ容易ニシ證據ノ湮滅ヲ防キ刑ヲ執行スルヲ得ル等ノ便宜アリ然レトモ一方ヨリ之ヲ云ハ、被告人ハ元來罪人ニアラス故ニ親切ニ取扱ハサルヘカラス殊ニ豫審判事ハ取調ヲ迅速ニシ其事件ヲ落着スルニ注意スルヲ要ス然ラスンハ被告ヲ拘束ノ痛苦ヲ與フルヲ甚シキ恐レアリ又未決拘留ヲ受ケタルモノトカ無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ受クルヲ其例ニ乏シカラサルヲ以テモ拘留狀ハ必要已ムヲ得サルニ非レハ發スルヲ得カラシムヘキモノトス故ニ前述ニ條件具備シタルハトテ必ラス拘留狀ヲ發スヘシトイフニ非ス被告人ノ地位名望行狀等ヲ査定シタル後之ヲ發スルヤ否ヤハ判事ノ權内ニアルヘク寧ロ之ヲ發セサルコソ事理ノ當然トイフヘキモ不可ナカルヘシ

○第七十六條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名、職業、住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌、體格等ヲ明示ス可シ
又令狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ
召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ拘引狀、拘留狀ハ巡查、憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セ

(註) 前數條ハ拘引狀召喚狀拘留狀ニツキ特別ノ規定ヲ設ケタルカ本條以下ハ此三種ノ令狀ニ共通ノ規定ヲ取り間々特別ノモノヲ掲ケタリ

令狀ハ官吏ノ作ルヘキ書類ノ一ナルヲ以テ第二十條書類調製ノ規定ニ從フヘキハ勿論尙ホ本條ノ條件ヲ具備スルヲ要ス其被告事件ヲ豫カメ明示スルハ被告人ニ辯護ノ方法ヲ與ヘ且ツ拘引狀召喚若クハ拘留ノ理由ヲ知ラシムルカ爲メナリ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載スヘキハ言ヲ俟タズ但召喚狀以下云々ハ氏名分明ナラサル被告人ニ對シテハ召喚狀ヲ發スルヲ能ハサルヘク故ニ但書以下ハ召喚狀ヲ發スルノ場合ニハ適用スルヲナシ

第二項ハ讀ンテ明文ノ如シ第三項召喚狀ハ必ラス執達吏之ヲ送達スヘキモノトス第十九條ニ從ヘハ書類ノ送達ニツキ特別ノ規定ナキトキハ民事訴訟法ヲ適用ストアリ所謂特別ノ規定ハ本條第三項ノ如送ヲ云フ故ニ民事訴訟法ニ從ヒ郵便ニ由ル送達ヲ爲スヲ許サス蓋シ送達ノ確實ナルヲ要スルヲ以テナリ拘引狀拘留狀ノ執行ハ公力士即憲兵卒巡查ノ職務ニ委ヌルハ被告人ノ身体ヲ拘束スルノ必要アルヲ以テナリ故ニ送達トイハスシテ執行即強制執行ノ意ヲ包含セシムル所以ナリ

○第七十七條 拘引狀、拘留狀ハ時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查、憲兵卒數人ニ分付スルコトアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ其正本

謄本ニ執行ノ場所日時ヲ記載シ被告人ヲシテ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

(註) 本條ハ拘引狀拘留狀ノ執行ニ關スル特別ノ規定ナリ豫審判事ノ作ルヘキ令狀ハ通例一通タルニ止マルト雖被告人逃亡潜伏ノ場合ニハ巡查憲兵卒二人以上ヲ要スルヲアルヘク從テ各人ニ正本一通宛チ分付セサルヘカラス(令狀ノ正本ヲ所持セサル憲兵卒巡查ハ執行スルヲ得ス是レ正本數通ヲ作ル場合ヲ生スル所以ナリ令狀ノ正本ハ被告人ニ下付スヘキモノニ非ス巡查憲兵卒ノ此處分ハ豫審判事ノ命令ニ出テタル即適法ノモノタル證據ニシテ執行ヲ爲ス巡查憲兵卒ノ爲メニスルモノナリ故ニ其適法ノ證據ヲ被告人ニ示セハ即十分ナリトス但謄本ハ被告人ニ下付スルヲセリ其正本謄本ニ執行ノ日時場所ヲ記載スルノ理由ハ日時ハ時効中斷ノ原因トナルヘク場所ハ執行ヲ爲スヘキ正當ノ管轄タルヲ(第七九參照)ヲ明カニセシカ爲メナリ

○第七十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタルトキハ其地ノ市町村長又其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルニ否トニ拘ハラヌ搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス但旅店、割烹店、其他夜間ト雖凡衆人ノ出入ス

ル場所ニ付テハ其公開時間内ニ限り何時ニテモ搜索ヲ爲スコトヲ得

(註) 本條ニハ唯令狀トアレトモ召喚狀ハ之ヲ包含セス即拘引拘留狀執行ノ爲メ被告人搜索ヲナストキノ手續ヲ示ス家宅搜索ハ人ノ家宅權ヲ侵害スルモノナレハ必要ノ場合ニ非スノハ之ヲ行フヲ許サス且丁寧ナル手續ヲ要スルヤ言テ俟タス故ニ今一々其條件ヲ示サムトス

第一 令狀ヲ携帶スヘキコト 家宅搜索ハ令狀ノ執行ニ基ツクカ故ニ此條件ヲ要スルハ言テ俟タス假令家宅搜索ヲ爲スニ至ラサルトキト雖モ必ラス令狀ヲ携帶セサルヘカラス
第二 被告人家宅内ニ潜匿シタリト思料スルコト 家宅搜索ハ證據物件ヲ發見スル爲メニ非ス被告人ニ對スル令狀執行ノ爲メナルヲ以テナリ此條件ノ家宅搜索ニ必要ナルヤ言テ俟タス而シテ家宅ハ被告ノ家宅ナルト他人ノ家宅ナルトヲ問ハサルナリ
第三 其地ノ市町村長其他ノ吏員此等ノ者差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會アルコト 此等ノ立會ヲ求ムルハ令狀執行ヲ爲ス憲兵卒巡査ノ處分ノ正當ナルコトヲ確保セシメンカ爲メニシテ一方ヨリイハヤ憲兵卒等ヲシテ不法ノ處置ヲ爲サシメムトノ意ニ在ルナリ
第四 日出後日没前ナルコト 夜間ハ吾人ノ静息スヘキ時ナレハ家宅ニ侵入スルハ之ヲ許サス然レハ家宅主人ノ甘諾ヲ得レハ其手續無効タラス承諾ハ明示ヲ要セス默示ニテ足レリトス且此條件ハ旅店烹店等(其他云々ハ寄席貸坐敷等ヲ云フ)ニハ適用セス但此等ノ場合ト雖モ公開時間後ハ家宅搜索ヲ行フヲ許サス公開時間後トハ寄席ニ就キテ云ハハチヨ

リ後ノ如キヲ云フ

第五 搜索調書ヲ作ルコト 但被告人ヲ發見スルト否トニ關セズ立會人ト共ニ署名捺印シ家宅搜索ノ始末書ヲ調製シ第八十三條ニ從ヒ檢事ニ差出スヘキモノトス

○第七十九條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潜匿シタルコトヲ知り又ハ潜匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキハ巡査、憲兵卒ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡査、憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事、檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

(註) 本條ハ令狀ノ帶行ニ係ル規定ナルカ被告事件重大ニシテ急速ヲ要スル場合ニ限り本條ヲ適用スルコトヲ得然ラサル場合ニハ相互ノ管轄ニ從ヒ之ヲ重シスヘシ猥リニ他ノ管轄ニ侵入スルヲ得ヘカラスマタ令狀ヲ帶行スル憲兵卒巡査ハ直チニ執行處分ヲ行フコトヲ得ズ必ラス其被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察署ニ令狀ル示シ執行ヲ求ムヘシ而シテ請求ヲ受ケタル官吏ハ其令狀ノ裡面ニ執行ノ請求ヲ受ケタル旨ヲ記載シ署名捺印スヘキナリ是レ管轄ヲ正ス所以ナリ

○第八十條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサルトキハ各檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送達シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲スコトヲ請求スルヲ得
請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜查及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ此場

合ニ於テ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ拘留狀ト同一ノ效チ有ス

(註) 被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサル場合ニハ各檢事長(各控訴院ニ一人ノ檢事長ヲ置ク)ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ以テ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ請求スルコト得ヘシ而シテ此場合ニハ豫審判事ハ令狀ヲ發スルコト能ハサルヲ以テ被告人ヲ發覺シタル地ノ檢事ニ於テ逮捕狀ヲ發スルモノトス此逮捕狀ノ性質ハ拘留狀ト同一ノ効力ヲ有シ被告人ヲ拘束スルヲ得以テ豫審判事ニ送致スヘキモノトス抑逮捕狀ハ被告人刑ノ言渡アリテ裁判執行ノ爲メ檢事ノ發スル行政處分ナルヲ正則トシ本條ノ如キハ其例外タリ故ニ本條ヲ適用スル場合ハ被告事件ノ重大ナル場合ニ限り之ヲ行フヘシ些少ノ犯罪ニ迄及ホスヘキニアラズ

○第八十一條

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示ス可シ其長官又ハ隊長ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ

(註) 「司法權ハ軍門ニ及ハス」ノ格言ニ基ツク豫備後備ノ軍ニ在ラサルハ現役ノ事ナリ而シテ本條ハ全ク無用ノ條文トス何トナレハ軍人ノ犯罪ハ特別裁判所即軍法會議ニ於テ裁判スルヲ以テ本法ヲ適用スヘキ場合ナシ

○第八十二條

拘留狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監獄署ニ引致ス可シ若シ其監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ假ニ最近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ

(註) 拘引狀ハ豫審判事ノ前ニ引致(七三)スルニ止マルモ拘留狀ハ監獄署ニ引致スルノ力アリ即人ヲ拘束スルヲ許セタルニ由ル

○第八十三條

令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲兵卒ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能ハサルトキハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

○第八十四條

拘留狀ヲ受クヘキ被告人既ニ監獄署ニ在ルトキハ執達吏ヲシテ之ヲ本人ニ送達セシムヘシ

○第八十五條

密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬、故舊又ハ辯護士ニ接見スルコトヲ得
書翰、書籍其他ノ書類ハ豫審判事又ハ判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事又ハ檢事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得

○第八十六條

豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノニ非スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ拘留狀ヲ取消スヘシ

○第二節 密室監禁

(註) 密室監禁ハ事實ノ發見ヲ容易ニシ證據ノ湮滅ヲ防クカ爲メ被告人ヲ別室ニ拘束監置スルヲ云フ故ニ通常ノ未決拘留狀ニ比スレハ被告人ヲ束縛スルコト過酷ナルヲモテ其局ニ

當ルモノ殊ニ慎重ヲ加ヘサルヘカラス

○第八十七條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタルトキハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ拘留狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スル言渡ヲ爲スコトヲ得

(註) 密室監禁ハ左ノ條件ヲ具備スルトキ之ヲ言渡スヲ得但言渡スト否トハ豫審判事ノ職權内ニ在リ命令法ニアラス

第一豫審中ナルヲ 豫審終結ヲ告ケタルトキ最早密室監禁ヲ言渡スヘカラス已ニ事實發見ト證據蒐集ノ處分已ニ熟シタルヲ以テ之ヲ言渡スノ必要ヲ見ス

第二事實發見ノ爲メ必要ナリト思料スルトキ 別ニ説明セス

第三拘留狀ヲ受ケタル被告人ナルヲ 密室監禁ハ未決拘留ノ一種ナリ故ニ此條件ノ必要ナル言ヲ俟タズシテ明カナリ

○第八十八條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

○第八十九條 密室監禁ハ十日ハ超過スヘカラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得言渡ヲ更改スルトキハ其事由ヲ裁判所長ニ報告スヘシ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問スヘシ

第二節 證據

(註) 本節ノ所謂證據ナルモノハ重ニ證據調ニ關スル規定ヲ掲ケタル者ニシテ審ニ豫審ニ

限ラス公判ニモ準用スルヲ得ルナリ而シテ豫審ニ於テ證據ヲ取調フルハ只其事件ト其人ニツキ公判ニ付スヘキモノナルヤ否ヤヲ決定スルニ過キス且又其言渡タルオヤ豫審判事一已ノ命令ニシテ口頭辯論ヲ開キテ言渡スモノニ非ス即其言渡ヲ判決ト云ハスシテ決定ト謂フ所以ナリ公判ハ被告人犯罪ノ有無ヲ判決スルモノナルヲ以テ事件大ニ重シ故ニ豫審ニ於テハ其終結後ト雖新證據アルニ於テハ更ニ起訴スルヲ得ルコトヲシタリ

○第九十條 被告人ノ自白官吏ノ檢證調書、證據物件、證人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ徵憑ハ判事ノ判定ニ任ス

(註) 治罪法第百四十六條ニ曰ク

法律ニ於テハ被告事件ノ模倣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ
被告人ノ自白官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

本條ニハ第一項ヲ删除シタレトモ反對ノ意味アルニ非ス蓋シ昔時ニハ口供結案法ナルモノアリ口供結案法トハ明カニ自白ヲ以テ唯一ノ證據ト定メタトヒ他ノ證據十分完備セルモモシ被告人ノ自白ヲキハ之ヲ有罪視スルヲ許サズ而シテ被告人ノ自白一タヒアリタルヤ他ノ證據ヲ取調フルニ及ハス本案ハ終結ヲ告グルコトナル蓋シ此方法ヲ非常ニ重キテ自白ニ措キタルカ故ニ被告人ノ自白ヲ得ンカ爲メニ淺酷ナル拷問ヲ行ヒ其結果タル被告人ハ其痛苦ヲ耐ヘスシテ冤罪ニ誣服スルヲ免カレス且自白トテ決シテ信ヲ置クヘキニアラス被告人罪ノ輕キモノ、ミテ自白シテ他ノ重キ犯罪ヲ隱散スルノ手段トナスコトモア

ルヘシ故ニ此口供結案法ハ弊害ヲ出スルヲモテ之ヲ廢シ心證結案法トナリタリ
 心證トハ卽判事ハ虛心平氣眞實ヲ確認スルノ謂ニシテ被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證
 據物件等ハ畢竟其材料タルニ過キヌ故ニ判事ハ心證ヲ形ツクルニハ此等ノ材料ニ束縛セ
 ラル、コトナク判事ノ良知良能ヲ以テ自由ニ判斷スルコトヲ得然ラサレハ從反テ主ヲ制スル
 ノ不法ヲ免カレサルヲ以テナリ民事ニ於テハ或證據ハ判事ヲ縛束シ判事ハ必ラス其證據
 力ニ服從スヘクモ反對ノ場合ニハ上告ノ原由トナルコトアリ然ルニ刑事ニハ此等ノ事ナ
 シニ判事ノ判斷如何ニ在ルノミ

○第九十一條 豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要
 ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

(註) 豫審判事ハ職權ヲ以テ證據徵憑ヲ集取スルコトヲ得檢事請求アルニ非スハ豫審處分
 ニ着手スルコトヲ得サレト已ニ公訴ヲ受理シ豫審處分ニ着手シタル以上ハ證據蒐集ハ判
 事ノ職權ヲ以テ自由ニ之ヲ行フコトヲ得ルナリ民事ニテハ判事ハ證據蒐集ノ權ナク唯當事
 者ノ提出シタル者ニツキテノ判斷ヲ與フルニ過キヌ是レ民刑ノ差異ナリ被告人檢事ハ
 利害關係人ナルヲ以テ證據蒐集ヲ請求スルコトヲ得ヘキハ勿論サレト判事ハ其請求ニ應ス
 ル義務アリト誤想スヘカラス且證據蒐集ハ事實發見ノ爲メ必要ナル處分ニ止マルハ喋々
 ヲ要セサルヘシ

○第九十二條 豫審判事臨檢、搜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判所書記

ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印スヘシ
 裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監
 獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシムヘシ
 前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印スヘシ
 書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカルヘシ

(註) 此等證據ヲ集取スル處分ニツキ必ラス裁判所書記或ル場合ニハ立會人ノ立會ヲ必要
 トス然ラサレハ其處分ハ效力ヲ失スルコトナリ(例之時効中斷ノ效力ナキカ如シ)本條ハ
 一見明白詳説ノ勞ヲ取ラサルヘシ

本節ハ次節ト相對峙スルノ觀アリト雖以下第四節乃至第八節ノ通則トモ云フヘキヲ以テ
 敢テ節名ニ拘泥シテ誤解セサルコトヲ要ス

○第一節 被告人ノ訊問及ヒ對質

○第九十三條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問スヘシ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急
 速ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

(註) 本條以下ハ證據蒐集ニ於ケル方法ヲ規定スルモノトス豫審判事カ公訴ヲ受理シタル
 トキ事實發見ノ爲メ第一ニ着手スヘキハ被告人ノ訊問トス被告人ヲ猶豫スルトキハ
 被告人ヲシテ虛構捏造以テ法網ヲ脱スルノ恐アリ且被告人ヲ訊問スルトキハ事件ノ大体
 ヲ知了ルコトヲ待ルヲ以テ其他ノ檢証處分證人訊問ヲ爲スニ當リテモ大ニ便宜ナルヘシ

是ヲ以テカクノ如ク規定シタル所以ナリ但證人尋問カ急速ヲ要スル場合ヲ如キハ必ラス之ヲ先ニセサルヘカラス假令證人ノ氣息將ニ絶ヘントスルトキノ如シ而シテ被告人ヲ訊問スルハ勾引狀又ハ召喚狀ヲ發シ或ハ被告人疾病其他正當ノ事由アルトキハ被告所在ノ地ニテ訊問スルコトモアルヘシ

○第九十四條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ニ自白セシムル爲ノ恐嚇又ハ詐言ヲ用ユヘカラス

(註) 前ニモ述ヘタルカ如ク昔時口供結案法ヲ用ヒタリシトキハ唯被告人ノ自白ヲ得シカ爲メニハ拷問ナルモノヲ設ケ被告人ノ身体ニ苦痛ヲ與ヘ以テ自白セシメント謀リ恬トシテ其殘酷ナルヲ恠マサリキ思ウニ斯ノ如キハ縱令其自白アリト雖自白ハ被告人ノ任意ニ出テタルモノニ非レハ信ヲ措クニ足ラス否却テ苦痛ニ堪ヘスニテ誣服マタルナラント推定スルコソ當然ナルベケレ故ニ拷問制度ハ取ルニ足ラサルハ勿論却テ判事ニ於テ刑法ノ制裁ヲ受クルコト、成ルヘシ而シテ本條ノ言ハントスルハ此レニ在ラスシテ被告人ノ精神ニ脅迫ヲ與フルモノ即恐嚇又ハ詐言ハ當局者之ヲ爲スコトヲ許サス故ニ其自白ヲ得タルモ其自白ハ無効ノモノトナリテ已マンノミサレトモ眞實ノ事ヲ告ケ訓誨スルハ決シテ咎ムヘキニアラシ是レ被告人ノ爲メニ利益トナルモノ不利益トナルコトナケレハナリ

○第九十五條 裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カスヘシ

豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシムヘシ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記スヘシ

○第九十六條 被告人其供述ニ付キ變更増減スヘキコトヲ申立タルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其訊問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印スヘシ

○第九十七條 被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

(註) 被告人訊問ニハ必ラス書記ノ立會ヲ要スルコトハ已ニ述ヘタル所ナリ書記ハ訊問(判事ノ)ト供述(被告人ノ)ト聞取リテ之ヲ錄取シタル後必ラス被告人ニ讀聞カセ其記錄ノ眞實ナルコトヲ確保セシム其錄取シタルモノハ訊問調書ニシテ證據トナリ公判ノトキニモ其効力ヲ存スルカ故ニ慎重ヲ加ヘサルヘカラス(第二項略)

被告人其供述ニツキ之ヲ變更又ハ増減スルルハ之ヲ許スコトヲ得ルカ曰ク之ヲ許サ、ルヘカラス要スルニ事實ノ眞正ヲ得ンカ爲メナルヲ以テナリ此時ニハ更ニ訊問ヲ爲ンテ前條ノ規定ニ從フヘク而シテ前調書ニ比シテ變換増減アルモ其證據ハ一ニ判事ノ判斷ニ任スルヲ以テ取捨撰擇ハ自由ナルヘク從テ變更増減ヲ許スハ利アリ更ニ害ナカルヘシ
被告人ハ供述書ノ謄本下付ヲ申立ツルトキハ必ラス之ヲ與ヘサルヘカラス被告人ハ公判ノトキ辨護ノ方法ヲ案スルカ爲メニハ其供述書ノ必要ナルハ辨テ俟タス(豫審ニハ辨護人ヲ付シ口頭辯論ヲナスコトナシ是レ豫審處分ハ公判ノ下調ヘニ止マルヲ以テナリ)且又豫審中ト雖モ第一訊問調書ハ被告人ハ第二訊問ノトキニ必要ナルヘク被告人ヲシテ自己ノ利益ヲ圖ラシムルコソ當然ナルヘケレ

○第九十八條 豫審刑事ハ被告人ノ共犯ナルコト、人違ナキコト其他事實ヲ發見スヘキ一切ノ

模樣ヲ證スル爲ノ必要ナリトスルトキハ被告人ト他ノ被告人、證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得

○第九十九條 書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第九十五條第九十六條ノ規定ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

(註) 本條ハ對質ノ事ヲ規定ス對質ハ訊問ノ變則ニシテ本條明示ノ場合ニ方リテ之ヲ爲ス

コトヲ得ルモノニシテ其場合ハ制限ノモノニアラサルナリ

對質トハ被告人ト他ノ被告人證人等トナ一場ニ列席セシメテ双方供述ノ異同ヲ辨明對正セシムルモノニテ證據蒐集上マタ必要ノモノトス即双方ノ容貌辭氣等ニ依リテ共犯人タルコト或ハ人違ニ非ル事其他ノ事實ノ眞正ヲ發見スルヲ得ヘキナリ被告人訊問ハ常ニ密行シテ他人ニ知ラセザルモノナルコト必要ノ場合ニハ之カ例外トシテ對質ヲ許スコトヲ得事實發見證據蒐集ノ主義ヨリ觀レハ相悖ルトコロナキナリ

故ニ書記ノ作ルヘキ調書モ通常訊問調書ニ比スルニ少差ヲ生スヘシ假令對質ノ場合ニハ對質人ノ供述ノミナラス其者ノ辭氣模樣動作等即對質ニ由リテ生スル一切ノ事件ヲ錄取スルモ通常訊問調書ハ唯其供述ヲ錄取スルノミ最モ對質人ニ讀聞カスヘキモノハ單ニ其者ノ供述部分ニ止マルモノトス其他ノ部分ヲ讀聞カスヘキニ非ル事ハ喋々ヲ要セスシテ明カナルヘシ

○第一百條 被告人又ハ對質人聾ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者、啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人聾ニ通セサルトキ亦同シ

(註) 被告人等聾者啞者ニシテ文字ヲ知ルモノナラハ聾者ニハ書面ヲ以テ訊問シ口頭ニテ供述セシメ啞者ニハ口頭セテ訊問シ(啞者ハ多ク聾者ナルヘシ從テ書面訊問ヲ多シトス)

書面モテ供述セシム 此等ノ者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ用ヒ意思ヲ發表セシムルコト外ナシ通事ハ眞實ニ通譯スヘキ旨ヲ宣誓スヘキハ言ヲ俟タス

被告人等外國人ニシテ日本語ヲ解セサルトキハ勢通事ヲ用ヒサルヘカラス況ンヤ裁判所構成法ニ於テ「裁判所ニ於テハ日本語ヲ用フ」トノ原則ヲ明揭シタルヲヤ

然リト雖其被告人若クハ對質人カ皆外國人ニシテ日本語ヲ解セス而シテ豫審判事裁判所書記等皆其國語ニ通スルトキハ別ニ通事ヲ用フルノ必要ナキヲ以テ例外トシテ其外國語ヲ以テ訊問及ヒ對質ヲナスコトヲ得ヘシ

○第一百一條 通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第三百三十六條第三百三十七條第三百四十一ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

(註) 本條ハ別ニ註釋ヲ要セスシテ明了ナルヘシ

○第五節 檢証搜索及ヒ物件差押

(註) 前節ノ規定ニ從ヒ被告人ヲ訊問シテ十分証憑蒐集ノ方法ヲ盡シタルトキハ敢テ本節ヲ要セサルヘキモ犯罪ノ種類ニ由リテハ尙十分ナラサルコト多キニ居ル是ヲ以テ法律ハ檢證搜索及ヒ物件差押ノ方法ヲ與ヘタリ此等ノ者ノ性質ハ各條ニ於テ説明スヘシ

○第百二條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

(註) 檢證トハ豫審判事(現行犯ノトキニハ檢事其他司法警察官モ之ヲ行フコト得)ハ犯罪ノ場所其他事實發見ノ爲メ必要ナル場所ニ臨檢シ諸種犯罪ノ情況ヲ觀察スルヲイフ蓋シ犯罪ノ種類ニ由テハ勢其犯罪場所等ニ臨ミテ檢査スルノ必要ナキニアラス此ノ如クスレハ被告人証人ノ陳述ノ及ハサルトコロヲ知悉シ或ハ被告人証人陳述ノ虛偽ナリシコトヲ發見スルヲ得ヘク判事ノ心證ヲ形ククルニ至大ノ勢力ヲ有スルモノナリ

○第百三條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ摸樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ摸樣ヲモ記載スヘシ
(註) 被告人ノ供述ニ於テモ調書ヲ要スルト同シ檢證ニモ必ラス其書面ヲ作ラサルヘカラス其調書ハ官吏ノ調製スヘキ書類ナルコトモテ總則一般ノ方式ニ從フハ勿論主トシテ本條ノ規定ニ從フコトヲ要ス
犯罪ノ性質 殺人ニツキテハ謀殺過失殺若クハ毆打致死ナルヤ其殺人所爲ノ性質ヲ明

記ス

犯罪ノ方法 竊盜ニ就テ云ハ、持兇器ナルカ門戶牆壁ヲ踰越シタルカ等ヲ明カニスルヲ要ス

犯罪ノ日時 被告人ノ年齢ハ不論罪又ハ宥恕減輕ノ原因トナルヘクマタ公訴時効ニモ大關係アリ其必要ナルハ言ヲ俟タズ

犯罪ノ場所 裁判所ノ管轄ニ影響ヲ及ホシ或ハ場所ノ公然ト否トヲ以テ犯罪構成ト否トニ關スルモノアリ

其他被告人ノ人違ナキコトヲ證明スヘキ摸樣ヲモ記載シ又被告人ノ利益トナルヘキ摸樣ヲ記載セサルヘカラス是レ豫審處分中ハ被告人辨護權ヲ行フコト能ハサルヲ以テ判事ニ於テモ其利益トナル情況ヲモ記載スルハマタ必要ナルヘシ

○第百四條 豫審判事ハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明スヘキ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居ニ臨檢シ搜索ヲ爲スコトヲ得被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住居ニ在ラサルトキハ市町村長ノ立會アルヲ要ス第七十八條第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

(註) 本條ハ住居搜索ノ事ヲ規定ス住居搜索トハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明スヘキ物件ヲ藏匿スル疑ノ住居ニ臨檢シ此等ノ物件ヲ差押フルコトヲ目的トス故ニ檢證ハ犯罪ノ場所其他事實發見ノ爲メ必要ナル場所ニ臨檢スルヲ以テ其場所甚ク汎ク(畜ニ住居ニ止マラス)且其目的タル物件差押ニ在ラスシテ犯罪事件ノ摸樣ヲ檢査スルニ在リ故ニ之ヲ混同

スヘカラス物件ヲ藏匿云々ハ刑法ニ所謂證據ヲ湮滅セシメテ故意ヲモテ犯罪ヲ證明スヘキ物件ヲ藏匿スルニ限ラズ物件ヲ占有スルノ意ト解釋スヘキヲ以テ適當トス辭ニ由テ意ヲ害スルコトナカレ第二第三項ハ元來住居搜索タルヤ住居不可侵ノ本則ニ例外ヲ設クルモノナルヲ以テ慎重ノ手續ヲ要スル旨ヲ規定ス然レトモ第七十八條ハ被告人ヲ拘引拘留スルカ爲メニ家宅搜索ヲ爲スニ在リテ本條證據物件差押トハ差異アルヲ注目スヘキナリ而シテ日出前日没後ハ住居搜索スルヲ許セ、ルハ彼此全一ナリ

○第五條 豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明スヘキ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ就キ搜索ヲ爲スコトヲ得

(註) 搜索ハ此等ノ人ノ住居ノミニ非ス此等ノ者ノ身體又ハ此等ノ人ノ占有ニ係ル物件ニ證據物件ヲ藏匿スル場合ニハ其身體物件ニモ及フモノトス身體ニ就キ搜索スルコトハ身體檢査ト混全スヘカラス身體檢査ハ假令創傷ノ輕重模樣等ヲ檢査スルノ云ヒナレトモ身體搜索ハ唯身體部分ノ中ニ物件ヲ隱匿スルヤ否ヤヲ搜索スルヲ云フ

○第六條 豫審判事ハ臨檢、搜索ニ因リ發見セタル物件其事實ヲ證明スルニ足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ

(註) 本條ハ物件差押ノヲ規定ス即前數條ニ說明セル檢證又ハ搜索ニ由テ得タル證據物件ノ散逸ヲ防カサルヘカラス其物件タル詳細ニ觀察スレハ夫刑法ニ於テ沒収スヘキ物件

モ此中ニ包含スヘシ即犯罪ニ由テ得タル物件犯罪ノ用ニ供シタル物件應禁物其他思タル携帶品其他罪ノ有無ヲ證明スヘキ一切ノ動產物ヲ稱ス而シテ之ヲ差押フルニ認印目錄ヲ用フルハ其増減變換ヲ防キ正確ヲ保スルニ出ツルナリ末文讀シテ明文ノ如シ

○第七條 豫審判事ハ臨檢、搜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

○第八條 被告人ハ臨檢、搜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

若シ被告人拘留ヲ受ケタルトキハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス

(註) 前數條ニ說明セル臨檢、搜索、物件差押ニ付其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ夜分マテ續行スルヲ得ス必ラス之ヲ中止スルヲ要ス蓋シ處分ニ遺失脫漏等ノ虞ナキニアラス且人ノ安寧ヲ破ルヘケレハナリ然レトモ此處分ヲ中止スルトキハ亦證據ノ散逸ヲ來シ易シ故ニ其場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置キ以テ物件ノ散逸ヲ防クヲ得セシムルナリ被告人モ亦此等ノ處分ニ立會ハシムルヲ許スハ一面ニ於テハ事實發見ノ便益ヲ圖リ一面ハ被告人ノ利益ヲ保護スルノ計ニ出テタルモノナリ已ニ檢證ノ場合ニ於テ被告人ノ利益タル模樣ヲモ調書ニ錄取スヘキモノトセリ亦物件差押ニモ被告人ノ利益トナルヘキ物件ヲモ差押フヘキハ言ヲ俟タズ要唯事實(被告人ノ利不利ヲ問ハス)ノ發見ヲ圖ルノミ且被

告人ヲシテ此處分ニ立會ハシムレハ處分ノ公平ナルヲ信セシムルニ足ルヘキナリ然レトモ此處分ニ立會ハシムルハ豫審判事ノ意見ニ一任シ命令法ヲ用ヒサルハ犯罪ノ種類ニ由リテハ却テ處分ノ遷延遲滯ヲ來スコトヲ恐ルカ故ナリ然レトモ當局者ハ成ルヘク被告入若クハ代人ヲシテ立會ハシメンコト努ムヘキナリ

○第九條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

○第十條 豫審判事ハ臨檢、搜索ノ場所ニ於テ證人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスルトキハ第百十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

(註) 已ニ物件差押ノ處分了リタルトキハ豫審判事ハ必ラス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシムヘキナリ此ノ如クスレハ被告人不實ノ事ヲ虛構スルモノハ言語容貌ノ間ニ之ヲ看破スルコトヲ得ヘク假令被告人ノ携帶品ニシテ犯所ニ違留シタル物ノ如キ之ヲ示シテ訊問スルトキハ大ニ事實ヲ發見スルコトヲ得ヘシ又被告人純粹無罪ノ者ナラハ辨解モ明瞭迅速ナルヘク判事ハ之ヲ察シテ其無罪ヲ認知スルコトヲ得ヘシ前條ノ立會ハ物件存在ノ現場ニ就テ言フモノニシテ本條ノ辨解ハ認廷内ニ行フナ原則トス然レトモ其現場ニ於テ訊問辨解ヲナスハ大ニ其事實ヲ得ルニ便宜ナルヘシ亦此辨解訊問ハ前條ノ立會アリタルト否トヲ問フノ必要ナシ

本條ハ判事ニ向ツテハ命令法ナルモ被告人ニ向フテハ然ラス故ニ判事ハ必ラス物件ヲ示シ訊問セサルヘカラスト雖其辨解ヲ爲スト否トハ被告人ノ自由ニ在リ若シ明白ノ辨解ヲナサハルトキハ自己ノ不利益トナル結果ヲ生スルコトナルノミ

第百十條ハ讀ンテ明文ノ如シ別ニ説明ヲ付セス

○第十一條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得

(註) 豫審判事カ前述ノ處分中何人ト雖判事ノ允許ヲ得サルトキハ其場所ヨリ出テ又ハ入ルコトヲ禁スルヲ許セリ是レ被告人若クハ證人其他何人ニ限ラス自由ニ出入スルコトヲ得ルトキハ證據ヲ湮滅破壞シ臨檢其他ノ處分ヲシテ徒勞ニ屬スルコトヲナシトセシ豫審處分ノ結果トシテ此權力ヲモ豫審判事ニ與フル所以ナリ若シ其禁ヲ犯スモノ即判事ノ允許ナキニ其場所ニ入ルモノハ之ヲ逐斥シ出テントスルモノハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得ルモノトセリ此逐斥ニ遇ヒテ猶抗拒スルトキハ官吏ニ對シテ抗拒スル罪ヲ構成スルヲ得ヘシサレト留置セラレタルモノカ逃走シタルトキハ之ニ擬スルニ囚徒逃走罪ヲ以テスヘカササルハ勿論タリ何ントナレハ此留置ハ唯一個ノ取締處分ニシテ刑罰ニアラス然レトモ暴行脅迫ヲ以テ此留置處分ニ抗拒スルトキハ官吏抗拒ノ犯罪ヲ構成スルヲ得ヘキナリ(刑法第百卅九條以下參照)

○逐斥トハ
ウオヒハト
ナラ

○第一百十二條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢、搜索、物件差押ノ事ヲ區裁判所判事ニ囑託スルコトヲ得

○第一百十三條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

○第一百十四條 證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其默祕ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルコト非サレハ之ヲ差押ヘ及ヒ開披スルコトヲ得ス

(註) 信書ノ秘密ハ憲法ニ於テ特筆大書シ以テ保護スルトコロノモノナリ故ニ一个ノ人ノ私益ヲ保護スルカ爲メニハ信書ノ秘密ヲ侵スヘカラスト雖公益上之カ例外ヲ設クルハ亦至當ノ事ナリトス而シテ被告人又ハ豫審事件ニ關係アルモノ假令證人鑑定人等ノ者カ發シ又之ニ對シテ發シタル總テノ信書ヲ受取リ之ハ開披スルコトヲ得物件(信書ニ非サル其他ノ)モ之ニ準ス此事ノ爲メニハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ヘ前以テ通知シ置カサルヘカラスト又此等ノ者ヨリ受取リタルトキハ受取證書ヲ交付スヘク以テ其信書物件所在ノ正確ヲ證スルカ爲メナリモシ其物件ニシテ沒収スヘキハ沒収スヘク差出人又ハ受取人ニ還付スヘキモノハ之ヲ還付シ後之ヲ諸官署會社ニ通知シ若クハ諸官署會社ニ交付ス可ナリ此等ノ處分タル異常例外ニ屬スルヲ以テ重大煩雜ノ事件ニ於テ適用スヘク假令國事犯罪ノ如キ是ナリ

第一百十四條ハ證人訊問ノ規定中該當ノ處ニ其説明ヲ讓ル

○第六節 證人訊問

(註) 證人ニ廣義ノモノト狹義ノモノトアリ廣義ノ證人ハ純粹ノ證人ト事實參考人トヲ併稱シ狹義ノ證人ハ純粹ノ證人ノミヲ云フ故ニ本節ニ證人ノ文字アルトキ其果シテ廣義ナルヤ否ヤハ場合ニ由リテ之ヲ知ラサルヘカラスト而シテ純粹ノ證人ト事實參考人トノ差違ヲ擧ケンニ證人ハ宣誓ヲ要スルモ事實參考人コハ之ヲ要セス從テ甲カ不實ノ虛構ヲ申立ツルトキハ刑法偽證罪ニ問ハルヘキモ乙ニハ此犯罪ヲ構成スルコトナシ又事實參考人ハ其人ノ身分能力ニ由リテ證人タルノ資格ヲ有セス是レ一ノ變則トモ云フヘキナリ而シテ證人ノ陳述ト事實參考人ノ陳述ニ於ケル證據力ニモ重輕ノ別アルカ如シト雖凡テ諸般ノ證憑ハ判事ノ判斷ニ一任スルヲ以テ事實參考人ノ供述或ハ證人ノ供述ヨリハ判事心證上至重ノ力ヲ有スルコトモアルヘク一概ニ論スヘカラスト

而シテ證人ハ判事ノ耳目ノ及ハサルトコロ身補フモノニシテ其供述ノ果シテ信ヲ措クニ足ルヤ否ヤハ他ノ證據物件ニ比シテ不確ノ感ナシトセス當局者特ニ慎重ヲ加ヘサルヘカラスト彼民事ニテハ或證據ニハ裁判官ヲ拘束スルノ効力ヲ與ヘタルモ證言ハ一ニ判事ノ採否ニ任カスト明定シタル所以ナリ刑事ニ至リテハ判事ヲ拘束スヘキ證據ナキヲ以テ特ニ證人ニ就テ之ヲ言フノ必要ナキナリ

○第一百十五條 證人ノ呼出狀ニハ其氏名、住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ又出頭ノ日時場所及ヒ呼

出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且拘引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ
呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クモ二十四時ノ猶豫アル可シ

(註) 證人ノ呼出狀ニ記載スヘキ事項ハ其氏名、住所及ヒ職業ヲ記載ス是人違ナカラシメ
ン爲メナリ次ニハ出頭ノ日時場所是モ亦必要ノ事項ナリ
呼出ニ應セサルトキハ云々此規定ハ被告人ノ召喚狀ニモ記載スヘキカ如シト雖特ニ證人
訊問ニ限ルハイカナル理由ニヤ(最被告人ニ對スル召喚狀ニハ罰金ヲ言渡ス云々ヲ記載
スヘキニ非ルハ言ヲ俟タス)又二十四時間ノ猶豫ヲ與フルハ實事整頓ノ準備時間ヲ與フ
ルモノトス

此他被告事件ノ何タルヤモ記載スヘキハ言ヲ頓タス然ラサレハ證人ヲシテ既往ノ事實ヲ
追憶スルノ便ヲ失ハシムルヲ以テナリ本條ノ證人ハ事實參考人ヲモ包含ス所謂廣義ノ證
人ナリ

○第百十六條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ
豫審判事其所任ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

(註) 凡テ訊問ハ訟庭ニ於テ行フ本則トス本條ハ之カ例外ナリ第七十四條ヲ參考スヘシ
其他皇族ヲ證人トシテ訊問スルトキハ必ラス其所在ニ就キテセサルヘカラス是其身分ヲ
重ニスルガ爲メナリ

○第百十七條 證人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ナルトキハ其所屬ノ長

官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可
シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請
求ス可シ

(註) 呼出狀ハ凡テ本人ニ向ヒ直接ニ送達スルヲ本則トスルモ此等ノ人ニ向フテハ必ラス
其所屬ノ長官若クハ隊長ヲ經由シテ送達スヘキナリ是レ此等ノ人ハ其身分軍律ニ拘束セ
ラレ其舉動一ニ其長官又ハ隊長ノ指揮ニ服從スルノ義務アルヲ以テカク規定シタルナリ
サレド軍人軍屬ト雖現役ニ從事シタルモノニ限ルヘキハ勿論豫備後備ノ軍籍ニ在ルモノ
ハ自由ニ出頭スルヲ得ヘケレハ本條ヲ適用セズ而シテ長官又ハ隊長コ一ノ義務ヲ負擔セ
シム(1)職務上何等ノ差支アラサルトキハ出頭セシムヘキ旨ヲ即時ニ認可スヘク(本條即
時ニノ文字ヲ以テ出頭ノ語ニ連續セシムヘカラス呼出狀ノ出頭時日ハ必ラスシモ即時ニ
アラス唯認可ヲ直チニス可キヲ云フ)又ハ(2)職務上差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出頭
ノ延期ヲ請求セサルヘカラス若シ其軍人軍屬ガ疾病ニテ出頭スルヲ能ハサルトキハ職務
上ノ差支ニアラサルヲ以テ長官又ハ隊長ハ(1)ノ處置ヲ取ルヘキモノト思考ス本條證人モ
廣義ナリ

○第百十八條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除外證人呼出ニ應セサルトキハ檢
事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス
可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外ニ倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ其勾引狀ニ付テモ亦同シ

(註) 證人ハ呼出ニ應シテ出頭スヘキ公義務アリモシ役人カ私益ヲ先ニシテ公義務ヲ後ニ

スルトキハ制裁ヲ加ヘサルヘカラス然ラズンハ證人トシテ出頭ヲ命セラル、モノ一人ト

シテ出頭スルモノナルヘク何ヲ以テ司法權ヲ大ニシ事實ノ發見ヲ求ムルヲ得ンヤ然レト

モ證人ニシテ(一)疾病其他正當之事由(通常人ト現役軍人軍屬トト問ハス)(二)現役ノ軍

人軍屬ガ職務上差支アルトキニハ縱令出頭セザリシトテ此制裁ヲ受クルコトナシ

其制裁トハ何ソ曰ク(甲)其不參ニ由リテ生シタル費用(民事ノ損害賠償)及ヒ二圓以上二

十圓以下ノ罰金(刑事)ヲ言渡スヘシ

此言渡ハ判決ヲ以テセス決定ヲ以テス判決ハ公判ニ事ガ口頭辯論ヲ爲サシメタル後言渡

スヘキモノ(以下公判ノ處ニ至リテ明カナリ)ナルモ決定ハ口頭辯論ヲ爲サス直ニ豫審判

事一己ノ意見ヲ以テ言渡スモノニシテ一ノ變例タリ且檢事ノ公訴提起ヲ俟タス唯豫審判

事ガ檢事ノ意見ヲ求ムルニ止マル而シテ判決ニ對シテハ控訴上告ヲ以テ不服ヲ申立ツル

モ決定ニテハ抗告ヲ許スノミ(此等不服申立ノ方法ハ後條ニ由リテ分明ナルヘシ)殊ニ次條決定取消ノ如キハ非常ノ例外トス蓋シ豫審處分中ニ生シタル犯罰ニシテ事件甚々簡易明瞭且ツ慎重ノ手續ヲ要スルトキハ豫審處分ヲ延滞セシムルノ處アレハナリ

再度ノ呼出ニ應セサルトキノ制裁ハ費用賠償ノ外四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ言渡シ勾引狀ヲ發スヘシ第二項第四項ハ讀テ明文ノ如シ

○第百十九條 豫審判事ハ證人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其出頭セザリシコトヲ

正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聞キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

(註) 罰金言渡ノ決定ニ對シテハ抗告スルコトヲ許シタルニ拘ハラス尙ホ決定取消ノ方法ヲ

與ヘタリ(一)正當ノ事由アリテ出頭スルコト能ハサリシコトヲ有効ニ辯解スルコト(二)右辯解

ハ罰金言渡送達ノ日ヨリ三日内ニ申立ツルコト此二條件ヲ有スル時ハ該決定ヲ取消スコトヲ

得但判事ハ一應檢事ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス罰金言渡ニ於テ已ニ檢事ノ意見ヲ聞キタル上

ハ其取消モ同シク意見ヲ聞クヲ要スルハ至當ナリトス

○第百二十條 證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル

トキハ其人違ナキコトヲ疎明ス可シ

○第百二十一條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齢、職業、住所及ヒ第百二

十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フヘシ

(註) 第百廿條ハ別ニ説明ヲ要セスシテ明了ナリ

第百廿一條氏名、年齢、職業、住所ヲ訊問スルハ言ヲ俟タズ第百廿三條ニ該當スル身分ノモノナリヤ否ヤヲ問フハ全條ニ於テ解釋スヘキカ如ク證人タルコトヲ得ルヤ否ヤヲ定メ宣誓ヲ爲サシムヘキヤ否ヲ定ムルニ在リ然ルニ第百廿四條ニ記載スル者ナリヤ否ヤハ之ヲ訊問スルニ及バサルハ如何日シ全條第一號ハ年齢ヲ訊問スルヲ以テ知ラルヘク第二第三ハ別ニ訊問ヲ要セスシテ之ヲ知ルコトヲ得ヘク第四第五第六ハ之ヲ訊問スルヲ要セスシテ知ルヲ得ヘク且其人ヲシテ面目ヲ失ハシムルヲ以テ別ニ訊問スルコトヲ要セサルナリ

○第百二十二條 豫審判事ハ證人ヲシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セザル旨ヲ宣誓セシムヘシ

裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記スヘシ

(註) 本條ノ所謂證人ハ狹義ニシテ純粹ノ證人ノミヲ稱ス抑宣誓ナルモノタル歐洲諸國ニ於テ行ハル、モノニシテ彼國ニテ之ヲ神明ニ誓フモ本條ノ所謂宣誓ナルモノハ宗教上ノ觀念ヨリ出テタルニ非スシテ一ニ之ヲ自己ノ良心ニ誓フモノナリ從テ彼國ニテハ種々宗教上ノ儀式ヲ設クルモ我國ニテハ唯宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシムルノミ

○第百二十三條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サズ但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲ノ其共述ヲ聽クコトヲ得

第一 民事原告人

第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受ク者

第四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人

(註) 證人トナルノ能力ハ正則ニシテ此能力ナキモノハ變則トス本條及ヒ次條ハ其變則ヲ示シタルモノナリ故ニ制限的ニ解釋シ法律ノ明示セル場合ノ外ハ何人ト雖證人タル能力者ト斷言シテ差支ナシ其無能力タル理由ハ各號下ニ於テ述フヘシ

第一云々 犯罪ニ由テ損害ヲ受ケタルモノカ私訴ヲ提起シタル者チイフ而シテ其要價ノ訴ハ刑事裁判所ニ附帶シタルト特立民事ノ訴トハ區別スルコトナシ民事原告人ハ訴訟ノ原告タルヲ以テ原告人チシテ證人タルヲ許サハ被告人モ自ラ證人タルコトヲ許スノ違法ヲ來スヘキナリ故ニ之ヲ無能力者トセリ

第二云々 此親屬トハ刑法第百十四條及其次條ニ列記スル者チ云フ被告人又ハ民事原告人ノ親屬ハ勢ヒ情實ニ制セラレ正當ノ供述ヲ爲ス能サル可ヲ以テナリ親屬トハ血統カ連續スルモノチ云ヒ姻族トハ婚姻ニ由リテ夫婦ノ一方ヨリ他ノ一方ノ親屬ニ於ケル關係チ云ヒ且協議離婚又ハ婚姻無効ノ判決等ニ由リテ解除シタルトキモ無能力者トセリ

第三云々 後見人ト被後見人(未成年者等)ハ其關係親子ノ如キ私情アルニ由ル

第四 此等ノ人ノ雇人又ハ同居人故ニ雇主ハ證人タルヲ得ヘク又用支ハ如何ニ親密ナルモ證人タルノ能力ヲ有スヘキナリ

○第二百二十四條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

- 第一 十六歳未滿ノ幼者
- 第二 知覺精神ノ不十分ナル者
- 第三 瘡痍者
- 第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者
- 第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ルベキ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者
- 第六 現ニ供述ヲ爲スヘキ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證據十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

(註) 本條モ亦前條ト同シク證人トナルヲ得ス而シテ前條ト異ナルハ前條ハ記載ノ人或ル特定事件ニ於テノ無能力者タリト雖本條記載ノ人ハ如何ナル事件ト雖無能力者タリ(第六號ヲ除ク)即無能力ニ相對的ト絕對的ノ差異アリ

第一號乃至第三號ハ説明ヲ要セス第四號ニ就テ一言センコト人ハ必ラス證言スヘキノ義務アリト雖他ノ一方ヨリ見レハ又一ノ權利タリ故ニ重罪刑ニ處セラレタルモノ(終身公權剝奪)輕罪ノ刑ニ處セラレ刑期間公權ヲ停止セラレタルモノニハ此權利ヲ行フヲ許サス第六云々 免訴ノ言渡ハ豫審ニ於テ之ヲ受クルコトアリ又公判ニ於テ之ヲ受クルコトアリ茲ニ所謂免訴ハ豫審ニテ受ケタルモノヲ云ヒ公判ニ於ケル免訴ノ言渡ハ其理由ノ如何ヲ問ハス證人タルノ能力ヲ失フコトナシテ豫審ニ於ケル免訴ノ言渡ハ其場合種々アルモ唯證

憑不十分ノトキニ限り證人タル能力ヲ失フコトセリ其他時効確定判決大赦等ニ由ル免訴ハ此限ニ在ラス蓋シ豫審ニ於テ證憑不十分ノトキ免訴ヲ言渡スモ後日新證憑アルトキハ檢事ハ尙全一事件ニツキ起訴スルヲ得ヘク從テ其免訴ヲ受ケタルモノカ其全一事件ニツキ證言セシムルモ或ハ新證憑ノ發見ニ由リ再ヒ起訴セラレシテ恐レ虛偽ノ陳述ヲナスヘキヲ以テカクハ證人ヲラシムルコト得ストスル所以ナリ公判ノトキニハ證憑不十分ノ場合ニハ無罪ヲ言渡スヘク從テ本條ノ正面ニ中ラサルナリ

○第二百五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

- 第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上默秘スヘキ義務アル事情ニ關スルトキ
 - 第二 醫師、藥商、穩姿、辯護士、辯護人、公證人、神職、僧侶其身分職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ默秘スヘキモノニ關スルトキ
- 證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明スヘシ
- (註) 本條ハ證言ヲ拒ミ得ヘキ場合ヲ規定ス本條ヲ以テ證人トナル無能力ト漏同スヘカラズ夫レ證言ヲ拒ミ得ヘキモノハ證人トナル能力ナキモノニアラス故ニ若シ之ヲ拒マサリトキ其陳述虛偽ナルトキハ偽證ノ犯罪ヲ構成スヘクマダ宣誓スヘキハ勿論タリマダ事實參考人トシテ其供述ヲ聽クヘキニアラズ蓋シ本條ノ理由ハ第一號第二號列記ノ人ハ職務上默秘スヘキ特別ノ義務ヲ負フモノナリ故ニ其義務ニ反シテ證言ヲナスヘキ普通國民

ノ義務ニ從ハシムヘカラス

第一官吏公吏ハ現任ト罷職トヲ問ハス職務上黙秘スヘキ義務アル場合

第三醫師藥商穩婆 此等ノ者ヲシテ其職業上ノ秘密ヲ漏泄セシムルトキハ人々之ヲ畏レ

テ眞實ヲ告知セス從テ一般ニ人ノ生命身体ヲ害スルニ至ルヘシ故ニ證言ヲ拒マシムルニ

ハ却テ社會ノ安寧ヲ得ルモノナリ

辯護士辯護人公證人神職僧侶ノ如キモ亦證言ヲ拒マシムヘキナリ然レトモ證言ヲ拒ミ得

ヘキ事件ハ此等ノ人ハ(一)其身分若クハ職業ニ由リ他人ヨリ委託ヲ受ケタルニ由リ知り

タル事實(二)默秘スヘキ事實ノ條件ヲ要ス

若シ此等ノ人自カラ進ンデ其秘密ヲ漏告シタルトキハ反テ刑法上ノ制裁ヲ受クルモノナ

リ然ルニ一方ニ於テハ其秘密ヲ證言セシムルヲ命スルハ矛盾齟齬ノ誹ヲ免カレサルヘ

ク却テ社會ノ安寧ヲ害スルヲ證言ヲ拒ムヨリモ大ナルヘキナリ是レ本條ヲ以テ拒絕ノ

權能ヲ付與シタル所以ナリ而シテ此等ノ人カ其權能ヲ行使スルト否トハ其自由ニ在リ

○第二百二十六條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ

聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡スヘシ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗

告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑托シ

テ之ヲ爲スヘシ

(註) 本條ノ證人ハ事實參考人ヲ包含セズ所謂狹義ノモノナリ夫レ證言ヲ爲ス義務アルモ

ノ宣誓ヲ肯セス若クハ宣誓シタルモ供述ヲ肯セサルトキハ是公義務ニ背キタルモノナ

リ其制裁ハ刑法第百八十條ニ在リ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聞キ決定ヲ以テ罰金ヲ言渡ス

ヘシ別ニ公判手續ヲ用サス凡テ簡易ノ方法ヲ取りタリ其理由ハ第百十八條證人出頭ノ公

義務ヲ拒ムノ制裁ノ處參照スヘシ

證人ガ被告人ヲ陷害シ若クハ曲庇スル目的ヲ以テ不實ノ事ヲ供述シタルトキハ刑法僞證

罪ヲ構成スヘシ此場合ニハ豫審判事ハ其事實ヲ檢事ニ告發シ檢事ハ公訴ヲ提起スル等凡

テ普通ノ手續ニ由ルヘシ法律ノ明文ナキ以上ハ本條ヲ援引シテ變則ヲ適用スヘキニアラ

サルナリ

○第二百二十七條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問スヘシ但事實發見ノ爲メ必要ナ

リトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

(註) 本條以下ノ證人ハ凡テ廣義ノモノナリ而シテ其訊問ハ一證人毎ニ各別ニ訊問スルハ

豫審密行ノ主旨ニ基ツキ且證人ヲシテ愛憎疑懼等ノ念慮ヲ去リ直白ニ見聞ノ事實ヲ吐露

セシメンカ爲メナリ然レトモ對質ノ必要アルトキハ此限リニ在ラス(第九十八條參照)豫

○第二百二十八條 審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ

其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第百十八條ノ規定ニ從フ

(註) 証人ノ供述ヲ明確ナラシメンニハ假令ハ實地ノ模様ニツキ供述セサルトキハ明確ヲ欠クノ失アル場合ニハ犯所其他ノ場所假令被告人潜伏ノ場所贓物ヲ藏匿シタル場所等ニ同行セシムルヲ得ベシ若シ之ヲ肯ンセサルトキハ証人出頭ノ公務ヲ拒ムノ制裁ヲ適用スヘシ

○第二百二十九條 第百條第百一條ノ規定ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

○第二百三十條 皇族證人ナルトキハ豫審判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲スヘシ

各大臣ニ付テハ其官廳及所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問スヘシ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問スヘシ

(註) 皇族ハ身分ノ至高ナルヲ以テ必ラス其所在地ニ就キテ訊問シ奉ラサルヘカラス故ニ

第百十八條ノ場合ヲ生ゼス然レトモ第百二十六條ノ制裁ヲ受クルヲナシトセズ國務大臣ハ至重ノ職務ヲ執ル人ナルヲ以テ其官廳所在地ノ裁判所ニ於テ訊問セサルヘカラス(所在ニ非ス)然ラサレハ樞要ノ職務ヲ妨クルノ憂アルヲ以テナリ若シ以下云々ハ別ニ説明ヲ要セス帝國議會ノ議員即貴族院衆議院ノ議員ハ立法ノ大權ニ參與スル大權ヲ有スルカ故ニ亦國務大臣ト同シク議會所在地ノ裁判所ニ於テ訊問スヘシ但(一)開會期間(二)議會所在地ニ滞在中ニ於テ之ヲ訊問スルコトノ二條件ヲ要ス此一ヲ欠クトキハ普通證人ノ例ニ從フ

○第二百三十一條 豫審判事ハ証人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシムヘシ

証人ハ其供述ヲ變更増減セシムルコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載スヘシ

調書ニハ豫審判事、書記及ヒ証人共ニ署名捺印スヘシ若シ証人署名捺印スル事能ハサルトキハ其旨ヲ附記スヘシ

○第二百三十二條 豫審判人ハ証人裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事

ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ証人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

○第二百三十三條 第百十八條第百十九條及ヒ第百二十六條ニ掲ケタル証人ニ對スル豫審判事ノ

權ハ受託判事ニモ屬ス

○第二百三十四條 証人ハ出頭ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得

○第七節 鑑定

(註) 鑑定トハ被告事件ヲ精窮スルニ方リ特別ノ學識技術ニ由リテ其犯罪ノ性質方法及結果ヲ分明ナラシムルヲ云フ而シテ証人トノ差異ヲ擧ゲンコト証人ニ於テハ証人トナルモノ其陳述スル被告事件ニツキ親シク見聞シタル要スルモ鑑定人ハ之ヲ要セス只其過去ノ事

實ニ由リ其形跡外見ノ結果ニ由リ之ヲ探究スルヲ以テ職務トス故ニ証人ハ唯見聞シタル有ノ儘ヲ陳述スルニ止マレトモ鑑定人ハ自己ノ意見ヲ陳述スルキモノトス故ニ証人出頭セサルトキハ勾引狀ヲ發スヘキモ鑑定人ニハ之ヲ發スルヲ得ヌ何トナレバ學識技能ヲ有スルモノハ其人ニ止マラサルヲ以テ他人ニ命スルヲ得ルモ証人ハ其事件ニツキ親シク見聞シタルモノナルヲ以テ之ヲ他ニ求ムルヲ得サルヘケキハナリ

○第三百三十五條 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシムヘシ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死骸ノ解剖ヲ命シ又既ニ埋葬シタル死骸ヲ解剖シ若クハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

(註)犯罪ノ性質トハ同一ノ殺人犯ナルモ謀殺放殺毒殺毆打殺ナルヤチ區別シ犯罪ノ方法トハ殺人ノ手段ノ刀劍棍棒又ハ毒藥ナルヲ云ヒ犯罪ノ結果トハ刑罰ノ重輕ニ干系ヲ及ボスヲ以テ(未遂既遂又ハ毆打創傷ハ其結果ニ由テ刑ヲ異ニス)是亦分明ナラシム可ナリ此場合ニハ死体(假ニ埋葬シタルト否トヲ問ハス)又ハ檢視ノ爲メ墳墓ヲ發掘スルノ權ヲ與ヘタリ蓋シ此等ノ所爲ハ常人ニ在テハ刑法ノ罰スル處(刑二六四以下)ニ係ルカ故ニ特ニ之ヲ明言シタル所以ナリ

○第三百三十六條 鑑定ニ付テハ第三百十五條第三百十八條乃至第三百二十一條第三百二十三條乃至第三百

二十五條及ヒ第三百二十八條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

○第三百三十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定スヘキ宣誓ヲ爲スヘシ其宣誓ハ第三百二十二條ノ式ニ從フ

○第三百三十八條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯サルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡スヘシ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

○第三百三十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

○第三百四十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記スヘシ若シ結果ヲ得ザルトキハ其推測スル所ヲ記載スヘシ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ノ一個ノ鑑定書ニ記載スヘシ

○第三百四十一條 鑑定人ハ旅費、日當及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルヲ得
(註) 各條ニツキ註釋ヲ施サスシテ分明ナリ唯一言スヘキハ鑑定人ノ作りタル書類ハ其證據力判事ヲ拘束スヘカラサルヲ是レナリ鑑定人ハ判事耳目ノ及ハサルトコロヲ補フニ過キス故ニ判事ハ之ヲ採否スルノ全權ヲ有スルトイハサルヲ得サルナリ

第八節 現行犯ノ豫審

現行犯ノ何者タルコト及ヒ其捜査ニ關スル特別處分ハ己ニ之ヲ説述シタリ今ヤ其豫審ニ關スル特別處分ヲ論セントス

○第四百十二條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リシル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

(註) 豫審判事ハ檢事ノ請求アルニ非ルヨリハ豫審處分ニ着手スルヲ得ス之ヲ不告不理ノ原則トス此事ハ己ニ第六十七條ニ於テ見タル所ナリ然ルニ現行犯罪ノキニハ其處分ハ殊ニ急速ヲ要スルヲ以テ此原則ニ例外ヲ設ケサルヲ得ス而シテ此特別處分ヲ行フヲ得ルニハ先ツ豫審判事ガ檢事ノ起訴ナキ以前ニ現行犯アルコトヲ知リタルヲ要ス而シテ其犯罪ハ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪(輕罪ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル者ト區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノトアルハ己ニ見タル所ナリ)ナルヲ要ス其他ノ犯罪ハ豫審ヲナスヘキニアラス(現行犯罪現行犯ヲ問ハス)次ニハ其事件急速ナルコトヲ要ス此等條件ヲ備フレハ豫審判事ハ檢事ノ請求ヲ俟タズ一面ニハ豫審ヲナスヘキ旨ヲ檢事ニ通知シ一面ニハ豫審處分ニ着手スルコト得ヘキモノトス而シテ茲ニ一言スヘキハ現行犯ニシテ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ナレハ盡ク豫審處分ヲ爲スヘキモノト誤想スヘカラス重罪ハ必ラス豫審ヲ經由セサルヘカラスト雖輕罪ハ其煩雜ナルモノニ限りテ豫審處分ヲナスコトヲ忘ルヘ

カラス

○第四百十三條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢証調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キモノニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

(註) 豫審判事ハ檢事ノ起訴ナリト雖檢証調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス檢証ノ何者タルヤハ第二百二條以下ニ就テ見ルベシ故ニ此原則ノ結果トシテ豫審判事が現行犯罪ノ豫審處分ヲ行フニハ必ラス犯罪ノ場所其他事實發見ニ必要ナル場所ニ臨檢シ以テ檢証調書ヲ作ラサルヘカス(非現行犯ノ場合ニハ檢証處分ヲ爲スト否トハ判事一己ノ自由ニ在ルモノナリ)其調書ニハ重罪又ハ輕罪ノ現行タルコトヲ記載スヘキモノトス

豫審判事が右調書ヲ作リタルトキハ速ニ檢事ニ送致セサルヘカラス何ントナレバ此等ノ處分タル非常ノ例外タルカ故ニ速ニ其本則ニ復サシメンガ爲メナリ然レトモ檢事ノ起訴アリタルトキハ此書類送致ノ義務ナシ蓋シ此書類ヲ送致スルハ唯檢事ヲシテ公訴ヲ實行スルノ便ヲ與フルモノナレバナリ而シテ檢事ガ豫審判事ヨリ右調書ヲ受取りタルトキハ其公訴ノ實行ニツキ意見ヲ述ヘサルヘカラス若シ檢事判事事件輕易ニシテ豫審ヲ要セストシ又ハ被告事件罪トナラサル等ノ意見アリタルモ豫審判事ハ之ニ拘束セラレズ通常ノ規定ニ從ヒ豫審處分ヲ終結スルモノトス何トナレハ公訴ハ己ニ提起セラレタルヲ以テナリ

第四百四十四條 地方裁判所檢察事及ヒ區裁判所檢察事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

証人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

(註) 地方裁判所檢察事(區裁判所檢察事ニ同シ)尤豫審判事ニ先チ前條同一ノ場合ニ遭遇スルトキハ豫審判事ニ屬スル處分ヲナスコトヲ許シタリ而シテ此特別處分ヲナシタリトテ公訴ハ已ニ提起シタルモノト速了スヘカラス正格ニ論スレハ搜查處分ノ一種ニシテ唯其異ル所ハ檢証搜索物件差押等公力ヲ用ヰル處分ヲ爲スヲ得故ニ証人等出頭セサル時証人ニハ鑑定人ノ宣誓ヲ爲サシメサルヨ以テ百二十六條百卅八條ノ罰金ヲ言渡ス場合ナリ罰金及賠償ノ言渡ハ檢事之ヲ爲スコトヲ得ス是レヲ以テ見ルモ眞ノ豫審處分ニ非ルヲ知ルニ足ル殊ニ此特別處分ヲナシタレハトテ被告事件罪トナラス公訴交理スヘカラスモノト思料スルトキハ起訴ノ手續ヲ爲スヘカラス(第四百四十九條)トイフヲ以テモ此處分ハ起訴前ノ搜查處分ノ一種ナルコト愈分明ナルヘシ

第四百四十五條 前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢察事ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢察事ハ之ヲ地方裁判所檢察事ニ送致ス可シ
(註) 地方裁判所檢察事(又ハ區裁判所檢察事)ハ尙ホ引續キ取調ノ必要アリト思料スルトキハ

速ニ之ヲ豫審判事(又ハ地方裁判所檢察事)ニ送致シ本則ニ復セシム此トキニ於テ始メテ起訴アリタルモノトス故ニ被告事件罪トナラサルカ又ハ公訴受理スヘカラスト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ行フヘカラス從テ本條ヲ適用スヘキニアラス

第四百四十六條 區裁判所檢察事其裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ第四百四十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

(註) 本條ニ由テモ此特別處分ハ起訴前搜查處分ノ一種タルヲ知ルヘシ區裁判所事件ニハ豫審處分ナルモノナシ然ルニ其現行犯ノ場合ニハ通常ノ搜查處分ニ例外ヲ設ケタルナリ而シテ本條ハ區裁判所檢察事カ區裁判所事件ノ現行犯罪ヲ覺知シタルトキハ此變則ヲ適用スヘカラス地方裁判所檢察事カ區裁判所事件ノ現行犯罪ヲ覺知シタルトキハ此變則ヲ適用スヘカラス常人ノ資格ヲ以テ被告人ヲ逮捕シ告發ヲナスヘク(六十條)其他單ニ告發ヲナスヘキナリ區裁判所檢察事カ勾留狀ヲ發シタルトキ(通例ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノト思料スルトキニ發ス但被告逃亡ノ恐アルトキハ被告人ヲ訊問スルヲ要セス)ハ三日以内ニ起訴スヘク(被告事件罪トナラス又公訴受理スヘカラスト思料スルトキ此限ニ在ラス)三日以上ヲ過クルトキハ未決勾留長キニ過キ反テ本刑(區裁判所事件ハ本刑モ輕シ)ヨリ重キコトアラシキ恐ル、故ナリ

第四百四十七條 第四百四十四條第四百四十六條ニ於テ檢察事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ

之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致シ且被告人ヲ逮捕シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シ

(註) 法律ハ司法警察官ニモ現行犯罪ノ場合ニハ前述ノ權限ヲ與ヘタリ思フニ實際現行犯アルトキ事ヲ執ルモノハ檢事ニ在ラスシテ司法警察官多キニ居ルヘク故ニ本條ハ前數條ニ比シテ其適用多キコト知ルヘシ蓋シ司法警察官カ現行犯罪ヲ覺知シタルトキハ此等ノ權限ヲ與ヘスンハ空シク檢事ヲ待タサルヘカラス証憑消滅ノ恐アルヲ如何セシ故ニ假リニ之ヲ與フルコトス但勾留狀ハ其効力重大ナルヲ以テ之ヲ發スルコト許サス直チニ被告人ヲ管轄裁判所檢事(被告事件ニ由リテ區裁判所檢事モシクハ地方裁判所檢事)ニ送致シ且証憑書類ニモ意見書ヲ添ヘテ送致スヘキコトセリ且此豫審處分ハ假リノ効力ニ止マルヲ以テ豫審判事ガ後日之ヲ改正スルヲ妨ゲズ

○第四百十八條 地方裁判所檢事ハ區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ
若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セスシテ前項ノ手續ヲナス可シ

(註) 地方裁判所檢事ハ第四百四十四條ニ從テ區裁判所檢事ヨリ又第四百四十七條ニ從テ司法警察官ヨリ被告事件ノ送致ヲ受取リタルトキハ地方裁判所檢事カ自ラ豫審處分ヲ行ヒタルト同シク(第四百四十四條)豫審判事ニ送致スヘク但被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時間内ニ訊問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セスシテ全上ノ手續ヲ爲スヲ要ス

○第四百十九條 地方裁判所檢事ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ係リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラヌ直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコトヲ得

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラズ

(註) 重罪ハ必ラス豫審ヲ經ルヲ以テ之ヲ論スルヲ要セス輕罪ノ現行犯ハ豫審ヲ請求スルト否トハ一ニ檢事ノ意見ニ任スマタ拘留狀ヲ發シタルト否トヲ問ハサルナリ蓋本條第一項第二項ハ實ニ明文ヲ待タズシテ明カナル事ナリ唯現行犯罪ノ時ハ豫審處分ヲ行ヒタルヲ以テ必ラスヤ豫審手續ヲ續行スヘク必ラスヤ起訴スヘキノ觀アルヲ以テカクハ其疑ヲ避ケンガ爲メニ法律カ特ニ注意シタルマデノ事ナリ此第一第二項ニ由リテ檢事ノ此等處分ハ眞ノ豫審處分ニ非スシテ一个ノ搜查處分タルコト知ルニ足ルヘキナリ法文何レノ場合トハ地方裁判所檢事カ自カラ又ハ區裁判所判事若クハ司法警察官ヨリ送致ヲ受ケタル場合ヲ總稱ス

第九節 保釋

保釋トハ勾留ヲ解除スルヲ得ル方法ニシテ豫審處分中ニ限り効力ヲ有スルモノナリ

○第五十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應ジ出頭ス可キ証書ヲ差出シ且保證ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得
被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

(註) 保釋ハ(一)勾留狀ヲ受ケタル被告人ナルコト(二)右被告人ノ請求アリタルコト(三)檢事ノ意見ヲ聞クコト(四)何時ニテモ呼出ニ應ジ出頭スヘキ証書ヲ差出スコト(五)保證ヲ立ツルコトノ五條件ヲ具備スルコトキハ豫審判事之ヲ許スコトヲ得而レトモ豫審判事ハ事實發見上至當ト認ムルトキハ之ヲ許サ、ルヲ得ヘキヤ言テ俟タズ

○第五十一條 保證ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記載ス可シ

○第五十二條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若クハ有價証券ヲ差出スコト

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且十分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

○第五十三條 保釋人被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報告ヲ爲スコシ

○第五十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ保證金ノ全部又ハ一分ヲ沒收ス可シ

(註) 保釋中被告人呼出ニ應ゼサルトキハ保證金ノ全部又ハ一部ヲ沒收スヘシ其沒收額ハ一ニ豫審判事ノ認定ニ任ジタリ是レ保釋人ノ逃亡若クハ潜伏シテ故ラニ其呼出ニ應ゼサ

ルカモシクハ單ニ懈怠ニ由ルト其情狀ニ輕重アルヲ以テナリ然レトモ其呼出タルヤ被告人出頭トノ間少クトモ二十四時間ノ猶豫ハ必ラス之ヲ存セサルヘカラス然ラサレハ此制裁ヲ受クルコトナルベシ

○第五十五條 保證金ヲ沒收スルニハ檢事ノ意見ヲ聞キ豫審判事其言渡ヲ爲スコシ

(註) 保證金沒收ノ言渡ハ必ラス檢事ノ意見ヲ聞カサルヘカラス抑豫審處分中一切ノ行爲ハ豫審判事ノ全權ヲ以テ處置スヘキモノナリ然ルニ間々檢事ノ意見ヲ聞クヲ要スル箇條少カラズ第百十八條第百二十六條及本條等ノ如シ蓋シ裁判言渡ハ必ラス檢事ニ一應意見ヲ述ヘシムルコトスルハ事理ノ當然ナルベシ

○第五十六條 豫審判事保證金ヲ沒收シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消スコシ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消スヘシ

(註) 保釋ハ豫審中ニ之ヲ言渡シ豫審中ニ之ヲ取消スコトヲ得ルモノニシテ豫審中ニ之ヲ取消サル時ハ公判ノトキ之ヲ取消スコトヲ得サルコトナリ本條ハ其保釋ヲ取消サルヘカラスル場合ヲ示シタリ(一)前條ニ從ヒ豫審判事保證金ヲ沒收シタルトキ(但一部ヲ沒收シタルトキト雖)(二)保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要トスルトキ況ク事實ノ認定ヲ判事ニ與ヘタリ故ニ(一)ノ場合ニハ檢事ノ意見ヲ聽クヲ要セス法律上當然保釋ヲ取消スモ(二)ノ場合ニハ一應檢事ノ意見ヲ求メサルヘカス

○第五十七條 豫審判事保証金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒收シタル金額ヲ還付ス可シ

(註) 禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノニ非レハ之ヲ勾留スルヲ得ス故ニ罰金ノ輕罪違警罪ノ刑ニ該ルヘキモノヲ勾留シタルハ豫審判事ノ過失ナリ己ニ勾留スヘカラスンハ保釋ノ爲メ差出シタル保証金ヲ沒收シタル所爲ハ無効タリト云ハサルヘカラス假令被告人力第百五十四條ニ由リ出頭セサリシ過失アリタリトテ勾留スヘカラスルモノニ對シテ之ヲ勾留シタルノ過失ノ更ニ之ヨリ大ナルヲ忘ルヘカラス是レ一旦沒收シタル保証金ヲ還付セシムル所以ナリ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケタルトキニ至リテハ其理由タル更ニ喋々ヲ要セシテ明カナリ

○第五十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シ若シハ保釋ノ言渡ヲ取消シタルトキハ保証金ヲ還付ス可シ

(註) 本條ノ還付スル保証金ハ前條ト異ナリテ未ダ沒收セサル者ニ係ル(一)被告人免訴ノ言渡又ハ罰金ノ輕罪違警罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ取消シタルトキハ元來此等ノ犯罪人ニ向ツテハ元々勾留スヘカラスルモノナルヲ以テ保釋ノ保証金ハ之ヲ還付スヘキナリ(二)保釋ノ言渡ヲ取消シタル時トハ(一)ノ場合以外即重罪又ハ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ輕罪公判ニ付シタルトキニ想像スヘシ此場合ニ方リテハ已ニ被告人ヲ勾束スルヲ以テ保

証金ハ之ヲ還付スヘキハ勿論ナリトス

○第五十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

責付ヲ爲スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシムヘキ証書ヲ差出サシムヘシ

○第六十條 責付中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲スヘシ被告人正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ノ言渡ヲ取消スヘシ

(註) 本條以下ハ責付ノ事ヲ規定ス責付ニハ二個ノ條件ヲ必要トス
(一)檢事ノ意見ヲ聞ク(二)親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシムヘキ証書ヲ差出ストキハ保釋ニ比スルニ保釋ハ必ラス被告人ノ請求アルヲ要スルモ責付ハ請求ヲ要セス保釋ニハ金錢モシクハ有價証券ヲ保証ニ立ツルヲ要スルモ責付ニハ之ヲ要セス其手續保釋ヨリハ一層寬大ナリ蓋シ被告人ノ身分聲望ニ由リ逃走潛匿ノ危険ナキモノニハ責付ヲ命スルヲ得ルモ一般ニハ之ヲ許スヘカラス但禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノニシテ勾留狀ヲ受ケタル被告人タルトハ保釋ノ場合ト差異ナキヲ知ルベシ

○第十節 豫審終結

○第六十一條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記録ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ三日以内ニ之ヲ還付ス可シ

(註) 豫審判事ガ豫審ヲ終結スヘキ場合ヲ分チテ二トス

(一) 被告事件其管轄ニアラスト思料スルトキ此管轄ハ土地ノ區劃ニ關スル管轄ヲ云フモノニシテ犯罪ノ種類ニ關スル管轄ヲ云フニアラズ第百六十六條第百六十七條ニ從テ之ヲ處分スヘキナリ

(二) 他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキ 土地ノ管轄正當ナルトキハ充分ニ取調ヘ公判ニ付スルヤ否ヤヲ決定セサルヘカラス

此兩個ノ場合ニハ必ラス訴訟記録ヲ檢事ニ送致シ檢事ノ意見ヲ求メサルヘカラス豫審ノ着手ニハ必ラス檢事ノ請求アルヲ要スルト同ク其終結ニモ必ラス檢事ノ意見ヲ求メサルヘカラス是レ檢事ハ公訴實行ノ任ヲ帶フルモノナレバナリ

○第百六十二條 檢事ハ豫審十分ナラト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルトキハ檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

○第百六十三條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後數條ニ記載シタル決定ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

(註) 檢事ノ此請求ハ公訴實行ノ職務ヲ盡スニ在リ別ニ説明ヲ要セス(一六二)亦豫審判事ハ決シテ檢事ニ勾束セラル、コトナク自己ノ意見ヲ以テ自由ニ決定ヲ與フルコトヲ得之ヲ豫審

判事ノ不羈獨立トハ云フ也

○第百六十四條豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタルトキハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事

件ヲ檢事ニ交付ス可シ

(註) 豫審判事ノ決定ニ數種アリ

(甲) 管轄違ノ決定言渡 己ニ第百六十一條ニ於テ見ルカ如ク土地ノ區劃ニ關スル管轄違ノ場合ニハ直チニ豫審ヲ終結シ(他ヲ取調フルニ及ハス)其旨ヲ言渡スヘシ若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキト勾留狀ヲ要スル者ト思料セハ新ニ令狀ヲ發スルヲ得ヘク己ニ令狀ヲ發シタルトキハ之ヲ貯存シ以テ檢事ニ交付ス且被告人ノ逃亡等ヲ防クカ爲メ是便宜上管轄違ノ豫審判事ニモ此權限ヲ付與シタルナリ

○第百六十五條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第一 犯罪ノ証憑十分ナラサルトキ

第二 被告事件罪ト爲ラサルトキ

第三 公訴ノ時効ニ罹リタルトキ

第四 確定判決ヲ經タルトキ

第五 大赦アリタルトキ

第六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ

○第六十六條 被告事件違警罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ且被告人
勾留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

(註) (乙)免訴ノ決定言渡 (一)ハ犯罪ノ證據十分ナラサルニ止マラス全ク證據無場合ニモ
免訴ノ言渡ヲナス可ハ言テ俟タス(二)一般特別ノ不論罪律ニ正條ナキ所爲(第六條第四
號モ此中ニ在リ)等ヲ云(三)(四)(五)ハ第六條注釋ヲ參照スヘシ(六)一(二)ト混同スヘ
カラス第二ハ純粹無罪ナレトモ第六ハ犯罪ハ十相成立シタルモ唯其刑ヲ全免スルナリ
假令刑法ノ親屬相盜貨幣偽造ノ自首全免ノ如キ是ナリ

○第六十七條 被告事件裁判所構成法第十六條第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料シタル時
ハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ其他ノ輕罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ輕罪公判ニ付
スル言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ルモノト思料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲
ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得若シ被告
人未タ勾留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發スルコトヲ得

(註) (丙)區裁判所ニ事件移送ノ判決

(一)違警罪ナリト思料スル時 違警罪ハ區裁判所ノ管轄ニ屬スルヲ以テ移送ノ言渡ヲナ

スヘク亦被告人勾留狀ヲ受ケタルトキハ直チニ之ヲ放免スヘシ前ニモ述ヘタル如ク禁錮
以上ノ刑ニ該ル被告人ニ非ンハ其身体ヲ拘束スルヲ得ルナリ

(二)裁判所構成法第十六條第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料スルトキハ是モ亦區裁判
所事件ナルヲ以テ移送ノ言渡ヲ爲スヘシ但勾留狀ニツキテハ後ニ説クヘシ

(丁)輕罪公判ニ付スル決定言渡 (丙)第二以外ノ罪ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルヲ以テ
同輕罪公判ニ付スルノ言渡ヲ爲スヘキナリ而シテ輕罪タルトキハ區裁判所ニ移送(丙

第二)スルト輕罪公判ニ付スルトト問ハス若シ罰金以下ノ刑ニ該ルモノト思料スルトキ
ハ必ラス勾留ヲ釋放セサルヘカラス(己)ニ勾留狀受ケタル場合之ニ反シテ禁錮ノ刑ニ該
ルモノナレハ保釋責付ヲ許スヲ得(己)ニ勾留狀受ケタル場合又勾留狀ヲ發スルヲ得
ヘシ(未タ勾留狀受ケサル場合)此ハ命令法ニ非ルヲ以テ保釋責付ヲ爲サス又ハ勾留狀ヲ

發セサルモ豫審判事ノ自由ニ在リ

○第六十八條 被告事件重罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲
ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタルトキハ其言渡ヲ取消シ被告人未タ勾留ヲ受ケザ
ルトキハ令狀ヲ發ス可シ

(註) (戊)重罪公判ニ付スル決定言渡此場合ニハ輕罪公判ニ付スルトハ異ナリテ一旦許シ
タル保釋責付ハ必ラス之ヲ取消シ又ハ勾留狀ヲ發スヘキナリマタ勾留ヲ受ケサルトキ故
ニ己)ニ勾留ヲ受ケテ尙ホ未タ保釋責付ヲ受ケザリシトキハ其儘ニシテ差支ナシ

○第六十九條 豫審終結ノ決定ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ
 管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キトキハ其理由ヲ明示ス可シ
 免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由
 又ハ犯罪ノ証憑十分ナラサルトキハ其旨ヲ明示ス可シ
 區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質摸樣証憑ノ十分ナルコト
 及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

(註) 豫審終結ノ決定書ニ記載スヘキ方式ヲ規定ス

(第一)事實即管轄違ヲ言渡ストキハ其管轄違タル理由免訴ノ言渡ヲナスキニハ其免訴ノ
 理由公判ニ付スル言渡ノ場合ニハ犯罪ノ性質摸樣及証憑ノ十分ナルコトヲ明示スルヲ要ス
 管轄違ノ理由トハ被告事件ハ他裁判所管轄内ニ起リタルカ如キヲ云フ免訴ノ理由トハ一
 被告事件罪トナラサルコト(二)公訴受理スヘカラサル第六十五條第三乃至第六(三)犯
 罪ノ証憑十分ナラサルコト等ヲ云フ(一)(二)ハ各其理由ヲ示サ、ルヘカラス(一)律ニ正條
 ナキハ一般不論特別不論罪等是其理由ナリ(二)ハ第六十五條第三乃至第六是其理由ナ
 リ唯犯罪ノ証憑十分ナラサルトキハ別ニ其理由ナキヲ以テ只其旨ヲ明言スルノミ
 公判ニ付スル言渡(區裁判ニ移ス言渡モ)ニハ犯罪ノ性質摸樣強盜持兇器竊盜犯罪ノ摸樣
 (犯罪ノ方法手段及法律上ノ加重減輕ノ情狀ヲ記載ス
 (第二)法律即チ適用スヘキ刑法及ヒ本法ノ各正條ヲ云フ即決定ノ基礎トナルモノナリ假

令被告事件ハ已ニ確定判決ヲ受ケタルヲ以テ公訴受理スヘカラス(事實)故ニ刑事訴訟法
 第六十五條(法律)ニ從ヒテ放免ス(決定)

○第七十條 前條ノ決定ニハ第七十六條ノ規定ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

○第七十一條 豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢事及ヒ被告人ニ送達ス可シ

(註) 豫審決定書ハ更ニ第七十六條ノ規定ニ從フヘシテ其決定ノ正本ハ速ニ檢事及被
 告人ニ送達スルヲ要ス檢事被告人ハ利害關係人ナルヲ以テナリ其送達ノ効果ハ次條以下
 ニ就テ見ルヘシ

○第七十二條 檢事ハ重罪公判ニ付スル決定又ハ免訴若クハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲ス
 コトヲ得

被告人ハ重罪公判ニ付スル決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

(註) 豫審終結ノ決定ニ對シ特定ノ場合ニ於テ檢事及被告人ヲ抗告ヲ爲スコトヲ許シタリ
 已ニ述ヘタルカ如ク決定ニハ(一)管轄違言渡(二)免訴ノ言渡(三)區裁判ニ移送スル言渡
 (四)輕罪公判ニ付スル言渡(五)同重罪公判ニ付スル言渡ト也而シテ先ツ被告人ガ抗告ヲ爲シ
 得ル場合ヨリ論セン唯重罪公判ニ付スル決定ニ對シ抗告ヲ爲シ得可ノミ免訴ノ言渡ニハ
 被告人ハ抗告スルノ利益ナク所謂「利益ナクシテ」トノ原則ヲ適用シ抗告ヲ許サ
 ス唯(一)(三)(四)ニハ抗告ノ方法ヲ與フヘキカ如シト雖元來豫審ノ決定ハ確定スルモノ
 ニアラス公判ノトキ十分辨護ノ權利ヲ伸張スルヲ得ヘキヲ以テ決定ニ對シテハ抗告ヲ許

サ、ルヲ本則トス唯重罪ノ決定ニハ特別ニ之ヲ與ヘタルモノト解釋スヘキナリ
 檢事ノ被告人ト異ナル所ハ其抗告タル重罪公判ニ付スル決定ノミナラス免訴若クハ管轄
 違ノ決定ニ對シテ尙ホ抗告スルヲ許セリ免訴ノ言渡ニツキ抗告スルハ刑事原告人ノ資格
 ナリテスルヲ以テ勿論ノ事タリ重罪公判ニ付スル言渡ニ對シテモ之ヲ許スハ公益ノ保護
 者タル資格ヲ以テ又裁判所管轄ハ公益ニ干スルコト至大ナルヲ以テ之レヲ許シタルナ
 リ
 檢事被告人共ニ抗告ヲ爲スヲ得サルハ區裁判所移送ノ決定及輕罪公判ニ付スル決定是ナ
 リ

○第七十三條 重罪公判ニ付スル場合ニ於テ被告人ニ送達ス可キ決定ニハ其決定ニ對シ抗告
 ナ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ其記載ナキトキハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ決定
 ノ送附ヲ爲スヘシ

(註) 前條ノ抗告ハ一ノ不服ヲ申立ツル方法ニシテ其期間ハ決定言渡書ノ送達ヨリ三日ト
 ス三日ヲ經過スルトキハ抗告ヲ爲ス權利ヲ失フ而シテ其決定書ヲ被告人ニ送達スルコトハ
 必ラス其正本ニ一抗告ヲ爲シ得ヘキコト其二被告ノ期間ヲ記載セサルヘカラス是レ被告人
 ニ注意ヲ與ヘ以テ抗告ノ期間ヲ失ハシメサラシメンガ爲メニスル保護ノ方法タリ若シ此
 記載ヲ缺ク時ハ抗告期間ノ進行ヲ停止ス故ニ更ニ有効ノ規定ニ從ヒ其方式ヲ具備シタル
 決定書ノ正本ヲ送達スルニアラサレハ抗告期間ノ經過ヲ始ムルコトナシ而シテ本條ハナト

ヒ明文ナキモ重罪公判ニ付スル決定言渡ニツキテ云フノミ蓋其他ノ決定ニハ法律上抗告
 スルヲ得サルヲ以テ此記載ヲ爲スヘキ理由ナキヲ以テナリ(前條參考)

○第七十四條 豫審終結ノ決定ハ抗告ノ期間内又抗告アリタルトキハ其決定アルマテ執行ヲ
 停止ス但保釋責付ノ言渡ヲ取消ス決定ハ其執行ヲ停止セズ

(註) 豫審終結ノ決定ノ執行ハ言渡後直チニ執行スヘキニアラス抗告期間内ハ必ラス其執
 行ヲ停止スヘキモノトス其期間内ニ抗告アリタルトキハ其抗告ニツキテノ決定アルマテ
 ハ縱令抗告期間後ニ至ルモ其迄停止セサルヘカラス然レトモ保釋責付ノ言渡ヲ取消ス決
 定(第六十八條)ハ被告人ノ逃亡又ハ証憑ノ証滅ヲ防クノ必要アルヲ以テ之レヲ停止セ
 サル者トナリタリ本條ハ檢事被告人ノ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テ適用スヘキモ此等ノ
 人ガ抗告ヲ爲シ得サル場合ニハ本條ハ適用スヘキニアラス即チ直ニ豫審終結ノ決定ヲ執
 行スヘキモノトス

○第七十五條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其決定確定シタルトキハ罪名ノ變更アル
 モ同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴ヲ受ルコトナカル可シ但新ニ証憑アルトキハ此限ニ在ラス
 新ナル証憑アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所ニ差出シ裁判所ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ
 否ヤテ決定ス可シ
 (註) 本條ハ豫審免訴ノ言渡ハ如何ナル効力ヲ有スルヤヲ規定ス豫審終結ノ決定中免訴ノ
 言渡ヲ除クノ外ハ必ラス公判ニ付セラレモ(其判決ノ効力ハ以下該當ノ處ニ於テ述ブヘ

シ) 免訴ノ言渡ハ公判ニ付セシテ已ムガ故ニ其決定効力ヲ規定セサルヘカラス
 免訴ノ言渡確定シタルトキ免訴ノ言渡ハ檢事ノミ抗告ヲ爲スヲ得サル檢事ガ無爲ニ抗告
 期間ヲ經過セシメタルカ其期間内抗告ヲ爲シタルモ棄却セラレタルカ此二ツノ一ニ由リ
 テ確定ス) 被告人ハ全一ノ事件ニツキテ再ヒ訴ヲ受クルコトナキ効力ヲ受ク縦令罪名ノ
 變更アルモノ彙キニハ檢事カ故殺ヲ以テ記訴シ豫審ニ於テ免訴ノ言渡アリテ確定シタル
 時後更ニ謀殺ヲ以テシテモ起訴スルヲ得ス依然同一ノ事件タルヲ以テナリ之レチ一事不
 再理ノ原則トス然レトモ豫審決定ニハ絶對的ニ此原則テ適用スヘカラス蓋豫審ノ決定ハ
 唯被告事件ノ果シテ公判ニ付スルニモ足ヘキ証憑ノ有無ヲ決定スルモノニ止マルカ故ニ
 後日新ナル証憑ヲ發見シタルトキハ尙起訴ノ權利ヲ檢事ニ與ヘサルヘカラス而シテ法律
 ノ所謂新ナル証憑トハ被告事件ヲ決定スル資料ト爲サルモノナシ
 夫レ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ハ舉ゲテ第六十五條第一乃至第六ノ理由アリ就中本條
 ヲ適用スヘキ場合ハ犯罪ノ証憑十分ナラサルトキニ言渡ス免訴ナルヘク第二乃至第六ハ
 縱令新証憑アリタリトテ特殊ノ理由ニ由リテ免訴ヲ言渡スモノナレハ新ニ起訴スルヲ得
 得サルヘシ即チ証憑ノ有無ヲ問ハサルモノナレハナリ
 此豫審決定ノ効力公判判決ノ効力ニ比シテ大差アルヲ見ル判決ハ直ニ本案ニ入り被告人
 罪ノ有無ヲ審判スルヲ以テ一旦免訴又ハ無罪ノ判決アリテ確定シタル時ハ如何ニ著明ナ
 ル新証憑殊ニ犯人ノ自白アリタリ逆檢事ハ更ニ起訴スルヲ許サス是確定判決ヲ以テ公

訴消滅ノ理由トナシタル所以ナリ(第六條三號)其理由ハ已ニ説明シタル所ナリ讀者第六
 條第三號ノ説明ヲ參照セヨ

本條新証憑アリタルニ由リ檢事ハ新ニ起訴スルヲ得ルトスルモ輕卒ニ之ヲ許スヘキニ
 アラス必ラス裁判所ノ決定ヲ仰ガサルヘカラス是一事不再理ノ例外タルヲ以テ慎重ノ手
 續ヲ要スルヲトシタルナリ

○第四編 公判

○第一章 通則

(註) 公判トハ事實ヲ審明シ法律ヲ適用スル終局ノ處分ヲ云フモノニシテ罪ノ有無輕重ヲ
 裁斷スルモノ之ヲ判決ト稱ス而シテ公判ハ起訴ノ後(豫審ヲ經由スルト否トアリ)裁判所
 ニ於テ之ヲ公行スヘキモノナリ(内亂外患ニ關スル罪又ハ猥褻ノ罪ノ如キ安寧秩序又ハ
 風俗ヲ害スル恐レアルトキハ審判ヲ公開セス)然レモ公判手續ノ結果タル判決宣告ハ必
 ラス之ヲ公行セサルヘカラス而シテ本章ハ公判ノ通則ニシテ區裁判所公判地方裁判所公
 判ヲ問ハス控訴又大審院ノ特別權限ヲ屬スル訴訟ニモ亦之ヲ適用ス換言スレハ公判トイ
 へハ必ラス此通則ニ從ハサルヘカラサルナリ

○第七十六條

公判ハ判事、檢事、裁判所書記出廷シテ之ヲ爲スモノトス
 (註) 公判ノ開廷ニ關シヘカラサル要素ハ(一)判事 判事ハ司法權ヲ行フ一法人(裁判所)
 ノ原子タルモノニシテ其任期ハ終身ニシテ刑法ノ宣告又ハ懲戒處分法ニ由ルニ非サレハ其

意ニ反シテ罷免セラル、トナリ其詳細ハ裁判所構成法ニ就テ見ヨ(二)檢事 檢事ハ公訴ノ原告者ニシテ又公益保護ノ職掌ヲ擔フル修身官ナリ 檢事ノ出廷ヲ以テ公判開廷ニ必要ナル條件トシタルハ如何檢事ハ公訴ノ原告ニシテ被告人ト相對シテ訴訟ヲ爲スモノナリ民事ノ訴ニ於テハ原告若クハ被告ノ一方ガ出廷セサルトキハ他ノ一方ノ申立ニ由リ欠席判決ヲ爲スヲ得然ルニ公訴ノ原告タル檢事ノ出廷ナキトキハ公判ヲ開廷スルヲ得ストスルハ檢事ハ他ノ一面ニ於テハ公益保護ノ任ヲ擔フルヲ以テ檢事ノ出廷ヲ以テ公判開廷ノ要素トシタルナリ被告ノ出頭ナキトキ闕席ノマ、判決ヲ下シ敢テ其出廷ヲ必要トセサルハ刑事民事ヲ問ハサルナリ(三)裁判所書記事檢事其他ノ人ノ口供ヲ錄取朗讀スルノ職務ヲ帶ヒ是亦公判ニハ必要ノ要素トス故ニ此要素ノ一ヲ欠クトキハ公判手續ハ無効トナリ何ノ効果ヲモ生セズ即時効中斷ノ効力ヲ與ヘサルカ如キ是ナリ

○第七十七條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ(註) 被告人ノ身體自由ノ權利ヲ規定ス夫レ被告人ハ未タ有罪ノ判決ヲ受ケサル間ハ法律上有罪トノ權測ヲ下スヲ得ス故ニ妄ニ身體ヲ拘束スヘカラス(禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノト思料スルニ非レハ勾留狀ヲ發スルヲ得ス)而シテ公判ニハ如何ナル重大ナル罪惡ヲ犯シタルモノト雖勾束セラレズ蓋シ身體ノ拘束ハ從テ精神ノ不自由ヲ惹起ス自由ヲサル精神ヨリ出タル供述ハ被告人ニ利ナルト不利ナルトヲ問ハス實情ヨリ出テサルヲ以テ信憑スルニ足ラス是ヲ以テ身體自由ノ權利ヲ與ヘ以テ昔時拷問ノ弊習ヲ一洗シタル

ナリ然レトモ被告人ニシテ狂暴冥頑ナルカ逃脫ヲ圖ル等ノ虞アルトキハ守卒ヲ置クコトヲ許シタリ是レ有罪ノ人ガ繩縛ヲ逃レ以テ刑ノ執行權ヲシテ薄弱ナラシムルヲ防ツニ出テタルナリ

○第七十八條 裁判所ニ於テハ何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾引狀又ハ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

(註) 裁判所ハ何レノ場合ヲ問ハス勾引狀若クハ勾留狀ヲ發スルヲ得ルトイフニアラス檢事ヨリ請求ヲ受ケ一應呼出狀ヲ受ケタルモ(一一三)之ニ應セサルトキ本條ニ從ヒ勾引狀又ハ勾留狀ヲ發スルヲ得ヘキナリ而シテ罰金ノ刑ニ該ル輕罪及違警罪ニハ縱令呼出ニ應セサルモ勾引狀勾留狀ヲ發スルヲ得ス欠席判決ヲ爲スヲ得ヘキノミ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ云々ノ反對理由ヲ以テ知ルヘキナリ(豫審ニハ罰金ノ刑ニ該ルヘキモノト雖勾引狀ハ之ヲ發スルヲ許シタリサレドモ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノト雖勾引狀ハ之ヲ發スルヲ許シタリサレドモ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノト非レハ勾留狀ヲ發スルヲ得サルハ豫審公判共ニ同一ナリ)

○第七十九條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用ユルコトヲ得 辯護人裁判所所屬ヲ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ但シ裁判所ノ允許ヲ得ルトキハ辯護士トナラサル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得 (註) 豫審ニハ口頭辯論ヲ用ヒス公判ニハ必ラス辯論ヲ開クヲ以テ甲ニハ辯護人ヲ用フル

ヲ得サルモ乙ニハ之ヲ用フルヲ得被告人ハ辯護權ヲ有スルヲ以テ其權利行使ノ爲メ特ニ辯護人ヲ用フルヲ得セシム一方ニハ公訴ノ原告ヲ設ケ法律ヲ精通スル檢事ヲ以テ之ニ充ツ之ガ對手人タルモノハ盡ク法律ヲ知ルモノニ非ス故ニ辯解疎明シテ自己ヲ防護スルカ爲メニハ辯護人ナルモノヲ設ケサルヘカラス而レトモ辯護權ハ被告人ニ於テ之ヲ拋棄スルヲ得(一八二)但重罪ニ於テハ之ヲ拋棄スルヲ許サス(二三七)是ヲハ被告人ニ辯護人ヲ付スルハ官ニ被告人權利ノミナラス又社會ノ權利タルトイフナリ辯護人トナルヲ得ヘキモノハ裁判所所屬ノ辯護士ヲ本則トス但例外トシテ裁判所所屬ニ非サル辯護士又ハ辯護士ニ非サル者(親戚故舊雇人ノ如キト雖裁判所ノ許可ヲ得タルトキニ限り辯護人トナルヲ得ヘキナリ

○第百八十條

辯護人ハ裁判所ニ於テ訴訟記録ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

(註) 辯護人ハ被告人ノ適法ナル利益ノ代表者ナルヲ以テ訴訟記録ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ得是レ辯護ノ方法ヲ盡サシメンガ爲メナリ且辯護人ハ被告人ノ不利益ニ於テハ代表スルノ權利且義務ナキヲ以テ苟クモ被告ノ不利益タル事實ナランカ之ヲ供述スヘキ義務ナシ又辯護人ハ自由ニ被告人ト面接通信スルヲ得且辯護上必要ナル通知ヲ受ク又公廷ニ於テ判事檢事又ハ証人民事原告人等ニ對シテ必要ナル質義ヲ爲スヲ得之ヲ要スルニ被告人ノ爲スヲ得ヘキ訴訟行爲ノ一切ハ辯護人ニ於テ盡ク之ヲ行フヲ得ルト斷言シテ可ナルヘシ

○第百八十一條

被告人ノ法律上代理人ハ其補佐人ト爲リ辯論ニ與カルコトヲ得

(註) 法律上代理人ノ何者タルヤハ已ニ説明セリ蓋シ法律上代理人ハ無能力者ヲ保護スルノ義務ヲ有シ民事上無能力者一切ノ所爲ニツキ其責ニ任ス故ニ無能力者ノ犯罪ニシテ一面ニ於テ私訴ヲ生シタリトセン民事擔當人資格ヲ以テ損害賠償ノ責ヲ受クルコトアリ夫然リ無能力被告人タルトキハ其公訴ニツキテ判決ハ民事上ニ至大ノ影響ヲ及ホスヘケレハ法律上代理人ハ自己ノ利益ニ於テモ被告人ヲ補佐シテ其辯論ニ與カルヲ許サ、ルヘカラス況ンヤ被告人ノ利益ヲ保護スルカ任アル者ナルヲヤ

○第百八十二條

被告人出頭シテ辯論スルコトヲ肯セサルトキハ對席トシテ裁判ヲ爲ス可シ

被告人審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判長ヨリ退廷又ハ勾留ヲ命セラレタルトキ亦同シ若シ辯論二日ニ渡ルトキハ更ニ被告人ヲ出頭セシム可シ

(註) 法律ハ被告人ニ辯護ノ權ヲ與ヘタルニ由リ被告人出頭ノ上自由ニ辯論ヲナスヲ得ヘシ然ルニモシ被告人ガ辯論スルヲ肯ンセサルハ是レ法律カ當然與ヘタル辯護權ヲ拋棄シタルモノトイフヘシ且對席審問ノ事實ヲ知了セサルニ非ス故ニ其受ケタル判決ハ純粹ノ對席ニシテ彼ノ闕席判決ノ如ク故障ヲ申立ツルヲ許サス

(第百二十六條闕席判決ト對照セヨ) マタ裁判長ハ公廷内取締ノ權利ヲ有シ審問ノ秩序ヲ維持スル義務アルカ故ニ被告人ニ於テ審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シタルトキハ裁判長ハ退廷ヲ命シ又ハ勾留ヲ命スルヲ得ヘシ(是レ刑罰ニアラス一ノ取締處分ナリ)從

テ被告人ハ辯護權ヲ行使スルヲ得サルモ是レ自己ノ過失トイフヘク判事ハ對席トシテ判決スルヲ得ヘシ但其日ニ於テ審問終了セズ次日ニ及フトキハ退廷又ハ勾留ヲ受ケタル被告ハト雖必ラス出頭ヲ命セサルヘカラス是レ被告人カ悔悟改悛スルコトアルカ爲メナリ次ニ注意スヘキアリ被告人辯論ヲ肯シセス又ハ勾留退廷ヲ命セラル、モ其辯護人ハ獨立シテ辯論ヲ爲シ得ヘキハ勿論也

○第百八十三條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト能ハサルトキハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此限ニ在ラス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルトキハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ルトキハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ
若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲ス可シ

(註) 本條モ亦被告人ガ辯護權ヲ有スル理由ヲ以テ説明スルヲ得ヘシ

(甲) 辯論前ノ發病 被告人カ辯論前精神錯亂ト其他ノ疾病トヲ問ハス發病タルトキハ其痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス是レ被告人ノ辯護權ヲ尊重スルニ出ツ(乙) 辯論中ノ發病辯論中被告人精神錯亂シタルトキハ其痊癒マテ辯論ヲ停止スルハ勿論痊癒ノ後新ニ辯論

ヲ爲スヘク以前經過シタル辯論ハ全ク無効ニ屬ス(2) 辯論中被告人其他ノ疾病ニ罹リタルトキ痊癒マテ停止シ痊癒ノ時ヨリ經過シタル辯論以後ノ手續ヲ繼續ス但其停止カ五日間以上ニ涉リ檢事其他訴訟干系人ガ新ニ辯論ヲ爲スヘキコトヲ請求シタルトキハ(2)ノ場合ト同シ是レ事件ノ遺忘ニ由リテ無効ニ屬スルニ由ル(丙) 辯論終結(事實及法律ノ辯論) 後發病 最早被告人辯護權ニハ關係ナシ故ニ其痊癒ノ後裁判言渡ヲスヘキノミ

○第百八十四條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケザル事件ニ付キ裁判ヲ爲スコカラス但辯論ニ由リ發見シタル附帶ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスルトキハ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

(註) 本條ハ「告ゲサレハ理セズ」ノ原則ニ外ナラス是レ裁判所ノ權限ヲ明カニスル條文ナリ故ニ檢事カ竊盜事件ニ就テ起訴シタルトモ裁判所ニ於テ同一ノ被告人ガ他ニ之ヨリ重大ナル犯罪假令謀殺罪ヲ犯セシコト發見スルモ其謀殺事件ハ之ヲ審理スルノ權限ナシ是レ檢事ノ訴ノ提起ナキヲ以テナリ但檢事其謀殺事件ヲ告發シ以テ起訴セシムルハ格別也而シテ是レ一例外ヲ設ク曰ク(一) 他ノ附帶犯罪ニシテ(二) 辯論中ニ發見シタルモノ是ナリ畢竟事實ノ發見審理ヲ便宜ナラシムルノ方便ニ出ツマタ附帶犯ト雖モ訴ヲ受タル事件ニ付キ辯論終結ノ後發見シタルハ必ラス更ニ檢事ノ起訴ナクシテ之ヲ審理スルヲ許サス而シテ辯論終結ノ事件ニ付キ判決ヲ宣告スヘキノミ其附帶犯罪ノ何物タルヤハ次條ニ至リテ説明スヘシ

○第百八十五條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

- 第一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタルトキ
- 第二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタルトキ
- 第三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カラル爲メ他ノ罪ヲ犯シタルトキ

(註) 本條ハ附帶犯ノ何物タルヤヲ規定ス附帶犯ニ附シテ本案ノ犯罪ナル名稱ヲ設クルヲ便利ナリトス(即チ訴ヲ受ケタル事件)故ニ附帶犯トイヘハ必ラス本案ノ犯罪ヲ想像スルヲ以テ數罪アリトス

(一)各犯罪ノ場所時日同一ナルトキ(但犯人ノ一人ナルト二人以上トテ問ハス)例之強盜ニテ強姦スルカ如キ(一人數罪)又甲乙ノ鬪毆ニ乘シテ甲乙ノ財物ヲ拐帶スルカ如キ(數人數罪)是ナリ此場合ニ於テ強盜事件ニツキ起訴アリタルトキハ強姦ニツキ起訴セザリシモ辯論中ニ之ヲ發見セタル檢事ノ起訴ヲ待タズ直チニ附帶犯セシメテ審理シ得ルコトナリ

(二)各犯罪ノ時日及場所各異ナリタルモ數人ノ間通謀アリタルトキハ尙ホ之ヲ附帶犯トスルヲ得 此場合ニハ唯通謀アリタルヲ要ス

(三)(甲)自己ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ他ノ一罪ヲ犯シタルトキ(乙)自己ノ已ニ犯シタル罪ヲ免レンガ爲メ他ノ罪ヲ犯シタル場合(一人數罪)(丙)他人ノ犯罪ヲ容易ニセシメ

ンカ爲メ己レ他ノ罪ヲ犯シタルトキ(丁)他人ガ已ニ犯シタル罪ヲ免レシメンガ爲メ己レ他ノ罪ヲ犯シタルトキ(數人數罪)此四个ノ場合ニハ各犯罪ノ犯情相率連スルヲ以テ附帶犯トス但(丙)(丁)ハ數人ノ間通謀アリタルトキハ(二)ノ場合ニ由リ附帶犯タルヲ得ルコト勿論ナルヲ以テ茲ニハ通謀ナキ場合ヲ想像スヘキナリ又此四个ノ場合カ時日場所同一ナルトキハ(一)ノ場合ニテ已ニ附帶犯タルヘク故ニ時日場所ノ同一ナラサル場合ヲ想像スヘキナリ

此等附帶犯ノトキニハ不先不理ノ原則ニ例外ヲ設ケ以テ事實審理ヲ便利ナラシムルコトノミタルナリ

○第百八十六條 檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審ヲ問ハス本案ノ判決アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル申立ヲナスコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理スヘカラサル言渡ヲ爲スコトヲ得

(註) 一管轄違ノ申立 管轄ニハ犯罪ノ種類ニ于スル者ト土地ノ區別ニ關スルモノトアリ 裁判所ハ管轄外ノ事件ヲ裁判スルノ權限ナシ故ニ此權限ニ負キタルトキハ其判決ハ無効ナリ故ニ本案ノ判決アルマテ何時ヲリモ此申立ヲ許シ以テ被告人カ正當ノ管轄裁判所ノ裁判ヲ受クルノ權利ヲ伸ヘシムヘク又檢事ハ公益保護ノ職掌アルヲ以テ此申立ヲ爲スコトヲ得ヘシ(檢事ノ申立ツテ得ヘキ此理由ハ次ノ場合ニモ通用ス)

第二公訴受理スヘカラサル申立 本法第六條ニハ公訴消滅ノ原由ニツキ六个ノ場合ヲ明

示マタリ此場合ノ一アルトキハ檢事被告人ハ第一ノ場合ト同シク本案ノ判決アルマテ何時タリトモ申立ツルヲ得サルヘカス

法律ハ本案ノ判決アルマテト掲ケタルハ一見解スヘカラサルカ如シ雖此二个ノ申立ハ元來本案(即罪ノ成立不成立)ニハ干系ナシ之ヲ妨訴抗弁トイフ民事ニテハ通常妨訴抗弁ハ本案ノ辯論前ニ於テセサレハ之ヲ爲スノ權利ヲ失フコト、ナリタリ然レトモ刑事ハ公益ニ干スルモノナルカ故ニ本案ノ辯論前此妨訴抗弁ヲ提出シ得ルハ勿論本案ノ辯論中ト雖未ダ判決ヲ受ケサル間ハ之ヲ提出スルヲ許シタルナリ然ラハ本案ノ判決アリタルトキハ之ヲ如何ニスルヤ曰ク此申立ヲ爲スヘカラサルヤ勿論ナリ但第二百五十條以下及第二百六十七條以下ニ依リ上訴スルノ方法ヲ設ケタリ

○第百八十七條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下シタルトキハ本案ノ判決ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

(註) 檢事被告人前條二箇ノ申立ヲ爲シタルトキハ裁判所ハ判決ヲ以テ之ヲ裁斷セサル可ク言渡ヲ爲スヘク(二二二、二二四末文)即是ニテ結局判決トナルヘシ然ルニ其申立ヲ却下シ即管轄違ニ非ス正當ノ管轄權ヲ有セリ若クハ公訴未ダ消滅セズ故ニ受理スルノ權利アリト言渡シタルトキハ尙本案ニツキ審理セサルヘカラス故ニ此言渡ノ性質タル中間判決トイフヘキナリ而シテ申立人不服ナルトキハ直ニ此中間判決ニ對シ控訴上告ヲ許シ其

間本案ノ辯論ヲ停止セサルヘカラス從テ本案ノ判決ヲモ下スコトヲ得ヘカス(此中間判決區裁判所ト假定ス)ニ對シ控訴アリテ控訴裁判所カ地方裁判所前判決ヲ改正シ即管轄違ナリ若クハ公訴消滅セリトノ言渡確定シタル時ハ本案區裁判所ニ屬スルハ從テ消滅スヘク之ニ反シ前判決ヲ至當トスルトキハ本案區裁判所ニ屬スルニツキ更ニ辯論ヲ繼續シ判決ヲ下スコト、ナルナリ

○第百八十八條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

(註) 司法警察官ハ搜查豫審ノ場合ニ於テ調書ヲ作ル場合アリ即假リニ豫審處分ヲ行ヒタルトキ(一四七現行犯)ノ如シ蓋司法警察官ハ假リニ豫審處分ヲ行ヒタルカ如キ其調書ハ或ハ明瞭ヲ欠キ或ハ不確實タルヲ免カレサルヘク是レ証人トシテ之ヲ呼出シ其時ノ摸樣ヲ供述セシムルヲナシタルナリ此反對理由ヲ以テ豫審判事ハ決シテ証人トシテ呼出サル、コトナシ豫審判事ノ作りタル調書ハ明瞭確實ナリト推測スヘク縱令然ラサルモ之ヲ呼出ストキニハ其官ヲ辱ムノ嫌アレハナリ

○第百八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル証人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定付ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於ケル証人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ其証人鑑定人ヲ呼出ササルトキ証人鑑定人呼出ヲ受ケ出頭セサルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述鑑定ヲ比較ス可キトキハ

檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

○第九十條 第一百五條以下ノ規定ハ公判ノ証人ニ第三百三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

○第九十一條 証人疾病其他正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコトヲ疎明シタルトキハ裁判所其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所判事ニ囑託シ其所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコトヲ得

○第九十二條 檢事被告人及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出ス証人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ各相手方ニ送達ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲スコシ

(註) 檢事及ヒ被告人民事原告人ハ各其主張スルコトヲ明瞭ナラシメンカ爲メニ証人ノ呼出ヲ請求スルコトヲ得而シテ裁判所之ヲ許可スルトキハ其証人ノ氏名目録ヲ開廷ヨリ少クとも一日前(二日前三日)前ニ送達スルハ妨ナシ其相手方ニ送達ス是レ相手方ヲシテ辯護ノ方法ヲ盡サシメンカ爲メナリ凡テ訴訟行爲ハ正々堂々ノ陣ヲ布キ以テ勝敗ヲ決スヘク陰險狡猾ノ手段ヲ用フルヲ許サ、ルナリ

○第九十三條 証人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラズ又供述前辯論ニ立會フ可カラズ既ニ供述ヲ爲シタル後ハ公廷ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス
(註) 証人二人以上アルトキハ各別ニ之ヲ訊問スヘク又証人ハ供述前辯論ニ立會ハシムヘ

カラス是レ各証人互ニ其道ヲ通シ又ハ被告人等ノ意ヲ迎ヘ不實ノ供述ヲ爲スニ至ルヲ恐ル、ナリ

○第九十四條 証人及ヒ被告人ノ訊問ハ裁判長之ヲ爲スモノトス

陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ケ証人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル事項ヲ分明ナラシムル爲メ証人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

(註) 裁判長ハ公廷内取締ノ權利ヲ有シ秩序ヲ維持スルノ義務ヲ有スルヲ以テ被告人証人訊問ハ裁判長ノ職權内ニ在リ孰レモ陪席判事及檢事ト雖特ニ其所見アルニ於テハ自由ニ訊問セサル可ラス(陪席判事ハ其裁判ニ參與シ檢事ハ公益ノ保護者タル資格アルヲ以テ但一應訊問スヘキ旨ヲ裁判長ニ告知シタル後自ラ之ヲ訊問スルコトヲ得ルコトセリ其他訴訟關係人假令被告人民事原告人民事擔當人等ハ直接ニ訊問スルコトヲ得ス唯某々ノ事項ニツキ訊問アラフコトヲ裁判長ニ請求スルヲ得ルニ過キス其事項ハ辯論ニ必要ナル點タルヤ言テ俟タズ但裁判長ノ意見ヲ以テ其請求ヲ拒スルヲ得ルヤ亦疑ヲ容レサルナリ

○第九十五條 証人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シルルトキス裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ裁判所長ニ送致ス可シ
其証人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

(註) 証人鑑定人(通事モ之ニ準スベシ)カ不實ノ供述ヲ爲シ偽証罪ニ該當スヘキモノト思料スヘキトキ裁判所ハ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ豫審判事ニ送致シ裁判所書記ハ其供述ヲ錄取シ亦之ヲ豫審判事ニ送致ス又此場合ニハ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得ヘキモノトセリ而シテ此ノ場合ハ供述ノ不實ナルヲ(一)故意ニ出テタルヲ即被告人ヲ曲庇シ又ハ陷害スルノ意思(二)禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノタルヲ罰金以下ノ刑ニ該ルヘキモノト思料スルトキハ豫審判事ニ送致スルコトヲ裁判所ニ於テ直チニ裁判ヲ爲スヘシ

前述ノ場合ニハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキハ勿論裁判所ノ職權ヲ以テモ之ヲ爲スコトヲ得之ヲ要スルニ偽証罪ハ他ノ犯罪ト異ナリテ一種特別ノ場合ニ於テ生スルヲ以テ其告發起訴ノ手續モ普通ノ犯罪トハ其趣ヲ異ニス且此ノ如クナラズンハ事實發見上ニ都合ヲ感シ殊ニ本案ニ影響ヲ及ホスコト莫大ナレハナリ

○第九十六條 被告人聲者、啞者、又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第九條第一條ノ規定ニ從フ

○第九十七條 裁判所ニ於テハ証人被告人ノ面前ニ於テ十分ナル供述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタルトキハ其証人ノ供述中被告人ヲ退廷セシムルコトヲ得但裁判所長ハ証人供述ヲ終リタル後被告人ヲ入廷セシメ其供述シタル事項ヲ告知ス可シ

本條ノ規定ハ共同被告人ニモ亦之ヲ適用ス

(註) 証人ハ被告人ノ面前ニ於テ訊問ヲ受ケ供述ヲ爲ス本則トス(証人ト証人トハ各別ニ訊問シ席ヲ同フスルヲ許サス然レトモ被告人ノ面前ニ於テハ畏懼不安ノ恐れアリテ十分ノ供述ヲ爲スコトヲ得サルヘシト思料シタルトキハ被告人ヲ暫時退廷セシメテ証人ノ供述ヲ聞クコトヲ以テ十分ニ忌憚スルコトヲ証人タルモノカ見聞シタル事實ヲ吐露セシム然レトモ其供述ハ必ラス被告人ニ告知セサルヘカラス然ラズンハ被告人ノ辯護權ヲ侵害スルヲ以テ不法ノ處置タリトス故ニ但以下ハ裁判長ニ一ノ義務ヲ負ハシムルモノトイフヘシ

○第九十八條 裁判長ハ各証憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤヲ問ヒ且其利益ト爲ル可キ証憑ヲ差出スヲ得ヘキコトヲ告知ス可シ

又証憑物件ハ被告人ニ示シテ辯解ヲ爲サシム可シ
(註) 本條モ亦裁判長ニ一ノ義務ヲ負擔セシム各証憑ノ取調終ルヲ告ケタルモ直チニ判決ヲ下スコトヲ許サス必ラス被告人ノ意見アルヤ否ヤヲ問ハサル可ラス又各証憑ノ取調ヲ一括シテ一時ニ意見ヲ問フヘキニアラス必ラス各証憑ニ於テスルヲ要ス然ラズンハ錯雜紛亂ノ害ヲ來スヘケレハナリ且被告人ヘハ自己ノ利益トナルヘキ証憑ヲ呈出スルヲ得ヘキ旨ヲ告知スヘキナリ又証憑物件假令犯罪ノ用ニ供シタル兇器竊取シタル物品ノ如キモ必ラス被告人ニ示シ辯解セシムヘキナリ然レトモ茲ニ注意スヘキハ被告人カ意見ヲ述ヘ

又ハ其利益タル証憑ヲ呈出セス又ハ証憑物件ニツキ辯解ヲナサ、ルモ其人ノ自由ニ在リ(唯自己ノ不利タル結果ヲ受クルノミ然レトモ裁判長ハ必ス此等ノ權利アルヲ)ヲ被告
人ニ告知シ以テ其辯護權ヲ尊崇セサルヘカラスモ之ニ違反スルトキハ不法ノ處分トシ
テ上告ノ理由トナルヘキナリ故ニ本條ハ被告人ニ義務ヲ負ハシムルニアラス裁判長ニ義
務ヲ負擔セシムル命令法トイフヘキナリ

○第九十九條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ於テ檢事ノ意見
ヲ聽キ直チニ之ヲ裁判ス可シ

(註) 前數條ヲ以テ公判ノ手續ヲ規定セタルカ辯論中公判ノ手續違法ナリトノ異議ヲ申立
ツルトキ(假令ハ証憑物件ヲ被告人ニ示シテ辯解セシメサリシカ如シ)裁判所ハ直チニ
檢事ノ意見ヲ聞キ之ヲ裁判スヘシ但其裁判ニ對シテ獨立シテ不服ヲ申立ツルヲ得ス本
案ノ判決ト共ニ申立ツルヲ得ルノミ凡ソ本案ノ判決ニ非サル判決(中等判決)ニハ獨立上
訴ヲ許サ、ルチ原則トス其特ニ之ヲ許スハ法律ノ明文アル場合ニ限ル第百八十六條ノ如
キ是ナリ

○第二百條 裁判所ニ於テハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得
(註) 私訴ノ判決ハ公訴ノ判決ト同時若クハ公判ノ判決アリタル後ニ之ヲ宣告スルヲ得公
判ノ判決ニ先チテ私訴ノ判決ヲ下スコトヲ得ス

○第二百一條 被告人有罪ト爲リタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又
ハ一分ヲ負擔ス可キ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴ニ關スル訴訟費用ハ國庫之ヲ負擔ス
私訴ニ關スル訴訟費用ノ負擔ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

(註) 公訴ニ關スル訴訟費用ヲ負擔スル者ハ(一)被告人無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ受ケタルト
キハ檢事ノ起訴其當ヲ得サルモノナルヲ以テ國庫ニ於テ之ヲ負擔スヘキヤ論ヲ俟タス(二)
被告人有罪ノ宣告ヲ受ケタル場合其訴訟費用ハ被告人ニ於テ全部ヲ負擔スルチ本則
トス但被告人ヲシテ其費用ノ一分ノミヲ負擔セシムルコトアルハ其訴訟費用タルヤ檢事ノ
請求又ハ裁判所又ハ豫審判事ノ職權ヲ以テ証憑調假令鑑定人又ハ証人等ヲ呼出シ爲メニ
要シタル費用ニシテ不必要ノモノアルヲ以テナリ此場合ニハ裁判所ハ被告人ニ對シ訴訟
費用ノ一部ノミヲ負擔セシムヘキナリ(第二項ハ民事訴訟法訴訟費用ノ處參照スヘシ)此
費用負擔ノ言渡ハ檢事若クハ被告人ノ請求ヲ俟タス裁判所ノ職權ヲ以テ言渡スヘキモノ
ナリ

○第二百二條 被告人有罪ト爲リタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物ハ所有者ノ請求ナ
シト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

(註) 物件差押ハ豫審ニ於テ説明シタルカ如ク沒收スヘキ物件ニ限ラヌ況シ事實發見ニ必
要ナル物件ヲ總稱ス故ニ沒收ニ係ラサル差押物ハ之ヲ所有者ニ還付スル言渡ヲナス被告

人ノ有罪ト否又ハ所有者ノ請求ノ有無ヲ問ハサルヤ親易キノ理タリ
○第二百三條 刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且犯罪ノ証憑ヲ明示ス可シ

無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スモ亦其理由ヲ明示ス可シ
○第二百四條 判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス可シ判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

○第二百五條 判決ノ原本ニハ其裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、其事件ニ干與シタル檢事ノ官氏名ヲ記載シ判事裁判所書記共ニ署名捺印ス可シ
(註) 判決書ニ記載ス可要件ハ(一)被告人ノ氏名 其他職業住所身分年齢等被告人ノ人達ヲササルコトヲ明示ス(二)事實(甲)刑ノ言渡ニハ處刑ノ事實加重減輕ノ事實併ニ此事實ヲ認ムルニ足ルヘキ証憑ヲ記載ス(乙)無罪又ハ免訴ノ言渡ニハ被告人ノ証憑不十分不論又ハ公訴消滅ノ原由ヲ明記ス此場合ニハ別ニ其証憑ヲ記載セスシテ可ナリ(三)法律即事實ニ相當スル法律ノ正條コシテ無罪又ハ免訴ノ言渡タルト刑ノ言渡タルトヲ問ハス其言渡ノ理由タル法律ヲ明示セサルヘカラス此法律トハ刑法及本法タイフ(四)判決即處刑無罪又ハ免訴ノ裁斷是ナリ(五)其裁判ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干系シタル檢事ノ官氏名及ヒ裁判書記ノ署名捺印此方式ノ必要タル言ヲ俟タサルナリ

判決ノ言渡方法ヲ規定ス元來判決ニハ判決主文ト判決主文以外ノモノアリ例之被告某ヲ重禁錮二年ノ刑ニ處シ又ハ被告某ヲ免訴シ且放免ストイフカ如キ之ヲ判決主文トイフ其他ハ判決主文外ノモノトスサテ裁判言渡ニハ必ラスシモ判決書ノ全文ヲ朗讀スヘシトイフニアラス判決主文ハ必ラス之ヲ朗讀スヘキモ其判決ノ理由タル事實法律ハ之ヲ朗讀スルモ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告知スルモ裁判長ノ自由ニ在リトス而シテ判決ノ言渡ハ辯論終了ノ即日ニ於テスルチ本則トスルモ事件ノ煩雜ナル場合ニハ之ヲ次日ニ讓ルコト得ルナリ

○第二百六條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ正本、謄本又ハ抄本ヲ求ムルコト得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

(註) 判決ニ原本(二百五條)正本謄本抄本ノ區別アリ原本ハ裁判官ノ自ラ執筆シテ作リタルモノニテ正本ノ根原トナルモノナリ正本ハ書記カ原本ヲ謄寫シタル者ニシテ其謄本ト異ル所ハ正本ハ裁判執行ノ爲メニスルモノナレト謄本ハ利害干系人カ唯證據ノ用ニ供スルコト過キス其効力ニ大小アルハ言ヲ俟タサルナリ抄本ハ謄本ヲ節略シ一部分ヲ謄寫シタル者ニテ是レ亦證據ノ用ヲ爲ス者ナリ原本ハ裁判所ニ保藏スヘク決シテ訴訟關係人ニ附與スヘキコトアラス之ニ反シテ正本謄本又ハ抄本ハ其費用ヲ以テ其下附ヲ請求スルチ得

○第二百七條 對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其判決ニ對シ上告ヲ爲スチ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ告知シ又闕席判決ニ因リ刑

ノ言渡アリタルトサハ其判決ニ對シ故障ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ
若シ其告知又ハ記載ナキトキハ更ニ其通知アルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經過ヲ停止ス
(註) 上訴期間故障期間ノ進行停止ノ場合ヲ規定ス畢竟被告人ヲ保護スルノ主旨ニ出テタルモノナリ欠席判決ノ何物タルヤハ以下該當ノ處ニ於テ説明スルヲ見ルヘシ

○第二百八條 裁判所書記ハ公判始末書ヲ作り左ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

- 第一 公ニ辯論ヲ爲シタルコト又ハ公開ヲ禁シタルコト及ヒ其事由
- 第二 被告人ノ訊問及ヒ其供述
- 第三 証人鑑定人ノ供述及ヒ宣誓ヲ爲シタルコト若シ宣誓ヲ爲サ、ルトキハ其事由
- 第四 証擔物件

第五 辯論中異議ノ申立アリタルコト、其申立ニ付キ檢事其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ裁判

第六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ供述セシメタルコト

○第二百九條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル項ノ外裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、裁判長陪席判事、檢事及ヒ裁判所書記ノ官氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ涉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ判事出席シタルコトヲ記載ス可シ
辯論中補充判事ヲシテ代ラシメタルトキハ其旨ヲ記載ス可シ

(註) 公判始末書ニ記載スヘキ事項ノ主要ヲ掲ク今一々説明セス

○第二百十條 公判始末書ハ判決言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アルトキハ其紙尾ニ記載ス可シ

(註) 公判始末書ハ裁判所書記ガ公判ノ顛末ヲ筆記スルモノニシテ其作成ニハ猶豫ヲ要セサレトモ其整頓ニハ判決言渡ヨリ三日間ノ猶豫アリ而シテ其始末書ニハ裁判長及裁判所書記ノ署名捺印ヲ要ス故ニ公判始末書ハ一ノ公正證書ニシテ其證據力モ從テ廣大ナリ即偽造ノ申立ヲナスノ外ハ之ヲ攻撃スルヲ得ス(證據編公正證書ノ處參照)故ニ偽造ノ訴アルマテハ法律上真正ナリトノ推定ヲ受ケ十分ノ證據力ヲ與フルナリ

○第二百十一條 判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ嚴重ニ之ヲ保存セサルヘカラス即上訴アリタル場合ハ訴アリタルトキハ之ヲ上訴裁判所ニ送付ス可シ

(註) 判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ嚴重ニ之ヲ保存セサルヘカラス即上訴アリタル場合ハ之ヲ上訴裁判所ニ送致スヘク又裁判執行ニモ必要ナレハナリ

○第二章 區裁判所公判

(註) 第一章ニハ公判ノ何タルヲ問ハス共通スヘキ手續ヲ規定シタルガ今ヤ犯罪ノ種類ニ由リ其管轄ヲ異ニシ其輕重ニ從テ其公判手續ニモ繁簡疎密ノ差ヲ生スルハ事理ノ當然タリ而シテ本章ハ最モ疎略ナル公判手續ヲ規定シタルモノニシテ特ニ區裁判所公判ニ干

スル法則ヲ定ム但地方裁判所公判手續(第三章)ト雖特別ノ規定ナキモノニ限り本章ヲ準用スヘケモノナレハ本章ハ最緊要ノ部分ナリトス

○第二百十二條

區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管轄ニ屬スル違警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理ス

第一 檢事ノ起訴アリタルトキ

第二 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判アリタルトキ

(註)本條ヲ解釋スルニ方リ先ツ區裁判所ノ管轄ニ屬スル犯罪ヲ記載スルヲ便宜ナリトス裁判所構成法ニ由レハ區裁判所ノ受理スヘキ權限ハ(一)違警罪(二)五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪(三)刑法第二編第一章ヲ除キ其他ノ輕罪ニ本刑二百圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二年以下ノ禁錮又ハ單ニ三百圓以下ノ罰金ニ該リ其情第二ニ掲ケタル刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルヲ要セスト認メ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事局ヨリ區裁判所ニ移付シタルモノ詳細ハ同法ニ就キ見ルヘシ)而シテ區裁判所カ公訴受理ノ原因ハ

第一 檢事ノ起訴 別ニ説明ヲ要セス

第二 豫審判事又ハ上級裁判所ノ移送 區裁判所事件ニハ元來豫審ヲ要セスト雖其果シテ違警罪ナルカ輕易ノ輕罪ナルカ抑亦重罪若クハ煩雜ノ輕罪タルカハ豫審ヲ經ルニ非サレハ明瞭ナラサルヲアリ故ニ豫審終結ノ際區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト思料スルトキハ之ヲ區裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス(第六十六條第六十七條)是レ區裁判所カ公訴

ヲ受理スルノ原因タリ又上級裁判所ノ移送ノ區裁判所ノ上級裁判所ハ地方裁判所控訴院

大審院ナリ

○第二百十三條

檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請求ス可シ

大審院ナリ

○第二百十四條

裁判所ハ裁判所書記ヲシテ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發セシム可シ

○第二百十四條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名、職業、住所、出頭ノ日時場所及ヒ被告事件ヲ記載シ且被告事件違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ナルトキハ代人ヲシテ出頭セシムルコトヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ

若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其事件ニ付キ取調ヲ受ケサリシトキハ辯護準備ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

○第二百十五條

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

(註) 本條何レノ場合トハ區裁判所公訴ヲ受理シタル原因ノ前條第一號ニ出テタルト第二號ニ由ルトキ問ハストイフ意ナリ一旦公訴ノ受理アリタルトキハ檢事ハ被告人ノ呼出ヲ請求セサルヘカラス此請求アルトキハ裁判所ハ裁判所書記ヲシテ呼出狀ヲ發セシム而シテ呼出狀ニ記載スヘキ事項ハ(一)被告人ノ氏名職業住所(二)出頭ノ日時(三)出頭スヘキ場所(四)被告事件ヲ明示スルヲ要ス而シテ違警罪又ハ罰金ノ刑ニ該ルヘキ輕罪事件ナルトキハ必ラスシモ本人ノ出頭ヲ要セス代人ヲシテ出頭セシムルヲ許セリ故ニ呼出狀ニモ之ヲ記載シテ被告人ニ知了セシメ以テ之ヲ保護スルナリ此等ノ條件ヲ欠缺シタルトキハ

被告人ニ於テ之ヲ受取ルコトヲ拒ムヲ得ヘシ然レトモ一旦之ヲ受取リタルトキハ後日ニ至リテ其欠漏ヲ理由トシ不服ヲ申立ツルコトヲ許サス但シ第四條件即被告事件ノ記載ナキ呼出狀ヲ受取リタルトキハ辯護準備ノ爲メ更ニ二日ノ猶豫ヲ受クルコトヲ許セリ(次條ノ外ニ)但事件ニツキ取調ヲ受ケサル前事實ノ告知ヲ受ケタル後ニ申立ツルコトヲ要ス然ラズンハ縱令此猶豫ヲ請求スルモ之ヲ許可セサルヘシ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間ニ少クトモ二日ノ猶豫ヲ與フルハ被告人ヲシテ辯護ノ方法ヲ盡サシメンカ爲メナリ

○第二百十六條 判事ハ豫審ヲ經サル被告事件急速ヲ要スルトキハ公判ニ取掛ル前檢證處分ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ノ立會ヲ要セス

(註) 刑事ニ於テ證據蒐集ノ任アルモノハ豫審判事ナリ然レトモ豫審ヲ經サル輕罪事件ニシテ其公判前ニ證據ノ消滅ヲ防止スル爲メ急速ノ處分ヲ要スルコトナキニテ此場合ニ於テハ公判ノ事ニ於テ直チニ其檢證處分ヲ爲スコトヲ得此場合ニハ唯書記ノ立會アルノミニテ足レリ此規定タル全ク一ノ特別トイフヘク即チ豫審ヲ經由シタル事件ニハ適用スルコトヲ得サルナリ

○第二百十七條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスモテ出頭シタル者ト雖モ異議ノ申立ナキトキハ裁判所ニ於テ證人トシテ其供述ヲ聽クコトヲ得

(註) 証人出頭マテノ猶豫ヲ被告人ニ以スレハ甚ダ短カシ是レ被告人ハ辯護ノ準備ヲ爲スノ必要アレトモ証人ハ此等ノ事ナク單ニ見聞ノ儘チ供述スルニ過キス唯家事調理ノ便チ與ヘンカ爲二十四時ノ猶豫ニテ足レリトス又証人ハ正式ノ呼出狀ヲ以テ呼出スチ本則トスレトモ呼出ヲ受ケスシテ現ニ出頭シタル證人トシテ直チニ訊問スルヲ許スハ大ニ便宜ナルヘシ但異議ノ申立ナキ場合ニ限ル異議ノ申立トハ檢事被告人及ヒ証人ノ異議申立ニ云フ

○第二百十八條 判事ハ先ツ被告人ノ氏名、年齢、身分、職業、住所、出生ノ地ヲ問フ可シ檢事ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

(註) 判事カ此訊問ハ人違ナカラシメ再犯ニ係ルヤ否刑法上宥恕ヲ與フヘキモノナリヤ否ヤヲ審明スルニアリ而シテ檢事ノ此陳述ハ公訴ノ原告タル資格ヲ以テ舉證ノ責ニ任スルヲ以テナリ

○第二百十九條 判事ハ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問ス可シ必要ナル調書其他証人書類ハ書記ヲシテ朗讀セシメ又証人ノ供述ヲ聞キ其他証人ノ取調ヲ可スヘシ

若シ被告人ノ自白アリタル場合ニ於テ檢事、民事被告人ノ異議ナキトキハ他ノ証人ヲ取調フルニ及ハス

(註) 檢事カ被告事件ノ陳述終リタルトキハ判事ハ被告人ニ對シテ其事實ノ如何ヲ訊問ス

被告人ヲ訊問セシメテ直チニ裁斷ヲ下スコト、スルトキハ被告人ノ辯護權ヲ侵害スル不法ノ所爲タリ又必要ナル調書其他証憑書類ハ裁斷ノ材料タルモノニシテ必ラス書記ヲシテ朗讀セシメ被告人ニ聽カシムヘシ書記カ朗讀セサル書類ヲ以テ處斷ノ證據トナスモ亦被告人ノ辯護權ヲ侵害シタル不法ノ處置タルヲ以テ訴訟關係人ハ上訴スルヲ得ヘキナリ証人ノ供述ハ被告人必ラス之ヲ聞知スヘク(百九十七)其他取調ノ証憑モ一々被告人ニ示スヘキ(百九十八)ヤ言ヲ俟タサルナリ

若シ被告人ノ自白アリタル場合ニ於テ檢事民事原告人ノ異議ナキトキハ單ニ其自白ノミニ依テ判決ヲ爲スコトヲ得但判事ニ於テ其自白ニ信ヲ措カスシテ他ノ証憑ヲ取調フルハ素ヨリ妨ケナシ抑々自白トハ自己ニ不利ナル事實ヲ任意ニ自ラ陳述スルヲイフ而シテ本條ノ規定ヲ以テ昔時ノ口供結案法ト同一視スルコトナキヲ要ス其詳細ハ第二白卅九條ヲ説明スルニ方リ之ヲ述フヘシ

○第二百二十條 証人調濟ノ後檢事ハ事實及ヒ法律適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
被告人及ヒ其辯護人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得
檢事、被告人及ヒ辯護人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ述供セシム可シ

(註) 判事カ事實ノ取調ヲ終リタル時ハ檢事先ツ被告事件及證據ノ信否ニツキ意見ヲ述ヘ次ニ被告人及ヒ辯護人之ニ答辯シ而シテ事實ノ辯論終リタルトキ檢事ハ先ツ法律適用ニ

ツキ意見ヲ陳述シ次ニ被告人及ヒ辯護人之ニ答辯ス事實ト法律適用トヲ問ハス檢事ト被告人辯護人トノ意見相抵觸スルトキハ復互ニ辯論ヲ爲スコトヲ得ヘシ所謂法律ノ適用トハ單ニ刑ヲ適用スルノミニアラズ免訴無罪若クハ管轄違トニ關スル一切ノ法律適用ヲ包含ス而シテ刑ノ適用ニツキテハ檢事ハ只其法律ノ正條ヲ援引シテ其適用ヲ求ムルニ止マラス其正條ノ範圍内ニ於テ相當ノ金額刑期ヲ指定シテ其適用ヲ求ムヘキナリ
事實ノ辯論ト法律ノ辯論トニ拘ハラズ被告人若クハ辯護人ハ最終ト供述ヲ爲スノ權ヲ有ス是レ被告人ノ辯護權ノ結果トイフヘキナリ

○第二百二十一條 公訴ニ付キ辯論終リタル後民事原告人ハ被告ノ事實ヲ證明シ且私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ
被告人、辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得
(註) 本條ハ讀ンテ明文ノ如シ喋々ヲ要セサルヘシ

○第二百二十二條 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ判決ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ
本條ノ場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ
(註) 本條以下ハ裁判ノ言渡ニ干スル規定トス
(甲)管轄違言渡(第百八十六條參照) 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ本案ノ

事件ヲ取調フルヲ待タズシテ管轄違ノ言渡ヲ爲ス而シテ此場合ニ於テ被告人カ勾留狀ヲ受ケアリシトキハ此言渡ト同時ニ放免ノ言渡ヲ爲スヘキナリ其管轄ニ非ル言渡ヲ爲ス以上ハ其以前ノ手續即拘留狀ヲ發スル手續モ亦無効タルヲ以テナリ然レトモ其事件重大且罪証明白ナルトキハ管轄違ノ言渡ハ必ラス之ヲ爲サ、ルヲ得サルモ放免ノ言渡ハ之ヲ爲サス其儘檢事ニ交付スヘク又勾留ヲ受ケサルモノナレハ新ニ勾留狀ヲ發シ得ヘキトナシタリ

○第二百二十三條 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬シ且犯罪ノ証憑十分ナルトキハ判決ヲ以テ法律罪律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スヘシ

(註) (乙)處刑言渡 此言渡ヲ爲スニハ(一)被告事件カ其裁判所ノ管轄ニ屬スルヲ(二)犯罪ノ証憑十分ナルヲ(三)二條件ヲ具備スルトキハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スヘキナリ第一條件ヲ欠如スルトキハ管轄違ノ言渡ヲ爲スヘク第二條件ヲ欠クトキハ次條ニ從ヒ無罪ノ言渡ヲ爲スヘキナリ

○第二百二十四條犯罪ノ証憑十分ナラス又ハ被告事件罪ト爲ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シ又第六十五條第三號以下ノ場合ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

(註) (丙)無罪ノ言渡此言渡ヲ爲スヘキ場合ハ犯罪ノ証憑不十分ノ時ニ言渡スヘク而シテ犯罪ノ証憑全クナキトキハ無罪ノ言渡ヲ爲スヘキハ勿論ナリ
(二) 被告事件罪トナラサルトキ一般又ハ特別ノ不諭罪ノ場合ヲ云フ

(丁)免訴ノ言渡 (一)被告事件カ公訴ノ時効ニ罹リタル時(二)確定判決ヲ經タル時(三)大赦アリタルトキ(四)法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ此四个ノ場合ニ限リ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキモノナリ

豫審終結ノ決定ニハ無罪ノ言渡ヲ爲スヲ得ス(丁)ノ場合ハ勿論(丙)二个ノ場合ニ於テモ免訴ノ言渡ヲ爲スヲ得ルノミ其理由ハ已ニ説明シタル所ナリ

○第二百二十五條 前二條ノ場合ニ於テハ私訴ニ付キ其請求價額ノ多寡ニ拘ハラズ判決ヲ爲スル可シ

(註) (甲)管轄違ノ言渡ニハ私訴ノ判決ヲ爲スヲ得ス主タル公訴ノ本案ニ裁斷ヲ與ヘサニ從タル私訴ニ判斷ヲ與フルノ理由ナク且私訴モ公訴ト共ニ管轄違ノモノナレハナリ然レモ(乙)(丙)(丁)公訴ニツキ言渡アリタル後ハ私訴ニツキ判決ヲ與フヘシ請求價額ノ如何ニ拘ハラズト明言シタルハ元來區裁判所ニ於テ通常民事ノ訴ニハ百圓以上ノ價額ヲ有スル訴訟物ヲ裁決スルノ權ナキヲ以テ私訴ニハ之カ例外タル旨ヲ明言シタルニ過キス

○第二百二十六條 呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所ヲ聽キ關席判決ヲ爲ス可シ

私訴關係人出頭セサルトキハ民事訴訟法ノ規定從ヒ關席判決ヲ爲ス可シ

○第二百二十七條 禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人出頭セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又

ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルニ非サレハ闕席判決ヲ爲ス可カラズ

豫審終結ノ言渡書又ハ公判呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期間ヲ定メ其期間ニ被告人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ爲ス可キ告知書ヲ其親屬又ハ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長ニ送達ス可シ若シ其本籍若クハ最後ノ住所地分明ナラサルトキハ同上ノ告知書ヲ少クトモ一月間裁判所ノ掲示板ニ貼付シテ公示スヘシ

(註) 本條ハ闕席判決ノコトヲ規定ス凡ソ訴訟審理ハ原被兩造對審シテ辨論ヲ終結シタル上判決ヲ與フ本則トス然ラサレハ事實ノ眞正ヲ誤ルニ至ルヘシ殊ニ刑事ニテハ被告人コ

一ノ辨護權ヲ與ヘ鄭重慎重ノ手續ヲ要スルコトナシタルヲ以テ知ルヘキナリサレハ被告人ハ公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ之ヲ如何スルヤモシ其事件ノ審判ヲ停止スヘキモノトセハ被告人ハ常ニ此奸策ヲ用ヒテ審判ノ遷延ヲ圖リ社會ハ爲メニ其安寧ヲ維持スルコト得サルヘシ是レ已ムヲ得ス闕席判決ナルモノヲ設クル所以ナリ故ニ闕席判決ヲ行フニ要スル條件ハ嚴密ニ釋解セサルヘカラス

(一)被告人呼出ヲ受ケタルコト 禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ事件ハ之ヲ罰金以下ノ刑ニ該ルヘキ事件ニ比スレハ此條件ニツキ嚴重ノ手續ヲ要ス(第二百二十七條)

(二)被告人公判期日ニ出頭セサルコト 罰金以下ノ刑ニ該ルヘキ事件ニハ代人出頭ニテモ十分ナルヲ以テ此場合ニハ代人ノ出頭モアラサリシテ要ス

(三)檢事ノ意見ヲ聽クコト

此三條件ヲ具備スルハ闕席判決ヲ爲スコトヲ得ヘシサテ此第一條件ニツキ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ事件ニハ嚴重ノ規定ヲ要ス(甲)豫審終結ノ言渡書(豫審ヲ經タル事件ヲ想像ス)又ハ公判ノ呼出狀ヲ被告人ニ送達スルノ證アルヲ要ス是ヲ本則トス以下ハ此變則トス(罰金以下ノ事件ニハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ單ニ呼出狀ヲ送達スレハ充分ニシテ必スシモ被告本人ニ送達スルコトヲ要セス)(乙)甲ノ方法ヲ行フコトヲ得サルトキハ裁判所ニテ猶豫期間ヲ定メ其期間内ニ出頭セサルトキハ闕席判決ヲ爲スヘキ告知書ヲ親屬又ハ本籍若クハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長ニ送達シタルコト(丙)乙ノ方法ニ從フコトヲ得ス即親屬アルコト知レサルカ又ハ本籍若クハ最後ノ住所ノ地分明ナラサルトキハ右ノ告知書ヲ一ケ月以上裁判所ノ掲示板ニ貼付シ以テ公示スルヲ要ス(罰金以下ノ刑ニ該ルヘキ事件ニハ此等ノ方法ヲ要セス)此等ノ規定タル全ク被告人ノ辯護權ヲ重ニスルヲ以テ闕席判決ヲ爲スハ實ニ己ムヲ得サルノ處分タル知ルニ足ルヘシ

○第二百二十八條 闕席判決ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ限リ闕席者ニ送達スヘシ

闕席判決ヲ受ケタル者ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ルコトヲ得

(註) 前條ニ從ヒテ闕席判決アリタルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ判決書ヲ欠席者ニ送致スルコトナシト雖檢事其他訴訟關係人ノ申立アリタルトキ之ヲ送達セシム而シテ此送達ハ欠席判決ヲ確定セシムル(次條)ノ効力ヲ生スルヲ以テ其利益ヲ享クルモノハ必ラス此送達ノ申立ヲナスヘキヤ疑ヲ容レサルナリ

闕席判決ヲ受ケタル被告人ハ其判決ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得故障モ控訴ト同シ一ノ不服ヲ申立ツル方法ナレトモ故障ハ同一審ニ於テ審理ノ仕直シヲ請求スルニ在レハ控訴ハ上級審ニ向テ前審ノ改正ヲ求ムルニ在リ其故障ヲ許ス所以ハ闕席判決タルヤ當事者ノ一方ノミニ由リ判決シタルモノナレハ瑕疵アルヲ免カレサルヘシト推測スルヲ以テナリ然レトモ此闕席判決タル必ラスシモ闕席シタル被告人ニ不利益ナル判決ヲ爲スモノト速ラスヘカラス故ニ被告人無罪又ハ免訴欠席判決ヲ受ケタルトキハ故障ヲ申立ツルノ理由ナキヤ辯ヲ待タス

○第二百二十九條 故障申立ノ期間ハ三日トス此期間ハ罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及ヒ私訴ノ判決ニ付テハ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マリ禁錮刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ被告人自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

(註) 故障申立ノ期間ハ三日ニシテ此期間進行ハ(一)罰金以下ノ刑(私訴ノ判決共)ハ欠席判決ノ送達ヲ以テ始マル即民事訴訟法送達ノ法ニ從ヒ必ラスシモ被告本人ニ送達スルヲ要セス(二)禁錮以上ノ刑ニハ被告本人ニ送達スルカ(是送達ニツキ刑事訴訟法特別ノ規定トス第十九條參考)又ハ判決執行第三百十九條參照)ニ由リテ被告人之レカ刑ノ言渡アリタル日ヨリ始マル而シテ故障期間ヲ無爲ニ經過シタルトキハ判決ハ確定ノモノトナルヘキヤ言テ俟タス而シテ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪ハ或ハ判決後許多ノ時日ヲ經過スルニ非レハ確定セサル場合ナシトセス

○第二百三十條 故障ヲ申立テントスル者ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ其申立書ヲ差出ス可シ

○第二百三十一條 裁判所ニ於テハ故障ノ申立アリタルコトヲ相手方ニ通知シ且其事件ヲ公判ニ付ス可キ期日ヲ定メ訴訟關係人ヲ呼出ス可シ

(註) 故障ヲ申立ツルニハ欠席判決ヲ受ケタル裁判所ニ於テセサルヘカラス是レ控訴上先トハ趣ヲ異ニシ同一裁判所カ審理ヲ仕直ス者ナレハナリ而シテ故障ノ申立アリタルトキハ對審ノ必要アルヲ以テ此旨ヲ相手方ニ通知シ且ツ對審期日ヲ定メ訴訟干係人ヲ呼出スヘキナリ而レトモ故障ノ申立アリタルトキハ必ラス本條ノ規定ニ從ヒ相手方ニ通知シ公判期日ヲ定ムヘキコトヲ先ツ裁判所ハ次條ニ從ヒテ故障ノ受理スヘキヤ否ヤヲ審明シ受理スヘキモノタルトキハ本條ニ從ヒ公判期日ヲ指定スル等ノ手續ヲ行フモ受理スヘカラスルトキハ次條ニ由リテ之ヲ棄却スヘキナリ

○第二百三十二條 裁判所ニ於テハ權職ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又故障ノ期間ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ棄却ス可シ

○第二百三十三條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ
前項ノ場合ニ於テ故障申立人闕席シタルトキハ更ニ故障ヲ申立ルコトヲ得ス

○第二百三十四條 第二百四十七條第二百四十八條ノ規定ハ闕席判決ニ對スル故障ニモ亦之ヲ
百三十一

採用ス

(註) 裁判所カ故障ノ申立テ受理セシムルハ左ノ條件ヲ具フルヲ要ス(一)故障ノ許スヘキモノナルヲ 對席判決ニ對シテ故障ヲ申立ツルカ如キ再度ノ 闕席判決其他無罪免訴ノ 闕席判決ニ對シテ故障ヲ申立ツルカ如キ云フ(二)故障ノ期間ヲ守リタルヲ 故障申立ノ期間ハ三日ナリトス 此二條件ノ一ヲ欠クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ棄却セサルヘカラス而シテ此條件ヲ具備シタルトキハ故障申立ハ之ヲ受理シ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ同一審ニ於テ審理判決ノ下スヘキモノナリ然レトモ前ニ故障ヲ申立テタルモノカ再ヒ 闕席シタルトキハ其新闕席判決ニ對シテ故障ヲ申立ツルヲ許サス一度タ懈怠ハ法律ハ尙ホ之ヲ寬待シタルモ懈怠二度ニ至ルトキハ最早之ヲ宥恕スルノ理由ナク且永ク裁判ノ確定ヲ妨ケ刑ヲ執行スルヲ得サルノ弊害ヲ來スヘケレハナリ

第三章 地方裁判所公判

○第二百三十五條 地方裁判所ニ於テハ豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判ニ因リ其管轄ニ屬スル輕罪及ヒ重罪ノ公訴ヲ受理ス

又輕罪ニ付テハ檢事ノ起訴ニ因リ其公訴ヲ受理ス

○第二百三十六條 前章ノ規定ハ此章ニ別段ノ定メナキモノニ限リ地方裁判所ノ輕罪、重罪ノ公判ニ準用ス

(註) 地方裁判所公訴受理ノ原由ハ(一)檢事ノ起訴輕罪事件簡明コソテ豫審ヲ要セサル

モノ但重罪ハ必ラス豫審ノ經由スルヲ以テ此場合ナシ(二)豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移送シタルトキ 豫審判事ヨリノ移送ハ第六十七條第六十八條ニ就テ見ルヘク又上級裁判所ハ控訴院又ハ大審院ヲ云フ

○第二百三十七條 重罪事件ニ付テハ開廷前裁判長又ハ受命判事ハ裁判所書記ノ立會ニ依リ一應被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタルヤ否ヤヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサルトキハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ被告人及ヒ辯護士ニ異議ナキトキハ辯護士一名ヲ選テ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得

書記ハ本條ノ訊問ニ付キ特ニ調書ヲ作ル可シ

(註) 重罪事件ニ付テハ直チニ公判ヲ開クヲ得ス必ラス開廷前被告人ヲ訊問セサルヘカラス此訊問ハ公行スルヲ要セス此訊問ハ如何ナリ理由アリテ行フヤトイフニ假之重罪公判ニ付スル豫審決定ニ對シテハ被告人抗告ヲ爲スヲ得而シテ其決定ニシテ抗告ヲ爲シ得ヘキヲ及其期間ヲ記載セカリトキハ更ニ通常ノ規定ニ從テ告知スルマテ抗告期間ノ進行ヲ停止スルヲ以テ公判開廷前一應此等ノ事ヲ訊問セサルヘカラスマタ重罪事件ニハ被告人辯護權ヲ拋棄スルヲ得ス若シ辯護人ナクシテ刑ノ言渡ヲ爲シタルトキハ其効力ナキモノトス故ニ被告人ニ辯護人ヲ選定シタルヤ否ヤヲ訊問シ若シ被告人カ之ヲ選定セザリシ時ハ裁判長ノ職權ヲ以テ辯護人(裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ)ヲ撰任スヘキナリ而シ

テ此開廷前ノ訊問ヲ爲スモノハ裁判長又ハ裁判長ヨリ訊問ヲ命セラレタル判事即受命判事トス而シテ書記ハ此訊問調書ヲ作製スルヲ要ス

○第二百三十八條

裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ受命判事ヲシテ臨檢ノ處分ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

(註) 裁判所カ本條ニ由リ臨檢處分ヲ行フハ其事件ノ豫審ヲ經タリシモノト否ト公判ノ前後ヲ問ハス而シテ豫審ノ手續ヲ準用スヘキハ言テ俟タサルナリ受命判事ノ此報告ハ決シテ其意見ヲ陳述スルモノニ非ス唯事實ヲ報道スルニ止マル凡ソ判事ハ判決宜告ニ非レハ自己ノ意見ヲ發表スルヲ得サルナリ

○第二百三十九條

裁判所ニ於テハ被告人其罪ヲ自白シタルトキト雖モ仍ホ證據ヲ取調ヘサルヘカラス

(註) 自白ハ有力ノ証左タリト雖盡ク證據スヘキニ非ス法律ハ其取捨ヲ判事ニ一任シタリ何ントナレハ被告人ノ自白ハ時トシテ爲メニスルトコロアリテ虛偽ノ陳述ヲ爲スコトアルヲ免カレス故ニ判事ハ尙ホ其他ノ証憑ヲ取調ヘサルヘカラス區裁判所公判ニハ自白アリタルトキハ其他ノ証憑ヲ取調フルニ及ハストノ規定ハ本條ト相矛盾スルヤノ感アリ蓋シ區裁判所事件ハ之ヲ地方裁判區件ニ比スルニ其犯罪ニ輕重大小ノ差アルヲ以テ其手續ニ至テモ此差異ヲ生スルニ至ルナリ且區裁判所公判ニ於テモ自白アリタルニ拘ハラズ他ノ証憑ヲ取調フルハ敢テ禁スル所ニ非サルヲヤ

○第二百四十條

裁判所ニ於テハ被告事件區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト認メタルトキト雖モ第一審ノ判決ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ其請求ノ價額通常民事上區裁判所ノ管轄ニ屬スルトキ亦同シ
(註) 地方裁判所ニ於テ其事件區裁判所ノ管轄タルヲ發見スルト雖管轄違ノ判決ヲ爲スヲ得ス通常ノ規定ニ從ヒ本案ノ判決ヲ爲シ之ヲ終了スヘキナリ而シテ其判決タルヤ第一審トナルヘキナリ蓋シ地方裁判所ハ區裁判所ノ上級ニ位スルヲ以テ其下級裁判所ノ事件ヲ管轄スルハ「大ハ小ヲ容ル」ノ格言ニ基ツキ且被告人ノ方ヨリイハ「區裁判所ニ於ケルヨリ一層鄭重ノ手續ニ由リ裁判ヲ受クルヲ以テ決シテ其利益ヲ害セラル、コナク殊ニ送致ノ費用時日ヲ節スルノ利益アルヲ以テナリ

○第二百四十一條

裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ檢事ヨリ更ニ其事件ヲ重罪トシテ訴追スルコトヲ申立タルトキハ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲ス可シ

但被告人勾留ヲ受ケサルトキハ勾留狀ヲ發ス可シ
其被告人件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ
受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ
受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得
(註) (一)地方裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ(二)檢事カ

更ニ其事件ヲ重罪トシテ訴追シタルトキノ處分ヲ定ム

(甲)其被告事件未ダ豫審ヲ經サル場合 重罪事件ハ必ラス豫審ヲ行フヲ以テ裁判所ハ豫審判事ニ送致スルノ決定ヲ與ヘサルヘカラス被告人勾留狀ヲ受ケサルトキハ裁判所ハ必ラス勾留狀ヲ發セサルヘカラス

(乙)其被告事件已ニ豫審ヲ經タル場合 豫審判事カ輕罪公判ニ付スル決定ヲ爲シタルヲテ想像ス而シテ裁判所ハ重罪ナリト思料スル等ノ場合ニハ再ヒ之ヲ豫審ニ付スルノ要ナシ唯其事件ヲ更ニ重罪事件トシテ裁判スル旨ノ決定ヲ爲シ受命判事ヲシテ豫審處分ニ從ヒ一應其事件ニツキ取調ヘ報告ヲ爲サシム是レ鄭重綿密ノ手續ヲ爲スナリ

第五編 上訴

(註) 本編ニ所謂上訴トハ控訴上告抗告ノ三者ヲ稱ス此ノ三者ハ判決又ハ決定ニ對シ不服ヲ申立ツル方法ナリ

第一章 通則

○第二百四十二條 檢事其他訴訟關係人ハ法律ニ許シタル上訴ヲ爲スコトヲ得 檢事ハ被告人ノ利益ノ爲メモ亦上訴ヲ爲スコトヲ得

○第二百四十三條 辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スコトヲ得但被告人ノ明言シタル意思ニ反スルコトヲ得ス

○第二百四十四條 被告人ノ法律上代理人ハ獨立シテ上訴ヲ爲スコトヲ得

(註) 上訴ヲ爲シ得ヘキ人ハ(一)檢事 檢事ハ刑事ノ原告タルヲ以テ其決定又ハ判決ヲ不當ナリト思考スル時ハ總テ上訴ヲ爲スヲ得ヘシ而シテ被告人ノ利益ノ爲メモ上訴スルヲ得ルハ檢事ハ一面ハ公益保護ノ職掌ヲ有スルモノナレハ非徒テ懲罰スルト同時ニ良民ヲ救護スルヲ務メサルヘカラス是レ通常民事ノ原告ト異ナル所ナリ(二)訴訟關係人

被告人民事原告人民事擔當人等チイフ被告人ハ此等ノ判決ニ付利害關係ヲ有スルコトヲ俟タス故ニ公訴私訴共ニ不服ヲ申立ツルヲ得ヘキモ民事原告人民事擔當人ハ唯私訴ニノミ利害ノ干系ヲ有スルヲ以テ上訴ヲ許スモ公訴ノ判決ニハ上訴スルノ權ナシ(三)被告人ノ法律上代理人 此者ノ何タルヤハ民法人編ニ於テ見ルヘク無能力者ヲ代表シ其利益ヲ保護スルノ任ヲ負フモノカ故ニ被告人ニ言渡シタル公訴ノ判決ニツキ獨立シテ上訴スルヲ得ヘシ(被告人ノ明言シタル意思ニ反スモ差支ナシ)(四)辯護人 辯護人ハ被告人ノ爲メニ其利益ヲ保護スル訴訟代理人タルヲ以テ被告人ヲ代表シテ上訴ヲ爲スヲ得ヘシ但被告人ニ於テ上訴ヲ爲スヲナキ意思ヲ明言シタルトキハ上訴ヲ爲スヲ得ス是レ代理人ハ委任者ノ意思ニ反スヘカラスノ原則ナリ而シテ法律上代理人ト委任ニ由ル代理人ノ區別ハ此一點ニ於テ明瞭ナルヘシ

○第二百四十五條 勾留ヲ受ケタル被告人上訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ監獄署長ニ差出シ署長ハ之ヲ其裁判所ニ送致ス可シ

○第二百四十六條 檢事ヲ除ク外上訴ヲ爲シタル者ハ其判決アルマテ何時ニテモ之ヲ取下クル

(註) 上訴ハ訴訟關係人ノ有スル一ノ權利ナリ故ニ之ヲ拋棄スルヲモ其自由ニ在リ自己ニ不利ナル判決ナレハ縱令完全無缺ノ裁判タリト雖一己ノ私情ヨリ之ニ不服ヲ申立ツルヲアルヘシ而シテ後日其非ヲ覺知スルモ其上訴ヲ取下クルヲ得サルトセンカ是レ法律ハ明カニ其非ヲ遂クルヲ命スルモノナリ故ニ其判決アルマテ何時ニテモ之ヲ取下クルヲ得ヘシ然レトモ此理由ハ檢事ノ上訴ニ適用スヘカラス檢事ハ社會ノ代表者トシテ上訴ヲ提起シタルヲ以テ其權利ヲ拋棄スルヲ得ス必ラス判決ヲ得サルヘカラス

○第二百四十七條 訴訟關係人天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メ上訴期間ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ疏明シタルトキハ期間ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但障礙ノ止ミタル日ヨリ通常ノ期間内ニ其疏明方法ヲ申立書ニ記載シ上訴ヲ爲ス可シ

○第二百四十八條 前條ノ申立アリタルトキハ裁判所書記速ニ其申立書ヲ相手方ニ送達ス可シ相手方ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聞キ先ツ其申立ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

(註) 本條ハ上訴權ノ回復ニ關スル規定トス夫レ上訴ハ際限ナク之ヲ許スヘキコアラズ必ラス法定ノ期間内ニ於テセサルヘカラス此期間ヲ空シク經過シタルンカ其權利ヲ喪失スルノ結果ヲ生スヘキハ事理ノ當然ナリ然レトモ法律ハ其權利ヲ回復スルヲ得ル場合ヲ

示シタリ即天災其他避クヘカラサル事變ノ爲メ期間ヲ經過シタルハ其人ニ懈怠アルニアラス故ニ其旨ヲ疏明シタルトキハ其上訴權ヲ回復スルヲ許サ、ルヘカラス然ラスンハ利害關係人ハ將サニ法律ノ剛復ニ泣クヘキナリ但此等障礙ノ止ミタル日(其日チ一日トノ加算ス第十五條初日不算入ノ例外トス)通常ノ期間内ニ其旨ヲ疏明スヘキナリ)

○第二百四十九條 上訴完結ノ後其訴訟記録ハ上訴審ニ於テ爲シタル裁判ノ謄本ト共ニ第一審裁判所ニ之ヲ返還ス可シ

(註) 上訴アリタルトキハ第一審裁判所ハ第二百一十一條ニ從ヒ其訴訟記録ヲ上訴裁判所ニ送致セサルヘカラス故ニ上訴裁判所ニ於テ其事件終結ヲ告ケタルトキハ其訴訟記録ヲハ(上訴裁判所ノ裁判謄本ヲ添ヘ)第一審裁判所ニ返還セサルヘシラス是レ裁判所ニ於テ訴訟記録ヲ保存スルノ良法タリ

第二章 控訴

(註) 控訴トハ第一審ノ判決ニ不服ナル者ヨリ其事件ノ覆審ヲ其直近上級裁判所ニ請求スルヲ云フ

○第二百五十條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

(註) (一) 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審(區裁判所ハ常ニ第一審ナレバ地方裁

判所ハ第二審タルコトアリニ於テナシタル判決ナルヲ要ス 故ニ地方裁判所又ハ控訴院
ニ於ケル第二審ニハ上告ヲ爲シ得ルモ控訴スルヲ得ス

(二)判決ハ本案ノ判決第百八十七條ニ規定セル本案前ノ判決タルヲ要ス 本案ノ判決ト
ハ第二百二十二條以下諸種ノ判決ヲ云ヒ本案前ノ判決即公訴受理スヘカラサル申立管轄
違ノ申立ヲ却下シタル判例ヲ云フ(此二種ノ申立ヲ至當ナリトスル判決ハ即本案ノ判決
ニシテ第二百二十二條以下管轄違ノ言渡免訴ノ言渡ナリ
今本案ノ判決ニツキ被告ハ如何ナル場合ニモ控訴スルヲ得ヘキカ如シト雖無罰又ハ免
訴ノ言渡ニハ控訴スルヲ許サス是レ利益ナケレハ訴權ナシトノ原則ニ基ツクモノトス

○第二百五十一條 控訴ハ判決ノ一分ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得若シ之ヲ限ラサルトキハ判決ノ
全部ニ對シ控訴ヲ爲シタルモノト看做ス可シ

○第二百五十二條 控訴ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ五日トス

闕席判決ヲ受ケタル者ハ故障ノ期間内故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得
(註) 控訴申立ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ(此日ハ算入セス)五日間トス而シテ第一審

ニ於テ闕席判決ヲ受ケタルモノハ第二項ニ由リ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴スルコトヲ得
得ヘキナリ換言スレハ闕席判決ニ對シ不服ヲ申立ツル方法二個アリ一ハ故障ニシテ同一
審ニ於テ審問ノ仕直シヲ受ケ尙ホ不服ナルトキハ之ニ對シテ控訴スルヲ得ヘクニハ此故
障ヲ爲サスシテ直チニ控訴スルニ在リ但此場合ノ控訴期間ハ故障期間(三日)ト同一ニシ

テ通常控訴期間ノ如ク五日ニアラサルナリ

○第二百五十三條 本案ノ判決ニ對スル控訴ノ期間内及ヒ控訴アリタルトキハ判決ノ執行ヲ停
止ス

(註)右控訴ノ期間内(五日)及控訴アリタルトキハ(五日後ニ至ルモ)第一審ノ判決確定セサ
ルヲ以テ執行ヲ停止セサルヘカラス

○第二百五十四條 控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

裁判所ハ控訴ノ申立アリタルコトヲ速ニ相手方ニ通知ス可シ

○第二百五十五條 原裁判所ニ於テ期間ヲ經過シタル控訴ノ申立ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ
此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

(註) 控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所即第一審裁判所ニ差出サシムルハ控訴ノ申立有
効ナルトキハ其裁判所ハ之ヲ相手方ニ通知シ控訴ノ申立有効ナラサルトキハ決定(判決
ト異ナリ決定ハ口頭辯論ヲ用ヒス訴訟手續ニ對シテ與フル裁判ニシテ判決ハ辯論ヲ開キ
本案ニ對シテ與フル裁判ナリトス但第百八十七條本案前ノ判決ハ例外タリ)ヲ以テ之ヲ
棄却スルヲ以テナリ法文ニハ期間ヲ經過シタル申立ニ付テノミ規定シタルトモ控訴ヲ許
スヘキヤ否モ調査セサルヘカラス(第二百卅二條參照)但此棄却ニ對シテハ抗告ヲ爲スコ
トヲ許シタリ

○第二百五十六條 訴訟記録ハ檢事ヨリ控訴裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出

ス可シ

公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ檢事ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監獄ニ移ス可シ

(註) 訴訟記録ハ其裁判所ニ保存シ若シ上訴アリタル時ハ之ヲ上訴裁判所ニ送付スルコトハ已ニ見タル所ナリ(第二百一十一條)而シテ其送致ノ方法ハ原裁判所ノ檢事ヨリ控訴裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ其裁判所ニ差出ストナル也公判ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留云々ニツキ説明ヲ要スルコトアリ判決ニハ假ニ執行スヘカテサル判決ノ二種アリ甲ハ其未タ確定セサルニ執行スルモノヲ云フ本條勾留ノ判決言渡是ナリ此言渡ハ上訴期間内及ヒ上訴ノ申立アリタリト雖其執行ヲ停止セズ即假リニ執行ス其乙ニ屬スルモノハ本案ノ判決ニシテ確定セサル前ニ在テ執行スルヲ得スコハ第二百五十三條ニ明示シタル所ナリ

○第二百五十七條 控訴裁判所ニ於テハ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間小クトモ二日ノ猶豫アル可シ

○第二百五十八條 控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ關スル規定ヲ適用ス

第一審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ控訴裁判所ニ於テ其再度ノ訊問鑑定ヲ必要ナリトセサルトキハ之ヲ呼出ササルコトヲ得

○第二百五十九條 控訴ノ相手方ハ其判決アルマテ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

控訴裁判所ノ檢事モ亦附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

(註) 附帶控訴ハ主ニ控訴ニ附隨シテ爲ス控訴ヲ云フ蓋シ原裁判ニ満足セサルモ其利害關係小ナルヲ以テ自ラ進ミテ控訴ヲナサ、ルコトアリ然レトモ對手人ニ於テ控訴スルトキハ終ニ論争セサルヲ得ス此時ニ方リテ附帶控訴ヲ許サスハ自家ノ趣旨ハ之ヲ伸暢スルコトヲ得ス反テ對手人ノ爲メニ傷害セラルヘシ是レ附帶控訴ヲ許シ主タル控訴ニツキ判決アルマテ何時ニテモ提出スルヲ許シタリ故ニ主タル控訴カ成立セサルトキ即次條ニ由リ棄却セラレタルトキハ附帶控訴モ亦成立セサルコトナル但主タル控訴成立セサルモ附帶控訴カ第二百五十二條ノ期間内(第本條判決アル迄ニ非ス)ニ申立テアルトキハ獨立ノ控訴トシテ成立スヘキナリ

○第二百六十條 控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ期間内ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ期間ノ經過後ニ係ルモノト認ムルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

○第二百六十一條 控訴裁判所ニ於テハ控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

○第二百六十二條 控訴裁判所ニ於テハ原裁判所ノ管轄違ナルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ取消ス可シ此場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留

狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

原裁判所ニ於テ不當ニ管轄違ヲ言渡シタルトキハ其判決ヲ取消シ事件ヲ其裁判所ニ差戻ス可シ

(註) 控訴ノ判決ニ二種アリ

(甲) 控訴棄却ノ判決 (一) 控訴期間經過後ニ控訴ヲ申立テタルキ 控訴ノ許スヘカラサルトキモ亦然リ假令被告人ヨリ免訴ノ言渡ニ對シ抗訴ヲ申立ツルカ如キ是ナリ此場合ニハ本案ニ立入ラス即原裁判ノ當否ヲ取調フルヲ符タスシテ判決ヲ以テ棄却ノ言渡ヲ爲スヘキナリ (二) 控訴ノ申立有効ニシテ控訴裁判所之ヲ受理シタルモ控訴申立人出頭期日ヲ懈怠シテ出頭セサルトキ 此時ニモ原裁判ノ當否ヲ取調フルニ及ハスシテ棄却ノ言渡ヲナスヘシ (第二百二十六條) (三) 控訴ノ理由ナキトキ 控訴ノ申立有効ニテモ原判決ハ事實上法律上一點ノ瑕疵ナキトキハ其控訴ヲ棄却ス此判決ハ本案ニ立入りタル結果ニシテ之ヲ實體上控訴棄却トイヒ前二者ヲ形式上控訴ノ棄却トイフモ差支ナカラシカ

(乙) 原判決取消ノ判決 (一) 控訴ノ理由アルニ由リ原判決ヲ取消ストキ 原判決ニ事實上又ハ法律上ノ瑕疵アリテ控訴ノ申立正當ナルトキハ原判決ヲ取消シ更ニ第二審トシテ判決ヲ與フヘキナリ (二) 原裁判所ノ管轄違ナルニ由リ原判決ヲ取消ストキ 犯罪ノ種類犯人ノ身分犯罪ノ土地等ニ由リ裁判所ノ管轄ヲ異ニスルハ已ニ説示タル處ナリ控訴裁判所ハ控訴申立ノ趣旨管轄違ニ在リタルト否トヲ問ハス原裁判所カ管轄違ナルトキハ

職權ヲ以テ其判決ヲ取消シ更ニ正當管轄ノ裁判ヲ受ケシメンカ爲之ヲ檢事ニ交付スヘキナリ (三) 原裁判所ノ正當管轄ナルニ由リ原判決ヲ取消ストキ 原裁判所ハ元來正當ノ管轄ナルニ管轄違ナリト言渡シタル判決(第二百二十二條)ヲ下シ由テ控訴アリタルトキハ原判決ヲ取消シ其裁判所ニ差戻スヘシ原裁判所ハ本案ニツキ裁判ヲ與ヘサルヘカラス(第一審タルコト勿論ナリ)

○第二百六十三條 前條第一項ノ場合ニ於テ控訴ヲ受ケタル地方裁判所自ラ其事件ニ付キ第一審トシテ裁判權ヲ有スルトキハ更ニ其事件ニ付キ判決ヲ爲ス可シ但事件重罪ナルトキハ第二百四十一條ノ規定ニ從ヒ處分ス可シ

(註) 控訴裁判所ニ於テ一審裁判所カ正當管轄ニ非ルコトヲ認メタルトキハ其判決ヲ取消シ正當管轄ノ裁判ヲ受ケシメンカ爲メニ之ヲ檢事ニ交付スヘシト雖若區裁判所ノ判決ニ對シテ地方裁判所カ控訴ヲ受理シタルニ區裁判所ノ正當管轄ニ非スシテ地方裁判所ニハ第一審ノ裁判權ヲ有スルコトヲ認メタルトキハ原判決ハ固ヨリ之ヲ取消スヘキモ之ヲ檢事ニ交付セスシテ直チニ本案ニツキ裁判ヲ爲スモノトセリ是レ無益ノ手續ヲ省クカ爲メナリ而シテ此本案ノ裁判タルヤ第一審タルコトハ明丁ナリ但事件重罪ナルトキハ第二百四十一條ニ從ヒ鄭重ノ手續ヲ行フヘキヤ論ヲ俟タス

○第二百六十四條 控訴院ニ於テ地方裁判所カ輕罪ナリト判決シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ其事件ヲ重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ附帶控訴アリタルトキハ其公判ヲ止メ更ニ

重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ判決ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ被告人辯護人ヲ選任セサルトキハ第二百三十七條第二項ノ規定ニ從ヒ裁判長ノ權職ヲ以テ辯護人ヲ選任ス可シ

(註) 地方裁判所ノ輕罪トシテ爲シタル判決ニ對シ其事件重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ

附帶控訴アリタルトキ(此控訴ハ主タル附帶タルトキ問ハス檢事ヨリ控訴アリタル場

合ト想像スヘシ實ニ被告人カ輕罪トシテ爲サレタル判決ニ對シ重罪ナリトシテ控訴ヲ行フ

理由ナク且之ヲ許サルヘキナリ)又ハ控訴院ニ於テ其事件ヲ重罪ナリト認メタルトキ

ハ第二百四十一條ノ規定ヲ準用スヘシ其豫審判事ニ事件ヲ送致スルノ規定ナキハ控訴院

ニハ豫審判事ナキヲ以テ受命判事ヲシテ其報告ヲ爲サシムルコトナシタルナリ

○第二百六十五條 被告人辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シ

テ被告人ノ利益ト爲スコトヲ許サス

被告人ノ利益ノ爲メ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルトキ亦同シ

(註) 凡ソ裁判所ハ事實ト法律トニ依リ相當ノ判決ヲ爲スヘキハ當然タリ然ルニ本條ニ於

テハ控訴ノ判決ニ對シ一個ノ制限ヲ設ケ以テ被告人ヲ保護スルノ規定ヲ設ケテ被告

辯護人法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ其控訴ハ單ニ原判決(刑ノ言渡)ヲ重キニ

過クルカ又ハ全ク無罪又ハ免訴スヘキモノト爲スニ由ル然ルニ控訴裁判所カ原判決ヲ變

更シテ一層被告人ニ不利益ナル判決ヲ與フルハ不告不理ノ原則ニ反シ且上訴ハ地位ヲ良

好ナラシムルモ下惡ナラシムコトナシ^{カガ}ノ格言ニ違背スヘシ又被告人ノ利益ノ爲メニ檢事

ヨリ控訴ヲ爲シタルトキモ亦然リ然ラズ^{カガ}ハ檢事ノ好意ハ却テ被告人ニ不利益ヲ與フル

コトナラヘシ

然レトモ檢事ヨリ原判決ノ輕キニ失スルコト主張シ(主タル控訴ヲ附帶控訴トシ問ハス

タルトキハ檢事ハ一ニ裁判ノ公平ヲ維持シ以テ公益ヲ保護スルニ在リ故ニ此場合ニハ控

訴裁判所ハ被告人ノ利不利ヲ問ハス(假令一方ニ於テハ被告人等控訴シタル)又檢事ノ意

思ニ拘ハラスニ事實ヲ法律ニ由リ相當ノ判決ヲ爲スヲ得ヘキナリ

○第二百六十六條 控訴申立人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ以テ控訴ヲ棄却シ相手方出頭セサ

ルトキハ申立人ノ意見ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ

(註) 本條ハ控訴權拋棄ノコトヲ規定ス控訴審理ノ日ニ於テ控訴申立人ノ出頭セサルハ全ク

自己ノ權利ヲ拋棄スルモノト云ヘシ此時ニハ相手方ノ意見ヲ聞クヲ要セス當然闕席判決

ヲ以テ控訴ヲ棄却スヘキナリ然レドモ被控訴人出頭セサルトキハ申立人ノ意見ヲ聞キ闕

席判決ヲ下スコトヲ得(木案ニツキテ)但必ラスモ申立人ヲ勝訴セシムルコトイフニアラス控

訴申立理由ナキトキハ之ヲ棄却スルヲ得ヘシ又被控訴人ノ闕席者モ故障ヲ申立ツルコト

得ヘキナリ

第三章 上告

上告トハ第二審ノ判決ニ對シ其法律ニ違背シタルヲ理由トシ直近上級裁判所ニ不服ヲ申立ツル方法ナリ故ニ事實ノ點ハ第二審ニ於テ確定シ唯法律適用ノ誤謬ヲ更正スルノ目的ニ出ツルナリ

○第二百六十七條 上告ハ地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

(註) 上告ヲ爲スコトヲ得ヘキモノ(一)地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決(二)同上第二百八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決此二種ニ限ル地方裁判所ハ第一審トシテ裁判スルコトアリ(區裁判所カ第一審タルトキ)此時ノ上告裁判所ハ控訴院タルナリ之ニ反シテ控訴院ハ第二審タルトキ(地方裁判所カ第一審タルトキ)ハ大審院ニ向テ上告ヲ爲スコトヲ得故ニ上告裁判所ハ大審院若クハ控訴院ナリトス

○第二百六十八條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコト理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

○第二百六十九條 裁判ハ左ノ場合ニ於テ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

- 第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ
 - 第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス
 - 第三 判事忌避セラレ其忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ
 - 第四 裁判所ニ於テ其管轄又ハ管轄違テ不當ニ認メタルトキ
 - 第五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セザルトキ
 - 第六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カザルトキ
 - 第七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルトキトキ得ヘキ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲シタルトキ
 - 第八 判決ヲ公行セス又ハ公開ヲ禁スル言渡ナクシテ辯論ヲ公ニセザルトキ
 - 第九 裁判ニ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アルトキ
 - 第十 擬律ノ錯誤アルトキ
- (註) 上告ハ原判決事實認定ノ當否ニ於テスルヲ得ス唯或事實ヲ認定シ之ニ法律ヲ適用スルニ方リテ瑕疵アルヲ理由トスルニ止マル第二百六十七條第一項ハ訊ク此原則ヲ示シタリ
- 二項ハ法律違背ノ定義ヲ示シ而シテ次條ニ於テ其通例ヲ示シタリ
- 第一云々 裁判所構成法ニ從ヒテ裁判所ヲ構成セザルトキトハ假令地方裁判所ハ三名控訴院ハ五名ノ判事出席スヘク又檢事裁判所書記ノ立會アルヲ要スルニ此等ノ規定ニ違反ス

ルキハ當ニ被告人ノ利益ヲ保護スルノ主旨ニ反スルノミナラス裁判ノ信用ヲ害スヘシ是レ此點ヲ理由トシテ上告ヲ許シ以テ原判決ヲ破毀シテ何ノ効果ヲモ生ゼサランル所以也

第二云々 判事カ職務執行ヨリ除斥セラル、コハ己ニ第四十條ニ於テ見タル所ロナリ故ニ此規定ニ違反シタルトキハ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサルノ嫌アルヲ以テ上告ヲ許シタルナリ然レトモ既ニ忌避ノ申請ヲ爲シ若クハ第四十二條ニ由リ抗告ヲ爲シテ其擇斥ヲ主張シタルモ共ニ棄却モラレタルトキハ其擇斥ハ即チ理由ナキモノナルヲ以テ隨テ不公平ノ嫌アラズ故ニ上告ノ理由トナラサルナリ故ニ法律上職務ノ執行ヨリ擇斥セラル、判事カ職務ニ與カリテ判決ヲ爲シ其迄何等ノ申請又ハ上訴アラサリシ場合ヲ想像スヘシ第三云々 第四十一條ヲ參照スヘシ
第四云々 裁判所カ管轄ヲ不當ニ認メタルトキトハ裁判所カ法律ニ負キ自カラ管轄違ナリト言渡シ又ハ言渡ヲナサ、ルモ單ニ管轄ニ非ル裁判所カ裁判ヲ爲シタル場合ヲ云フ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキトハ法律ニ違ヒテ管轄違ノ言渡又ハ正當管轄ニ非ル裁判所ニ事件ヲ移ス、言渡ノ如何ヲ云フ蓋此裁判管轄ハ公益ニ關スルヲ以テ嚴密ニセサルヘカラサレハナリ

第五云々 本條第六條ノ理由ナキコ公訴ヲ受理セス又ハ其理由アルコ公訴ヲ受理スルハ法律ニ違背スルヤ言テ俟タス

第六云々 本法ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽クコト命ジタル場合ニ於テ之ヲ聽カサルトキハ法律ニ違背スルヲ以テ上告ノ理由トナル也其各場合ハ讀者ノ搜索ニ委ヌヘシ
第七云々 (甲) 請求ヲ受タル事件ニ付キ判決ヲ與ヘサルハ告則必理ノ原則ニ違背シ(乙) 請求ヲ受ケサル事件ニ付判決ヲ與フハ不告不理ノ原則ニ反ス甲コハ例外アルコトナリト雖乙コハ例外ノ場合アリ例辯論中發見シタル附帶犯罪ノ事件又ハ公訴費用負擔ノ判決ノ如キハ裁判所ノ職權ヲ以テ審理判決スルヲ得必ラスモ檢事ノ公訴アルヲ要セス
第八云々 審判公行ハ憲法上ノ原則ナリ故ニ密行スルトキ上告スルヲ得ヘシ但辯論ハ公安風俗ヲ害スルトキハ特ニ公開ヲ禁止スルノ言渡ヲ爲シタル上密行スルヲ得ヘシ然レト何レノ場合ヲ問ハス判決言渡ハ必ス之ヲ公開ス故ニ此規定ニ反シタルトキハ上告ノ理由トナルナリ

第九云々 裁判ニハ必ラス事實ト法律トニ由リ其理由ヲ兩ツナカラ明示セサルヘカラス故ニ理由不備又ハ理由齟齬ノ如キ上告ノ理由トナルナリ
第十云々 擬律ノ錯誤トハ事實ニ相當セサル法律ヲ適用シタルモノニ無罪ノ事實ヲ有罪ト斷定シ或ハ事實ニ不當ノ刑ヲ言渡スカ如キヲ云フ

○第二百七十條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ設ケタル規定ニ背キタルコト又ハ土地ノ管轄違アリト雖モ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス
(註) 本條前二條ノ例外ヲ定ム茲ニ注意スヘキハ被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受タルトキ

ハ被告人ハ何等ノ理由アルモ上訴スルヲ得ス是レ利益ナケレハ訴權ナシトノ理由アルヲ以テナリ故ニ本條ハ檢事ノ一方ニ就テ規定シタルモノト解釋セサルヘカラス被告人ノ利益ノ爲メ設ケタル規定トハ斷罪ノ証憑物件ハ必ラス被告人ニ示スヘキカ如キ被告人ナシテ最終ニ供述セシムルカ如キ重罪事件ニハ必ラス辯護人ヲ附スルカ如キ云フ是レ被告人ノ利益ヲ圖リ冤罪ヲ被フルナカテシメンカ爲メニ外ナラス故ニ其規定ニ從ハサルモ無罪免訴ノ言渡アリタルトキハ法律カ此規定ヲ設ケタル主旨ニ違反シタルトナシ故ニ檢事ハ之ヲ理由トシテ上告スルヲ得サルナリ(土地ノ管轄違モ亦然リ)然レトモ此規定ニ負キテ有罪ノ言渡アリタルトキハ被告人ハ勿論檢事モ亦上告スルヲ得ヘシ又無罪又ハ免訴ノ言渡アリテ公益ニ關スル規定ニ違背シタルトキハ檢事之上告スルヲ得ルハ勿論ナリトス

○第二百七十一條

上告申立ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ三日トス

○第二百七十二條

本案ノ判決ニ對スル上告ノ期間内及ヒ上告ノ申立アリタルトキハ勾留及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク外判決ノ執行ヲ停止ス

○第二百七十三條

上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出シ且其申立ヲ爲シタル日ヨリ五日内ニ趣意書ヲ差出ス可シ

裁判所ハ上告申立及ヒ趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ相手方ニ送達ス可シ(註) 上告ニ申立書ヲ要スルハ控訴ノ場合ト同一ナルモ上告趣意書ヲ要スルハ元來上告ハ

辯護士訴訟ニシテ本人出廷シテ上告ノ趣旨ヲ供述スルモノニ非ス故ニ原案ノ法律ニ違背スル點ヲ明示スルノ必要アルナリ

○第二百七十四條

相手方ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタル日ヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ニ差出スコトヲ得

○第二百七十五條

檢事ヨリ差出スコキ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ裁判所ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

上告裁判所ニ差出シ一通ヲ相手方ニ送達ス可シ
私訴ノ判決ニ對シ其訴訟關係ハヨリ差出スコキ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

○第二百七十六條

原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル上告ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

○第二百七十七條

訴訟記録ハ檢事ヨリ上告裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出スコシ

○第二百七十八條

上告ノ相手方ハ其判決アルトテ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

○第二百七十九條

上告申立及ヒ相手方ハ辯護士ヲ差出スコトヲ得
重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢事ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キモノトシテ上告

ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ辯護士ヲ選任セサルトキハ上告裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ

(註) 上告ハ控訴ト異ナリ書類上告趣意書答辯書辯明書ニ依テ裁判ヲ爲スヲ得然レトモ尙

ホ辯論ヲ必要トスル場合ニハ辯護士ヲ差出スヲ得ヘシト雖辯護士ニ非ル被告本人ハ出頭スルヲ得ス故ニ辯護士ヲ差出サ、ルカ辯護士ニ非ル被告本人出頭シタルトキハ辯論ヲ用ヒス書正ニ依リテ判決ヲ爲スナリ(二八四)此規定ハ重罪事件ニ適用スヘカラス蓋シ必ラス辯護士ヲ要スルハ上告ハ法律違背ノ點ニ限リ事實如何ヲ問ハサルヲ以テ法律ニ精通スル辯護士ニ非ンハ辯護スルヲ得ス且又被告本人ノ訊問ヲ要セサルナリ

○第二百八十條 裁判長ハ受命判事ヲ定ム可シ
受命判事ハ訴訟記録ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラス

(註) 受命判事ハ唯書類取調ノ任ヲ負フモノニシテ決シテ自己ノ意見ヲ露ハスヘカラス凡ソ判事ハ會議ノ時ニ非スンハ其意見ヲ述フヘカラス是レ豫斷ノ弊ヲ防クガ爲メナリ

○第二百八十一條 上告申立人及ヒ相手方ハ受命判事ノ報告書ヲ差出スマテハ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ上告裁判所ニ差出スコトヲ得
受命判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタルトキハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

○第二百八十二條 裁判所書記ハ開庭ヨリ三日前ニ開庭ノ期日ヲ上告申立人及ヒ相手方ノ辯護士ニ報知ス可シ

○第二百八十三條 開庭ノ日ニハ受命判事先ツ其報告書ヲ朗讀ス可シ
檢事及ヒ辯護士ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

○第二百八十四條 上告申立人又ハ相手方ヨリ辯護士ヲ差出ササルトキハ其儘ニテ判決ニ爲ス可シ

○第二百八十五條 上告裁判所ニ於テハ上告ノ理由ナキトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間内ニ於テ起ササルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

(註) 一本條以下ニハ上告ノ判決種類ヲ示ス
(甲)上告棄却ノ判決 (一)上告ノ理由ナキトキ(二)法律上ノ方式ニ違背スルトキ(三)上

告期間内ニ於テセカリシトキ
告期間内ニ於テセカリシトキ

○第二百八十六條 上告ノ理由アリトスルトキハ其上告ニ係ル判決ノ部分ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可シ但後二條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

○第二百八十七條 擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタル件ニ因リ判決ヲ破毀シタルトキハ其事ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク上告裁判所ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス可シ

(註) (乙)原判決破毀ノ判決 前條(一)(二)(三)ノ條件ヲ具備シタルトキハ上告アリタル部分ヲ破毀シ其事件ヲ原裁判所ニ接近シタル他ノ同等ノ裁判所ニ移送スルナリ但此移送ニハ或例外アリ即原判決ヲ破毀シタル上直チニ判決ヲ爲ス場合之ナリ(イ)擬律ノ錯誤ニ

由リ原判決ヲ破毀シタルトキ此時ニハ事實ハ全ク確定シテ唯之ニ問擬スル法律ノ適否ヲ
斷定スルヲ以テ他裁判所ニ移送スルノ必要ナク直チニ判決ヲ與ヘ以テ正當ニ法律ヲ適用
スヘキナリ(ロ)法律上受理スヘカラサル公訴ヲ受理シタルニ由リ原判決ヲ破毀シタルト
キ

第六條ノ原由ハ已ニ消滅シタル公訴ヲ受理シテ本案ノ判決ヲ與ヘタルニ由リ其判決ハ違
法タルヲ以テ之ヲ破毀スルヲ以テ最早他ノ裁判所ニ其事件ヲ移送スルヲ要セズ直チニ免
訴ノ言渡ヲ爲スヘキナリ

○第二百八十八條 公判ノ手續規定ニ背キタルコトアルト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホササル
トキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク又々其手續ヲ破毀ス可シ

○第二百八十九條 判決ノ一分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アルトキハ其部
分ヲモ破毀ス可シ

擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ被告人ノ利益ノ爲メニ判決ヲ破毀シ
タルトキハ其利益ハ上告ヲ爲ササル共同被告人ニモ及ホス可シ

(註) 不告不理ハ訴訟手續ノ根本トモ云フヘキモノナリ然ルニ本條第一項ハ此原則ニ違背
セヨカ如シ然レトモ他ノ部分ニ關係ヲ及ホサル場合ニ此原則ヲ用フヘキモ他ノ部分ニ
關係ヲ及ホス場合ニハ勢ヒ之ニ及ホサルヲ得ヌ例之原判決ニ於テハ詐欺取財ノ罪アリ
トシテ刑ノ言渡ヲ爲シ且其損害ヲ被告者ニ辨償スヘキ言渡ヲ爲サンコ之ニ對シ原判決ハ

其物品ノ被告人ノ所有タル事實ヲ認メテ詐欺取財ニ問ヒタルハ不法ナリトシテ上告ヲ爲
シタルニ其上告ヲ理由アリトシ原判決ヲ破毀シタルトセシ私訴ノ判決ニ付テハ別ニ上告
ヲ爲サ、ルヲ以テ之ヲ破毀セザランカ其物品ハ被告人ノ所有タルコ拘ハラヌ其損害ヲ他
人ニ賠償スルカ如キ結果ヲ生スヘシ故ニ上告セサル部分ト雖上告ノ部分ニ關係アルトキハ
尙ホ之ヲ破毀セザルヘカラサルナリ

共同被告人ノ一人カ上告ヲ爲シタル利益カ上告ヲ爲サ、ル他ノ共同被告人ニ及フ場合ハ
(一)被告人ノ利益ノ爲メ判決ヲ破毀シタル場合 被告人ノ不利益ニ於テモ他ノ共同被告
人ニ其害ヲ及ホストキハ上告ヲ爲サ、ル被告人ハ上告ヲ爲シタル被告人ノ爲メ却テ害ヲ
受クルノ結果ヲ生スヘシ故ニ破毀ノ効力ハ唯利益ノ時ニアラサレハ他ニ及ホストナシ(一)
二)擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルトキ原判ヲ破毀スル場合此場合ハ上告
裁判所ハ直チニ判決ヲ爲スコトハ已ニ見タル所ナリ隨テ其破毀ノ効力カ共同被告人ノ利益
トナルヤ否ヤハ此二箇ノ場合ノ外得テ知ルヘカラサルヲ以テナリ(此他原判決破毀ノト
キニハ他ノ裁判所ニ於テ第二審トシテ事實ヲ審案シ法律ヲ適用スル等凡テ控訴ノ手續ヲ
用フ)

○第二百九十條 上告裁判所ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可キトキハ
原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ指定ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ其裁判所
民事部ニ移ス可シ

○第二百九十一條 第二百六十五條ノ規定ハ上告ニモ亦之ヲ準用ス

○第二百九十二條 第一審裁判所ト第二審裁判所トヲ問ハス法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ期間内ニ上訴スル者ナクシテ其判決確定シタルトキハ其事件ニ付キ上告ヲ受クル權アル裁判所ノ檢事ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ其裁判所ニ非常上告ヲ爲スコトヲ得

非常上告ヲ理由アリトスルトキハ原判決ヲ破毀シ直チニ其事件ニ付キ判決ヲ爲スコシ

(註) 本條非常上告ヲ規定ス非常上告ノ何者タルヤハ
(一)第一審又ハ第二審ノ確定判決ニ對スルコト 判決確定セサルキハ通常ノ上訴ニ由リテ其誤謬ヲ矯正スル方法アルヲ以テ非常上告ヲ用フルコトナシ

(二)法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタルニ由リ被告人ノ利益ノ爲メニスルコト 故ニ被告人ノ不利益ノ爲メニ確定判決ヲ動カスコトヲ得ス

非常上告ヲ爲ス者ハ上告ヲ受クル權アル裁判所ノ檢事ハ職權ヲ以テ又ハ司法大臣ノ命ニ由テ之ヲ爲スモノトス法文何時ニテモトアルヲ以テ刑ノ消滅後ト雖之ヲ行フヲ得ヘク罰金沒收ノ刑ハ之ヲ回復スルヲ得ヘク徒刑ノ如キハ執行ヲ終リタル後ハ回復ノ道ナシト雖名譽ハ回復スルヲ得ヘク殊ニ公權剝奪ノ附加刑ハ之ヲ取消スノ利益アルナリ

第四章 抗告

抗告トハ豫審又ハ公判ノ決定ニ對シテ爲ス所ノ上訴ニシテ法律ノ特定シタル場合ニ限ル

○第二百九十三條 抗告ハ法律ニ於テ特ニ許シタル場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

(註) 今本法ニ於テ抗告ヲ許シタル場合ハ第四十二條第百十八條第百廿六條第百三十六條

第百卅八條第百九十九條二百五十五條二百七十六條等ニ就キ見ルヘシ

○第二百九十四條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所長其裁判ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ抗告申立人ヨリ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

○第二百九十五條 抗告ノ期間ハ裁判ノ送達アリタル日ヨリ三日トス

○第二百九十六條 抗告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ豫審判事ニ差出ス

可シ 其裁判所又ハ豫審判事ニ於テ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシト

スルトキハ意見ヲ付シテ三日内ニ抗告申立書ヲ抗告裁判所ニ送致シ且豫審終結ノ決定ニ對

スル抗告ニ付テハ訴訟記録ヲモ送致ス可シ

○第二百九十七條 抗告裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ書類ニ依リ抗告ノ裁判ヲ爲スコシ

○第二百九十八條 豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付キ抗告裁判所ニ於テ必要ナリトスルトキ

ハ受命判事ヲシテ事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

○第二百九十九條 抗告裁判所ニ於テハ抗告ヲ許スコキヤ否ヤ又抗告ノ期間内ニ於テ申立ヲ爲

シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ闕クトキハ其抗告ヲ棄却ス可シ

○第三百條 抗告裁判所ニ於テ抗告ヲ理由アリトスルトキハ原裁判ヲ取消シ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又抗告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ

(註) 別ニ説明ヲ待タスシテ明瞭ナルヘシ

第六編 再審

再審ノ訴トハ被告人ノ利益ノ爲メ特別ナル事實ノ覆審ヲ求ムルガ爲メ確定判決ニ對シテ爲ス異常例外ノ上訴ナリ

○第三百一條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第一 人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタルモ其殺サレタリト認メラレシ者犯罪後生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタル確証アリタルトキ

第二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第三 犯罪アル以前ニ作リタル公正証書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタルトキ

第四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第五 公正証書ヲ以テ訴訟記録ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ

第六 判決ノ憑據ト爲リタル民事上ノ判決他ノ確定ト爲リタル判決ヲ以テ廢棄若クハ破

毀セラレタルトキ

(註) 再審ノ訴ヲ爲スニハ左ノ條件ヲ具有スルヲ要ス

(一)確定判決ニ對スルコト 判決確定セザルトキハ通常上訴ノ方法ニ由ルヲ得ルヲ以テ再審ヲ用フルコトナシ (二)重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メコスルコト (三)法定ノ原由アルコトノ再審ノ訴ハ異常例外ノ方法ナルコトヲ以テ訊ク之ヲ許スヘキコトヲ法律ニ

定メタル原由アルトキニ限り之ヲ許スモノトス其原由ハ左ノ六箇ノ場合ニ限ル 第一云々 此場合ニハ被告人ハ全ク無罪ナリト速了スヘカラス或ハ殺人犯ノ未遂ニ止マ

ルカ或ハ他人ヲ殺害シタルモ知ルヘカラス然レトモ其被害者トシ認メラレタル者ヲ殺シタルニ非ルハ分明ナリ故ニ原判決ニハ非常ノ瑕疵アルヲ以テ其ノ錯誤ヲ改正セシカ爲メ

ニ事實ノ覆審ヲ爲サ、ルヘカラス 第二云々 全一事件ニツキ共犯ニ非ル以上ハ數人其罪ヲ犯スヘキ理ナシ然ルニ同一事件

ニツキ共犯ニ非スシテ別個獨立ニ刑ノ言渡ヲ受ケタルモノアルトキハ其一人ノ無罪タルヘキヤ疑ヲ容レス是事實覆審ノ要アル所以也

第三云々 犯罪アル當時ニハ被告人其場所ニ在ラザリシコトヲ公正証書ヲ以テ證明シタルトキハ再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得其證明ニハ私署證書ヲ援用スルヲ得ス公正証書ヲ要スルハ

其記事及日付ノ確實ナルヲ望ムニ在リ而シテ其公正証書ノ作製ハ犯罪以前ニ在ルヲ要スルハモ、犯罪後ノ公正証書ヲ以テモ證明スルヲ許ストキハ被告人ニ於テ其罪ヲ免カレン

カ爲メ詐偽ヲ以テ之ヲ作爲セシメタルヤモ知ルヘカラサレハナリ

第四云々 証人鑑定人通譯等詐偽ノ供述ヲ爲シ或ハ判事檢事等賄賂ヲ收受シ以テ被告人ヲ陷害シタル罪(被告人ヲ曲庇スルモ犯罪ヲ構成スルハ勿論ナリト雖再審ノ理由トナラス再審ハ被告人ノ利益ノ爲メニスルモノナレハナリ)ニ由リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アルトキハ未ダ必ラスモ被告人ヲ無罪タラシムルニ足ラサルモ其判決ノ事實ニ反スルハ疑ヲ容レヌ是再審ノ訴ヲ許ス所以ナリ

第五云々 訴訟記録トハ豫審調書公判始末書等罪ノ有無輕重ヲ裁斷スルニ必要ノ書類ヲ云フ若シ此書類ニ錯誤又ハ偽造アリタルトキハ其判決事實ニ反スルヤ言ヲ俟タヌ是レ再審ノ道ヲ與フル所以ナリ但其偽造又ハ錯誤ハ公正証書ヲ以テ證明スルヲ得ルノミ私署証書人証等ヲ援用スルモ無効ナリ

第六云々 刑事判決ノ憑據トナリタル民事上ノ判決力他ノ確定トナリタル判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタルトキハ勢刑事ノ判決ニモ至大ノ關係ヲ及ホサ、ルヲ得ヌ是事實ノ再審ヲ要スル所以ナリ

○第三百二條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ者左ノ如シ

- 第一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事
- 第二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事
- 第三 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢事

但司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

第四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者

第五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタルトキハ其親屬

(註) 再審ノ訴ヲ爲ス者

第一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事トハ確定シタル判決ヲ與ヘタル裁判所ノ檢事ニシテ第一審ト第二審トヲ問ハス

第二 右裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事(判決第一審ニ於テ確定シタル想像ス)

第三 右裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢事(判決第一審若クハ第二審ニ於テ確定シタル想像ス)

第二第三ハ上級裁判所ノ檢事ハ下級裁判所ノ檢事ヲ監督スル任アルヲ以テ此權限ヲ有ス而シテ上告裁判所ノ檢事ハ司法大臣ノ命令ニ由リテ之ヲ爲スコトアリ(職權ヲ以テスルヲ得ヘキハ勿論)蓋此等檢事ハ刑事ノ原告タル資格ヲ以テスルニアラス公益ヲ保護スル職掌アルニ由テ此權限ヲ有スルナリ

第四云々 別ニ喋々ヲ要セス

第五云々 親屬ニ此權限ヲ與ヘタルハ死者ノ冤ヲ雪キ名譽ヲ回復セシメンガ爲メナリ

○第三百三條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラヌ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得(註) 刑ノ消滅ニ拘ハラヌ(刑ハ刑ノ執行時効特赦等ニ由リテ消滅ス)之ヲ許ス所以ハ再審

ハ罪消滅セシムルヲ以テ目的トシ且被告人ノ名譽ヲ回復シ又ハ私訴ノ責任ヲ免レシムル等ノ効果ヲ生スルヲ以テナリ

○第三百四條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原判決ノ謄本及ヒ証憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ上告裁判所ノ檢事ニ差出ス可シ
原裁判所ノ檢事及ヒ控訴裁判所ノ檢事自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスルトキハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

○第三百五條 上告裁判所ニ於テハ檢事ノ請求ニ因リ速ニ受命判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

○第三百六條 上告裁判所ニ於テハ受命判事ノ報告及ヒ檢事ノ意見ヲ聞キ判決ヲ爲ス可シ

○第三百七條 上告裁判所ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

○第三百八條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ上告裁判所ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原判決ヲ破毀ス可シ

○第三百九條 再審ノ判決ニ因リ無罪ノ言渡アリタルトキ又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタルトキハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其判決ヲ揭示ス可シ

(註) 讀メテ明文ノ如ク必ラスモ余ノ總述ヲ要セサルナリ

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續

構成法第五十條ニ依レハ刑法皇室ニ對スル重罪輕罪及國事ニ關スル重罪皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ場合ハ之ヲ大審院特別權限ニ屬シ大審院之ヲ管轄スル大審院ハ日本全國唯一箇ヲ設ケルヲ以テ土地ノ區劃ニ關スル管轄問題ヲ生スルコトナシ蓋シ其事件重大ニシテ國家ノ安寧秩序ニ關スルコト又ハ其身分ノ極メテ高貴ナルコト他ノ犯罪ノ比ニアラス故ニ特別ニ鄭重慎重ノ手續ヲ要スルコトナシタルナリ故ニ本編規定ハ全ク通常訴訟手續ノ特別例外ニシテ此以外ハ尙ホ通常ノ規定ヲ準用スヘキモノナリ

○第三百十條 裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル大審院ノ特別權限ニ屬スル犯罪ニ付テハ檢事總長其捜査ヲ爲ス可シ
地方裁判所區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官モ亦其犯罪ニ付キ捜査ヲ爲シ檢事總長ニ報告ス可シ

(註) 捜査權ハ全ク之ヲ檢事總長ノ責任トナシタルハ手續ノ鄭重ヲ表スル所以ナリ然レトモ實際檢事總長一人ノ能ク爲シ得ヘキモノニアラス故ニ其他ノ檢事及司法警察官モ亦此

犯罪ニツキ捜査ヲ行ヒ之ヲ檢事總長ニ報告スルコトナリタリ是レ通常捜査ノ例外トス

○第三百十一條 前條ニ記載シタル犯罪ノ現行犯アル場合ニ於テ急速ヲ要スルトキハ地方裁判所區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官ハ第四十四條及ヒ第四十七條第一項ノ規定ニ從ヒ豫

審處分ヲ爲スコトヲ得但豫審判事ニ通知スルコトヲ要セス

(註) 檢事司法警察官ノ爲ス現行犯ノ豫審ニツキ豫審判事ニ通知スルヲ要セサル所以ハ元來豫審判事ハ地方裁判所ニ限リ設ケタルモノニシテ大審院ニハ豫審判事ナク爲リニ通知スヘキ者ナク且此等事件ノ豫審ハ地方裁判所豫審判事ニ通知スルノ理由ナキヲ以テナリ

○第三百十二條 前條ノ場合ニ於テハ地方裁判所檢事ヨリ証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ檢事総長ニ送致ス可シ

○第三百十三條 檢事総長ハ何レノ場合ニ於テモ其事件大審院ノ特別權限ニ屬シ且起訴ス可キモノト認メタルトキハ豫審判事ヲ命ス可キコトヲ大審院長ニ請求ス可シ

(註) (一)其事件大審院特別權限ニ屬シ(二)且起訴スヘキモノト認ムルトキハ檢事総長ハ必ラス豫審判事ヲ命スヘキコトヲ大審院ニ請求セザル可ラス即豫審ヲ輕由スルニ非スンハ公判ニ付セラル、コトナク且大審院ニハ豫審判事ノ設ケナキヲ以テ各事件毎ニ豫審判事ヲ命スヘキナリ

○第三百十四條 大審院長ヨリ命テ受ケタル豫審判事ハ豫審ヲ爲シタル上ニテ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ大審院ニ差出ス可シ

(註) 通常ノ豫審ニテハ豫審ニタル上他ニ取調ヘテ要スルコトナシト思料シタルキトハ直チニ豫審終結ノ決定(免訴管轄違輕罪公判重罪公判ニ付スルカ)否與フルヲ得レバ大審院特別權限ニ屬スル犯罪ニハ鄭重ノ手續ヲ要シ豫審判事一己ノ職權ヲ以テ決定シ下スト

許サス唯自己ノ意見ヲ付シテ大審院ニ差出スト、シタルナリ

○第三百十五條 大審院ニ於テハ檢事総長ノ意見ヲ聽キ先ツ其事件ヲ公判ニ付ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

其事件地方裁判所又ハ區裁判所ノ權限ニ屬スルモノト決定シタルトキハ管轄裁判所ヲ指定シ其事件ヲ送致ス可シ若シ特別裁判所ノ權限ニ屬スルモノト認メタルトキハ決定ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第百六十五條ニ記載シタル場合ニ於テハ決定ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

○第三百十六條 前數條ニ於テ特ニ規定シタルモノヲ除外豫審、公判ノ手續ハ第三編第四編ノ規定ヲ準用ス

第八編 裁判執行、復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

○第三百十七條 刑ノ執行ハ判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

(註) 刑ノ執行ハ單ニ財產ニ止マラス身体生命等ニ關スルヲ以テ一日之ヲ執行シタルトキハ回復スヘカラサルカ故ニ其判決ノ確定前ニ於テ之ヲ執行スルヲ得ス而シテ裁判ノ確定

ハ上訴期間ヲ經過シタルカ若シハ上訴ノ方法ヲ極盡シタルカ此二個ノ方法ニ由テ生スルモノナリ本條ノ規定ハ刑法第五十條ニモ同一ノ條文アリ參考スヘシ

○第三百十八條

死刑ノ言渡確定シタルトキハ檢事ヨリ速ニ訴訟記録ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

司法大臣ヨリ死刑ヲ執行ス可キ命令アリタルトキハ三日以内ニ其執行ヲ爲ス可シ

(註) 裁判ハ確定シタルトキハ直チニ之ヲ執行スルヲ得ルヲ本則トスレト之ニハ例外アリ

死刑ノ言渡ハ裁判確定ノ後檢事ヨリ速ニ訴訟記録ヲ司法大臣ニ差出シ同大臣ノ命令ヲ待

チテ三日内ニ執行スルヲトセリ蓋シ死刑ノ性質タル補償スヘカラサルヲ以テ或ハ司法大

臣ニ於テ檢事ニ命令シ非常上告又ハ再審ノ訴或ハ特赦等ヲ行フアルヲ以テカク慎重ノ

手續ヲ要スルヲ、ナシタルナリ

○第三百十九條

死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタルトキハ直チニ之ヲ執行ス可シ

體刑ノ言渡ヲ受ケ其執行ヲ進レタル者ニ對シ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ效ヲ

有ス其闕席判決ニ係ル場合ニ於テ發シタル者亦同シ

(註) 死刑ノ言渡ハ前條ノ特例ヲ設クレトモ其他ノ刑罰ノ裁判確定ノ一事ヲ以テ直チニ之

ヲ執行スルヲ得ルナリ第二項逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ効力ヲ有スルヲ以テ管ニ之ヲ逮捕

シ得ルノミナラス之ヲ勾留スルヲ得ヘキ言ヲ俟タス逮捕狀ノ性質ハ略説明シタルヲ以テ

茲ニ贅セス

○第三百二十條 刑ノ執行ハ其刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事又ハ上告裁判所ヨリ命ヲ受ケタル

裁判所ノ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金、料料、訴訟費用及ヒ沒收物品、追徴金ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス可シ破壊又ハ廢

棄ス可キ沒收物品ハ檢事之ヲ處分ス可シ

(註) 檢事ハ刑ノ執行ヲ監視スルノ職權ヲ有シ而シテ其刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事第一

審第二審トナ問ハス確定裁判ヲ與ヘタル裁判所ノ檢事)之ニ任ス若シ上告アリタルキハ

上告裁判所ヨリ原裁判所ニ還付シタルトキハ原裁判所ノ檢事他ノ同等ナル裁判所ニ移送

シタルトキハ其裁判所ノ檢事之ニ任シ其指揮ヲ爲スヘキ也第二項第三項ハ讀ンテ明文ノ

如シ

○第三百二十一條

死刑ノ執行ニ付テハ裁判所書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會テ

爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

○第三百二十二條

刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申

立ヲ爲シタルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ決定ス可シ此決定ニ對シテハ抗

告ヲ爲スコトヲ得

○第三百二十三條

賠償及ヒ訴訟關係人ニ辨濟ス可キ訴訟費用ニ付キ其判決ノ執行ハ民事訴訟

法ノ規定ニ從フ

第二章 復權

(註) 復權ハ一旦剝奪セラレタル公權ヲ約束ニ回復スルモノニシテ天皇ノ大權ニ屬ス(刑

法第六十五條)故ニ復權ハ重罰ノ刑ヲ受ケタル者ニ非スハ此法條ヲ適用スルヲ得ス重罪ノ刑ヲ言渡サレタルモノハ終決公權ヲ剝奪スルコトハ刑法第三十二條ニ明示シタル所ニシテ其公權ノ何者タルヤハ同法第三十一條ニ就テ見ルヘシ

○第三百二十四條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期間經過セタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法大臣ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ハ現ニ住スル地ノ地方裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

○第三百二十五條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

第一 判決ノ正本

第二 主刑ノ滿期、特赦ト爲リ又ハ時効ノ成就シタルコトヲ證明スル書類

第三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタル證書

第四 賠償及ヒ訴訟費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタル證書

第五 過去、現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

(註) 刑法第六十三條ニ曰ク公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スル後其情狀ニ由リ將來ノ公權ヲ回復スルヲ得主刑期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スル後亦同シ第二項第三項ハ説明ヲ要セス

復權ノ願書ニ添付スヘキ書類ハ(一)判決ノ正本 公權ヲ剝奪セラレタル原因ヲ示ス(二)主刑ノ滿期又ハ時効ノ成就シタルコトヲ證明シタル書類刑法第六十三條ノ期間ヲ經過シタ

ルコトヲ證明ス特赦ニモ復權ヲ許スヲ以テ特赦ヲ受ケタルトキモ其證書ヲ示スヘキナリ特赦ニ就テハ次章ニ於テ説明スヘキ也(三)假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタル證書 是改過自新ニ由リテ與ヘラレタル恩典ナルヲ以テ復權ヲ請求スルニ方リ有効ノモノタルヤ言ヲ俟タス故ニ之ヲ添付スルノ必要アリ(刑法第四一第五三條參照)(四)此等ノ證書ハ公權ヲ回復スルニ必要ノモノニシテ私益ニ害ナキコトヲ證明スルモノナリ(五)是願人ノ品行生計ノ如何ヲ取調フル爲メナリ

○第三百二十六條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ檢事長ニ差出ス可シ

○第三百二十七條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

○第三百二十八條 司法大臣ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閱シ之ニ意見書ヲ添ヘ速ニ上奏ス可シ

(註) 此三個條ハ之ヲ併説スルヲ便トス檢事ハ之ヲ檢事長ニ檢事長ハ之ヲ司法大臣ニ差出シ司法大臣ハ之ヲ天皇陛下ニ上奏ス是レ復權ハ天皇ノ大權ニ屬スルヲ以テナリ

(註) 本條ハ赦裁ニ由テ復權ノ願ヲ却下シタル手續ヲ示ス

○第三百三十條 復權ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ其裁可狀ヲ檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ
又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可犯ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ判決ノ原本ニ
記入ス可シ

本條ハ復權ノ裁可アリタル手續ヲ示ス

第三章 特赦

(註) 特赦ハ天皇ノ大權ヲ以テ刑罰ノ執行權ヲ拋棄スルモノヲ云フ而シテ復權トノ差異ヲ
 擧ケンニ特赦ハ執行ヲ要スル刑罰即主刑ニ對ス(性命刑自由刑財産刑)ルモ復權ハ附加刑
 ノ中公權剝奪ニ對スルノ差異アリ故ニ特赦ハ刑ノ言渡確定シタルトキハ何時ニテモ之ヲ
 爲スヲ得ルモ復權ハ主刑ヲ終リタル時ヨリ五ヶ年ヲ經過スルニ非スンハ之ヲ爲スコトヲ
 得ス又特赦アリタルトキハ赦狀中記載スルニ非スンハ復權ヲ得ス刑法第六十四條其他本
 法第三百卅一條以下ニ就キ特赦ト差異アルヲ見ルヘクマタ一々説明ヲ要セサルヘキナリ

○第三百三十一條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事
 又ハ監獄署長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法大臣ニ申立ルコトヲ得
 監獄署長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ストキハ檢事ヲ經由ス可シ但檢事ハ意見書ヲ添フ可シ
 特赦ノ申立アリタルトキハ司法大臣ヨリ其書類ニ意見書ヲ添へ上奏ス可シ

○第三百三十二條 司法大臣ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得
 死刑ヲ除ク外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セズ

○第三百三十三條 特赦ノ申立却下アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ
 檢事ニ其旨ヲ通知ス可シ

○第三百三十四條 特赦ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事
 ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第三百三十條ノ規定ニ從フ

(註) 附則

日本刑法註解

○第一編 總則

○第一章 法例

○第一條 凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス

一 重罪

二 輕罪

三 違警罪

(註) 本條ハ刑法ニ於テ罰スヘキ犯罪ノ區別ヲ定メタルモノニシテ三ケアリ

一 重罪トハ第七條ニ定ムル刑ヲ以テ罰スル罪ヲ云フ

二 輕罪トハ第八條ニ定ムル刑ヲ以テ罰スル罪ヲ云フ

三 違警罪トハ第九條ニ定ムル刑ヲ以テ罰スル罪ヲ云フ

之レ刑ニヨリ犯罪ノ區別ヲナシタル者ナリ尙ホ犯罪ノ性質ヨリ區別スレハ左ノ如シ

一 不行犯トハ法律ノ禁スル所爲ヲ行フヲ云フ

二 不行犯トハ法律ニ命スル所爲ヲ行ハサルヲ云フ例ハ裁判官訴テ受理審理セサル罪ノ如キ之レナリ

三 即成犯トハ一舉ニテ直ニ結了スル罪ヲ云フ

例ハ謀故殺ノ如シ

四 繼續トハ多少時間所爲ノ繼續スルモノヲ云フ例ハ監禁罪ノ如シ

五 單一犯トハ一回事ヲ行ヘハ直チ罪トナルモノヲ云フ

六 慣行犯トハ二回以上所爲ヲ行フニ非ラサレハ罪トナラサルモノ例ハ私ニ醫業ヲ爲ス罪ノ如キ之レナリ

七 現行犯トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際發覺シタル罪ナリ

八 非現行犯トハ犯罪成立ノ後發覺シタル罪ヲ云フ

九 有意犯トハ犯スノ意ナキニ非ラサレハ罪トナラサルヲ云フ

十 無意犯トハ犯意ノ有無ニテモ刑法各條ノ所爲ヲ行フヲ以テ罪トナルモノヲ云フ

十一 國事犯トハ政治ニ關スル國家ノ秩序ヲ擾サントスル所爲ヲ云フ

十二 普通犯トハ刑法ヲ以テ罰スル罪ヲ云フ

十三 特別犯トハ刑法外ノ法律ヲ以テ罰スル罪例ハ軍事犯ノ如キモノ

十四 附帶犯トハ互ニ密接ノ關係アル數罪ヲ犯シタルヲ云フ

○第二條 法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルヲ得ス

(註) 刑法ニ於テ罪トナルヘキ所爲ノ何タルヲ定メタル以上ハ其明文以外ニ罰セラルハ

アル可ラス故ニ如何ナル極惡非道ノ所爲ト雖モ刑法ニ之レヲ罰スヘキ明文ナキニ於テ

ハ之レヲ罪トシ罰スルヲ得サルナリ若シ然ラサランカ人民ハ一日片時モ安堵スルヲ得

ルニ至ルヘシ

○第三條 法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスヲ得ス

若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

(註) 本條ハ刑法既往ニ遡ル可ラサル旨ヲ定ム故ニ唯將來ニ効力アルノミ頒布前ノ犯罪ニ

適用スルヲ得サルナリ蓋シ犯罪ハ其時ニ行ハル、法律ニ對シテ成立スルモノナレハ其時

ニ罪トナラザル所爲ニシテ後ノ法律ニヨリ罪トシテ罰スヘキモノコアラズ然レハ舊法ニ

於テモ罪トシ新法之レヲ輕ク罰スルモ又ハ罪トセザルモハ新法ニ從ヒ輕ク處分セラル、

モノトス但シ犯罪ノ成立頒布以前ニアリテ未タ判決ヲ經サルモノナルヲ要スルナリ

○第四條 此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルヲ得ス

(註) 陸海軍ニハ別ニ陸海軍刑法ナルモノアリテ軍人ヲ支配ス故ニ本法ヲ適用セザルナリ

○第五條 此刑法ニ正條トシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ

若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケタル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ

(註) 刑法ニ於テ罪トセザルモ他ノ法律規則ニ罪ト定メタル者ハ其法律規則ニヨリ罰スヘ

キモノトス然レハ其法律規則ニ總則ナキハ此刑法總則ニ從フヘキモノナリ

第二章 刑法

第一節 刑名

○第六條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セザル者ト定ム

(註) 刑罰ハ主刑ト附加刑トニ區別シ主刑ハ之レヲ言渡シ附加刑ハ之レヲ言渡スヲ要セズ
當然主刑ニ附着スルモノ多シ蓋シ附加刑ハ主刑ノ實効ヲ確クシ再犯ヲ防止スルノ目的ナ

ルヲ以テナリ

○第七條 左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一 死刑

二 無期徒刑

三 有期徒刑

四 無期流刑

五 有期流刑

六 重懲役

七 輕懲役

八 重禁獄

九 輕禁獄

(註) 本條ハ重罪犯ノ主刑ヲ定メタルモノナリ

○第八條 左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一 重禁錮

二 輕禁錮

三 罰金

(註) 本條ニ規定セル刑ハ輕罪ノ主刑ナリ

○第九條 左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス

- 一 拘留
- 二 科料

(註) 本條ハ違警罪ノ主刑ヲ定メタリ

○第十條 左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

- 一 剝奪公權
- 二 停止公權
- 三 禁治產
- 四 監視
- 五 罰金
- 六 沒收

(註) 本條ハ附加刑ヲ定メ後附加刑處分ノ所ニ於テ詳細ノ規定ヲナセリ

○第十一條 刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

○第十二條 死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢シ獄内ニ於テ之ヲ行フ

(註) 本條ハ死刑執行ノ方法ヲ定ム而シテ其執行ハ可成苦痛ヲ省キ迅速ニ生命ヲ絶チ人体ニ形ヲ失ハサラシメントノ精神ヨリ本法ハ絞首ノ方ヲ取レリ而シテ死刑ハ獄内ニテ密行スルモノトス然ラサレハ却テ世人慘狀ノ目撃ニ慣レ殘忍ノ念ヲ起スニ至ルノ弊アルヲ以テナ

○第十三條 死刑ハ司法卿ノ命令ニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

(註) 死刑ハ一度執行スルハ再ヒ回復スルヲ得サルヲ以テ鄭重ニセサル可ラス之レ司法大臣ノ命令ヲ要スル所以ナリ

○第十四條 大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

(註) 死刑大祀令節國祭日ニハ執行スルヲ得ス蓋シ大平ヲ祈ルノ日ニ當リ被告人ノ遺族ニ

流涕セシムルハ人情ニ反スルヲ以テナリ

○第十五條 死刑ノ宣告ヲ受タル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ之ヲ行ハス

(註) 本條ハ刑ハ一身ニ止ルヲ以テ罪ナキ胎兒ヲ罰セサルノ主意ニ出テ死刑ノ宣告ウケタ

ル婦女懷胎ナルハ分娩後百日間其執行ヲ停止スルモノトス

○第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヒテ葬ルコトヲ許サス

(註) 死刑ノ遺骸ハ官費ヲ以テ葬ルモノナレモ若シ親族故舊請フ者アレハ之レヲ下付ス蓋

シ遺骸ニ罪ナゲレハナリ然レモ式ヲ用ヒ葬ルヲ得サルナリ

○第十七條 徒刑ハ無期有期ヲ分テ島地ニ發遣シ定役ニ服ス
有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

(註) 本條及ヒ以下二條ハ徒刑ニ關スル規定ナリ徒刑ハ有期ナルト無期ナルトヲ問ハス島地ニ送リテ定役ニ服セシムルモノトス而レ其無期トハ終身有期トハ十二年以上十五年以下服役セシムルニアリ

○第十八條 徒刑ノ婦女ハ内地ニ發遣セス内地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

(註) 徒刑ノ婦女ハ内地ノ懲役場ニ於テ服役セシメ島地ニ發遣セサルモノトス

○第十九條 徒刑ノ囚六十歳ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス
有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

(註) 徒刑ノ囚六十歳以上ナル者ハ通常ノ役ヲ免シ體質又ハ体力相當ノ役ニ服セシムルモノトス此レ人情ニ基テ派ムモノナリ

(註) 流刑ハ國事犯ノ刑ナレハ定役ニ服セス島地ノ獄内ニ幽閉セシム蓋シ國事犯者ニハ方役ノ屈辱ヲ加フルヲ要セス殘黨ノ通謀ヲ防キ再舉ヲ謀ルノ機ヲ與ヘサルヲ以テ足レリトス

○第二十一條 無期流刑ノ四五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限リ居住セシムルヲ得有期徒刑ノ囚三年ヲ經過スル者又同シ

(註) 本條ハ免幽閉ノ規定ナリ免幽閉ヲ得ルニ左ノ要件具備スルヲ要ス

- 一 無期流刑ノ囚ハ五年有期ナレハ三年ヲ經過スルヲ
 - 二 獄則ヲ謹守シ悔改ノ狀アルヲ
- 此制タル改過遷善ヲ獎勵シ一身一族ノ利益ヲ圖リ社會ニ一人ノ良民ヲ得且再犯ヲ防止スルノ利益アルナリ

○第二十二條 懲役ハ内地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歳ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從フ
重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

(註) 懲役ハ内地ノ懲役場ニ於テ服役セシム其期間ノ長短アルハ刑ノ輕重ヲ區別スル爲メナリ

○第二十三條 禁獄ハ内地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス

重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

(註) 禁獄ハ流刑ニ次ク國事犯ノ刑ナリ故ニ服役セシムルヲナク内地ノ獄ニ入ル、モノトス

○第二十四條 禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス
禁錮ハ輕重ヲ分テ十一月以上五年以下ト爲ス仍ホ本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

(註) 禁錮モ重輕ニ區別シ重禁錮ハ留置場ニ留置キ服役セシムルモ輕禁錮ハ國事犯ノ刑ナ
レハ服役セズ留置スルノミナリ

○第二十五條 定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舎ノ費用ニ供シ其幾分
ヲ囚人ニ給與ス但現役百日以内ハ給與ノ限ニ在ラス

(註) 本條ハ工錢處分ノ規定ナリ本法ハ囚徒ニ出獄後ニ自活ノ道ヲ與ヘ以テ再犯ヲ防クノ
政策ヨリ定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ其幾分ヲ獄舎ノ費用ニ供シ其幾分ヲ囚人ニ給與スル旨
ヲ定メタリ然レモ服役百日ニ滿タサル者ニハ給セサルナリ

○第二十六條 罰金ハ二圓以上ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

(註) 本條ハ罰金ノ規定ナリ罰金ハ禁錮ニ次ク輕罪ノ刑ナリ而メ其額ハ犯罪ノ程度ニヨリ
各本條ニ定ムト雖モ二圓ヲ下ルコトヲ得サルナリ之レ科料高額ト區別スル爲メナリ

○第二十七條 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若シ納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ
折算シ之ヲ輕禁錮ニ換フ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ求ニ因リ被判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限
ハ二年ニ過クルコトヲ得ス

若シ禁錮限内罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除シテ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者代
テ罰金ヲ納メタルモ亦同シ

(註) 本條ハ罰金徵收ノ方法ヲ定ム即チ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納メサル可ラス若シ一

月内ニ完納セサルモハ一圓ヲ一日ニ計算シテ輕禁錮ノ刑ニ換ヘキモノトス假令一圓ニ滿
タサル端數ト雖モ一日ニ計算ス然レモ禁錮ノ期限二年ヲ超ユルコトヲ得ス若シ然ラズトモ
ハ罰金却テ禁錮ヨリ重刑トナリ其權衡ヲ失フニ至ルヘシ而シテ其禁錮期限内自ラスルト他
人ヨリスルトナ問ハス罰金ヲ収メタルモハ其已ニ經過セシ日數ヲ引去リテ禁錮ヲ免スヘ
キモノトス

○第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セズ其刑期ハ一日以上十日以下ト爲シ仍ホ各本
條ニ於テ其長短ヲ區別ス

(註) 拘留ハ違警罪ノ自由刑ニシテ拘留所ニ留置シ服役セサルモノトス而シテ其期間ハ一日
ヨリ十日以内トス

○第二十九條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

(註) 違警罪ノ罰金ハ科料ト云ヒ五錢以上一圓九十五錢以下トス

○第三十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日以内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ第二十七
條ノ例ニ照シ之ヲ拘留ニ換フ

(註) 本條ハ科料徵收ノ規定ニシテ裁判確定ノ日ヨリ十日以内ニ収ムヘキモノニシテ若シ此
期限内ニ収メサルモハ一圓ヲ一日ニ計算シテ拘留ニ處スヘキモノトス假令一圓ニ滿タサ
ルモ一日ニ計算ス

第三章 附加刑處分

○第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

- 一 國民ノ特權
- 二 官吏ト爲ルノ權
- 三 勳章年金位記貴號恩給ヲ有スル權
- 四 外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權
- 五 兵籍ニ入ルノ權
- 六 裁判所ニ於テ証人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス
- 七 後見人トナルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス
- 八 分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會計及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權
- 九 學校長及ヒ教師學監ト爲ルノ權

(註) 本條ハ名譽刑タル剝奪公權ノ規定ニシテ重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ言渡ヲ要

セズ本條ニ規定セル九ケノ公權ヲ終身間失フモノトス而シテ國民ノ特權トハ日本國民ニ限リ其資格ヲ有スル者ヲ云フ例ハ選舉又ハ被選舉權ノ如キヲ云フ以下説明ヲ要セサルヘシ

○第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス修身公權ヲ剝奪ス

(註) 本條ハ前條ニ併セ述ヘタルヲ以テ茲ニ復説セズ

○第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス現在ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公權ヲ行フヲ停止ス

(註) 本條ハ停止公權ノ規定ナリ即チ禁錮ニ處セラレタル者ハ當然現任ノ官職ヲ失ヒ刑期間公權ヲ行フヲ得ス期間内停止セラレ、モノトス

○第三十四條 輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス監視ノ限期間公權ヲ行フヲ停止ス

主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタル者亦同シ

(註) 本條モ全ク停止公權ニシテ輕罪ノ刑ニヨリ監視ニ付シタル者又ハ免刑ニシテ止テ監視ニ付シタル者ハ其監視期間内ハ公權ヲ行フヲ得ス即チ停止セラレ、モノトス

○第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ治

ムルヲ禁ス

(註) 本條ハ禁治産ノ規定ナリ重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ當然主刑執行中ハ自ラ財産ヲ治ムルヲ得ス故ニ其間ハ財産權ヲ處分スル能力ヲ失フモノトス蓋シ在獄中獄吏其他ノ者ニ賄賂ヲ納レ脱獄ヲ計ルカ如キ危険アルヲ以テナリ

○第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルヲ得

(註) 流刑ノ囚徒幽閉ヲ免セラレタルハ行政上ノ處分ニヨリ禁治産ノ幾分ヲ免セラレ蓋シ然ラスハ幽閉ヲ免スルモ其効ナキヲ以テナリ

時間監視ニ付ス

○第三十八條 輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但各本條ニ記載スルノ外監視ニ付スルヲ得ス

(註) 輕罪ノ監視ハ各本條ニ定ムル範圍内ニ於テ宣告スルモノトス

○第三十九條 死刑及ヒ期滿免除ヲ得タル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス

(註) 本條ハ主刑ヲ科セス監視ノミ付スル場合ヲ定ム即チ死刑無期刑ノ期滿免除ヲ得ル者ハ當然五年間監視ニ付スヘキモノトス

○第四十條 監視ノ期間ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キタル日ヨリ起算ス

若シ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算ス

(註) 本條ハ監視期間ノ計算方ヲ定ム即チ第一主刑ヲ終リタル日第二主刑カ期滿免除ヲ得タル日ハ捕縛セラレタル日第三主刑ヲ免シ監視ノ刑ニ付スル日ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算スヘキモノトス

○第四十一條 監視ニ付セラレタル者ハ其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルヲ得(註) 監視ニ付セラレタル者モ假出獄免幽閉ト同シク謹慎ナル日ハ行政上ノ處分ニヨリ假リニ免セラル、トアリ蓋シ監視ハ要スルニ再犯ヲ防クノ目的ニ外ナラサレハ再犯ノ恐ナ

キニ於テハ政策上當然ノトトス監視ニ關スル事柄ハ附則ニ於テ細カニ規定セリ

○第四十二條 附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セサル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁錮ニ換ヘ主刑滿期ノ後之ヲ執行ス

(註) 罰金ハ通常禁錮ニ附加スヘキモノニシテ主刑タル場合甚少シ而シテ罰金ハ輕罪ノ監視ト同シク其最高額ト最低額トノ間ニ於テ實科スヘキ額ヲ定メテ言渡スヘキモノトス若シ一月内ニ納メサル日ハ廿七條ノ例ニヨリ禁錮ニ換ヘ主刑執行ノ後執行スヘキモノトス

○第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタル者ハ各其法律規則ニ從フ

- 一 法律ニ於テ禁制シタル物件
- 二 犯罪ノ用ニ供シタル物件
- 三 犯罪ニ因テ得タル物件

○第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハズ之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルヲ得ス

(註) 此二條ハ沒收ノ規定ナリ沒收トハ犯罪ト直接ノ關係アル物品ヲ剝奪シテ官有トナシ又ハ之レヲ毀壞スルヲ云フ而シテ犯罪ニ直接ノ關係アル物件トハ左ノ三ケノモノヲ云フ
一 法律ニ於テ禁制シタル物件 例ハ偽造貨幣ノ如キ物ニシテ唯タ占有スルノミニテ社會ノ安寧秩序ニ害アルヲ以テ何人ノ所有タルヲ問ハズ行政警察上ノ處分トシテ沒收スル者

トス

二犯罪ノ用ニ供シタル物件 例ハ人ヲ殺スノ用ニ供シタル刀銃劍鎗ノ如キモノ之レナリ
三犯罪ニ因テ得タル物件 例ハ官吏賄賂トノ受ケタル金額偽造貨幣ヲ以テ買入レタル物
品ノ如シ此ニケノモノハ刑罰トシテ沒收スルモノナレハ其物件犯人ノ所有ニ係ルカ又ハ
所有者ナキ場合ニアラサレハ沒收スルヲ得ス

第四節 徵償處分

○第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ
之ヲ定ム

(註) 刑事裁判費用ハ其全部又ハ一分ヲ犯罪人負担セサル可ラス其犯人ノ負担セサル部分
ハ國庫ノ負担トス費用額ハ別ニ法律ヲ以テ定ムルモノトス

○第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラレ、ト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ給還損害
ノ賠償ヲ免ル、トテ得ス

(註) 犯人ハ刑法上責任ヲ免ル、モ民事上ノ責任即チ被害者ノ請求ニ對スル贓物ノ返還損
害賠償ノ責ヲ免ル、ヲ得ス其有罪處刑ノ場合ハ勿論ナリトス

○第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物返還損害賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム
(註) 數人共謀シテ罪ヲ犯シタルハ裁判費用贓物返還損害賠償ハ共犯人連帶ノ責任アル
モノトス

○第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審
判スルヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直ニ之ヲ被害者ニ還付ス
(註) 裁判費用贓物返還損害賠償ハ被害者ノ請求ニヨリ私訴ノ訴トシ公訴ニ附帶シテ刑事
裁判所審判スルモノトス然レモ贓物ニシテ犯人ノ手ニアルモノハ被害者ノ請求ヲ俟タズ
直ニ還付スヘキモノトス

第五節 刑期計算

○第四十九條 刑期ヲ計算スルコト一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以
テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

受刑ノ初日ハ時間ヲ論セズ一日ニ算入シ放免ノ日ハ刑期ニ算入セズ
(註) 本條ハ刑期ノ計算法ヲ定ム即チ本條ニヨレハ一日又ハ數日ノ刑ヲ言渡シタキハ二十
四時ニ其日數ヲ乘シタルモノヲ以テ期限トシ一月又ハ數月ノ刑ナルハ三十日ニ其月數
ヲ乘シタル者ヲ刑期トス故ニ曆ノ日數三十一日廿八日等ヲ問フノ必要ナシ一年又ハ數年
ノ刑ナルハ曆ニ從ヒ刑ノ執行ヲ始メタル年ノ月日ニ中ル月日ノ前日ヲ以テ執行終ルノ
日トス

右計算法ニ從ヒ受刑ノ初日ハ之レヲ一日ニ算入シ放免ノ日ハ刑期ニ算入セサルコトヲ放
免者ニ住家ニ至ルノ時間ヲ與ヘタリ

○第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルヲ得ス

(註) 本條ニヨレハ刑ハ裁判確定ノ後ニアラサレハ執行スルヲ得サルヲ以テ上訴期間ヲ經過スルカ又ハ上告ノ裁判アルニアラサレハ執行スルヲ得ス即チ確定ニ至ルマテ執行ヲ停止スルモノトス

○第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ

- 一 犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス
 - 二 檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トチ分タヌ前判宣告ノ日ヨリ起算ス
 - 三 上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルヲ得ス
- (註) 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算スヘキモノコシテ若シ上訴アリタルハ本條ノ例ヨリ計算スヘキモノトス而メ犯人自ラ上訴シ不當ナリシキ上訴判決ノ日ヨリ起算スル所以ハ上訴ノ濫用ヲ防クカ爲メナリ保釋責付セラレタルハ拘留中ニ非ラサルヲ以テ刑期ニ算入セサルモノナリ他ハ説明ノ要ナシ

○第五十二條 刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

(註) 刑期限内ニ逃走シ再ヒ捕ニ付キタル者ハ逃走中執行ヲ逃レ自由ヲ得タルモノナレハ其日數ヲ引去リ前後受刑ノ日數ヲ計算スヘキモノトス之レ當然ノ規定ナリ

第六節 假出獄

○第五十三條 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ謹守シ改悛ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スヲ得

無期徒刑ノ囚ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ

流刑ノ囚ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

(註) 本節ニ於テハ假出獄ノ規定ヲ爲ス抑モ假出獄ナルモノハ重罪輕罪ノ囚徒獄則ヲ謹守シ悛悔ノ狀アルキハ其刑期四分ノ三無期徒刑ナルキハ十五年ヲ經過シタル後假リニ出獄ヲ

許シ尋常一般ノ生活ヲ爲サシムルヲ云フ然レモ流刑ノ囚徒ニハ免幽閉ヲ與フルヲ以テ假出獄ヲ與ヘサルナリ蓋シ假出獄ナルモノハ囚徒ノ改心ヲ促ス爲メ良方法ナリトス

○第五十四條 徒刑ノ囚ハ假出獄ヲ許サルハト雖モ仍ホ島地ニ住居セシム

(註) 假出獄ヲ許サレタル者徒刑ノ囚徒ナリシキハ尙ホ島地ニ住居セシム蓋シ出獄ヲ停止スルキ再ヒ島地ニ送ルノ手數ヲ省ク爲メナリ

○第五十五條 假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スヲ得但本刑期限内特別ニ定メタル監視ニ付ス

(註) 本條ハ假出獄ノ結果トシテ行政上ノ處分ニヨリ禁治産ノ幾分ヲ免セラル之レ出獄スルニハ自活ノ資本ヲ要スルヲ以テナリ然レモ本刑期間ハ特別監視ニ付セラレ全ク自由人タルヲ得サルナリ

○第五十六條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止ス出獄中ノ日數ハ刑期

ニ算入スルヲ得ス

(註) 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ改心ノ狀ナキ者ナルヲ以テ出獄ノ恩典ヲ奪ヒ出獄ヲ停止シ出獄日數ハ刑期ヨリ引去ルヘキモノトス

○第五十七條 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

(註) 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ犯罪累罪ノ恐レアル患惡ナルモノトシ假出獄ヲ許サ、ルナリ

○第七節 期滿免除

○第五十八條 刑ノ執行ヲ遁レタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

(註) 期滿免除トハ一定ノ期限ヲ經過スルニヨリ公訴若シクハ刑ノ執行權ヲ消滅スルヲ云フ其刑ノ執行權ヲ消滅セシムル期滿免除ハ本法ニ定メ公訴ノ期滿免除ハ刑事訴訟法ニ定ム期滿免除ヲ設ケタル理由ハ歲月ノ久シキニ至レハ世人ハ犯罪事件ヲ忘レ遂ニ之レヲ罰スルノ要ナキニ至リ都テ公益ニ反スルカ故ナリ故ニ期滿免除ヲ得タルハ自ラ刑ヲ受ケントスルモ得ヘカラサルナリ

○第五十九條 主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

- 一 死刑ハ三十年
- 二 無期徒刑ハ二十五年
- 三 有期徒刑ハ二十年

四 重懲役重禁獄ハ十五年

五 輕懲役輕禁獄ハ十年

六 禁錮罰金ハ七年

七 拘留料料ハ一年

(註) 本條ハ期滿免除ヲ得ルノ期限ヲ定ム故ニ本條ニ定ムル期間刑ノ執行ヲ脱レタルハ最早刑ヲ受クルモノニ非ラサルナリ

○第六十條 剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス

附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得

沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除ノ限ニ在ラズ

(註) 本條ハ附加刑ノ期滿免除ヲ定ム即チ附加ノ罰金ハ主刑ト連命ヲ共ニ沒收ハ五年ニテ期滿免除ヲ得ルモノトス然レハ禁制物ハ公益ニ干スルモノナルヲ以テ期滿免除ヲ得ス又剝奪公權停止公權監視モ期滿免除ヲ得ス蓋シ其等ハ執行スルヲ得サルモノナレハ執行ヲ免レタリト云フヲ得サレハナリ

○第六十一條 期滿免除ハ刑ノ執行ヲ遁レタル日ヨリ起算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ闕席裁判ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス

(註) 執行ヲ脱シタル爲メ期滿免除ヲ得ルモノナレハ其期間ハ脱レタル日ヨリ起算スハ當然ナリ又再度ノ逃走ナルハ再度ノ逃走ノ日ヨリ起算シ欠席判決ナルハ裁判官渡